

山崎尚長の『両国壬辰実記』と刊本『正実 朝鮮征討 始末記』

中野, 等
九州大学大学院比較社会文化研究院 : 教授

<https://doi.org/10.15017/1546846>

出版情報 : 九州文化史研究所紀要. 55, pp.33-130, 2012-03-30. 九州大学附属図書館付設記録資料館九州文化史資料部門
バージョン :
権利関係 :

山崎尚長の『両国壬辰実記』と

刊本『正実 朝鮮征討始末記』

中 野 等

はじめに

改めて言うまでもなく、ひとつの史実が記録され継承され、さらに後世へと伝えられていく過程はその時々時代の背景や社会の状況と無関係ではない。史実の忠実な復元に努めることは別の次元で、時代性や社会性が史観や問題関心を規定していく。ここ数年、筆者が研究の主題としている「戦争」についても例外ではない。戦略・戦術・戦闘といったひとつの「戦争」がもついくつかの次元・局面と、さらにその戦争がどのように記憶・記録され、継承されていくのかという学説史・研究史など広義の「戦史」などについては、相互に弁別して考えていくべきであろう。こうした関心から、筆者が通史叙述をおこなった経験をもつ豊臣政権の「大陸侵攻」(いわゆる「朝鮮出兵」「朝鮮侵略」)を対象に、近世から現代にいたる学説史の整理をいくつか試みてきた。⁽¹⁾ 史料紹介のようなかたちをとりつつも、小論はその一環をなすものである。

表題にあげたように、小論では対馬藩宗家の山崎尚長が編んだ『両国壬辰実記』と刊本『正実 朝鮮征討始末記』をとりあげる。ただ、こういう言い方は厳密ではない。山崎尚長は「大陸侵攻」の前提から戦争の終結までを『両

『国壬辰実記』としてまとめた。一方の『正実 朝鮮征討始末記』は尚長の没後、新たな序を得て『両国壬辰実記』の前半部を刊行したものである。『正実 朝鮮征討始末記』の全編を翻刻し紹介するにあたって、まずこの両書の梗概を述べ、両書の「あいだ」にあるものを、時代性などを勘案しつつ検討していきたい。⁽²⁾

一、対馬藩士山崎尚長

少々長くなるが、まず対馬藩藩士（馬廻・大小姓）の「奉公帳」から『両国壬辰実記』の編著者である山崎尚長の履歴を確認しておく。⁽³⁾

「文化二乙丑年八月廿八日病死」（後筆）

藤原尚長^{ヒサナカ}

山崎初右衛門

- 一、宝曆拾三癸未年九月廿六日、父清太依願、無録ニ而持格大小姓ニ御奉公出被仰付
- 一、同年十月十六日、高倉流御衣紋方御納戸掛中へ致指南候様被仰付
- 一、同年十二月廿五日、仮御納戸掛被仰付
- 一、明和元甲申年七月廿九日、亡父清太跡式無相違被仰付、式人扶持御切米式石被成下
- 一、明和元甲申年九月六日、御懸物掛被仰付
- 一、同二乙酉年正月廿八日、旁之勤方を以、耆人扶持壺石御足米被成下、但委細日帳ニ有之
- 一、同年八月十五日、来戌年御小姓組ニて江戸御供被仰付、翌戌九月十六日大坂迄之御供被仰付、同年九月廿二

日入船、翌亥正月十六日入船

一、同年九月九日、奥御佑筆仮役被仰付、翌戊八月廿日被差免

一、同三丙戌年八月十日、奥附二被仰付、御礼等も向後奥二而被仰付、委細日帳二有之

一、同年九月十六日、盛姫様御上京之節、御目付御賄頭御膳番兼帶勤二而御供被仰付、翌亥ノ四月廿二日出船、同

五戊子十一月九日入船、翌丑四月朔日出船、但先達而御小姓組二而江戸御供被仰付置、**■**ク上船をもいたし居候付、大坂迄御供仕、京

都江御用之筋も有之候付、罷登相濟次第御国へ罷下り候様被仰付

一、同四丁亥年二月廿二日、豊姫様御上京御供被仰付置候処、安姫様御同船二而御上京被成候付、御船中於

京都も、御入輿迄ハ、御双方様御用兼帶被仰付

一、同年三月八日、豊姫様御供勤役之内俵取二被仰付

一、安永弍癸巳年閏三月十日、御簾中様附依願被差免、京都銀方役被仰付、御簾中様御用をも承候様被仰

付、同年十四日最前之通勤役中俵取被仰付

一、同年十月廿一日、来午年一特送使都船主被仰付、同末ノ正月十七日依願川辺栄介為名代被差渡、但巳ノ七月迄ニして委

細日帳二有之

一、同年十一月二日、就御用京都中帰国被仰付則着船、同十二月八日御用相濟帰京被仰付、同十五日出船、安永

四乙未年五月晦日就御用中帰国則入船

一、同四乙未年七月四日、添勘定被仰付銀方役ハ被差免、同八日京都銀方兼役被仰付、翌申正月六日不遠帰京被仰付候段被

仰付

一、同年七月六日、被称勤方一生俵取昇進被仰付

一、同年七月九日、御衣文師二家業替被仰付、委細ハ日帳有之

一、同年七月九日、朝鮮御用銀香具**■**加役被仰付

一、同五丙申年七月廿二日、京都御留守居被仰付、勤役御馬廻昇進御勘定奉行被仰付、同九月晦日 大西様御逝去
二付御吊詞之御使者御代香被仰付、同十月五日出船、甲辰ノ五月廿日就御用中帰国則入船、同十一月廿九日帰京被仰付、翌乙巳四月廿三日出船、寛政三辛亥十月廿三日入船

一、同年八月廿日、御參勤御用掛被仰付、十一月廿九日帰京被仰付、翌乙巳四月廿三日出舟、寛政三辛亥十月廿三日入舟

一、天明四甲辰年十月廿六日、来巳年條別特送使副官人被仰付、翌乙巳十月廿二日依願為名代大浦蒨被差渡候様被仰付、

但甲辰五月廿日中帰国被仰付候月数迄ニして被召仕候

一、寛政元己酉年八月十日、来戌年一特送使正官人被仰付、同戌二月十三日依願乾斜右衛門為名代差渡、但酉ノ七月迄之月数ニして被召仕

一、同三辛亥年二月八日、親類五十嵐文治不埒之品ニ付閉門被仰付、依伺留守差控被仰付、同九月被差免

一、同年十一月四日、中御形御用掛被仰付、同七乙卯年九月十九日旅行ニ付被差免

一、同年十一月九日、小鼓相心得之人ニ付、此節小鼓御指南申上候様被仰付

一、同四壬子年十月八日、朝鮮一代官被仰付、同廿日願之品今被差免

一、同五癸丑年正月十三日、下野様兵学御師範被仰付

一、同六甲寅年九月七日、朝鮮一代官被仰付、翌卯十月十二日出船、寛政九丁巳十二月朔日入船

一、寛政七乙卯年正月廿七日、當時御船奉行兼勤被仰付、同九月廿八日朝鮮へ被差渡候付、兼勤被差免、同八

丙辰正月廿八日館守病死ニ付新館守被差渡候迄館守方御用兼帯被仰付

一、同拾壺己未二月廿一日、御主法方加役ニ被差加

一、同年三月廿四日、御婚礼御用掛被仰付

一、同年十二月廿二日、御前様御傳役ニ転役被仰付、享和元辛酉年七月十六日、田代表役被仰付候間、御縁女様御傳役ハ被差免

一、同年十二月廿三日、是迄被称勤方永々俵取ニ被仰付、是迄之通勤役御馬廻被仰付

一、同年十二月廿四日、席之儀前役御勘定奉行入合席ニ被仰付

一、享和元辛酉年七月十六日、田代佐役中村郷左衛門為代被仰付、在役中御馬廻格被下置田代表役与被仰付急

ニ被差越候、尤兼而被仰付置候御縁女様御傳役之義ハ此節被差免候旨被仰付、同廿四日依願田代表役被差免

一、同年七月廿四日御縁女様御傳役被仰付、席之義も最前之通被仰付、享和式壬戌年九月廿日、長崎役被仰付候付被差免

一、同二壬戌年正月十五日、御勘定奉行入合席被下置候処、御礼席之義伺出御用人格之人表御礼被仰付候ニ被

準、初右衛門義表御礼ニ被仰付、委細日帳在之

一、享和二壬戌年九月廿日、勤役中御馬廻格ニ而長崎役被仰付、同十二月十日出船、文化二乙丑年五月廿九日

入船

一、文化二乙丑年七月十七日、当年七拾五歳相成候付、定夜番御免被仰付

「持之月数御見込嫡孫此橘江御約束ニ相分」(朱書)

右に示したように「奉公帳」という記録は個人単位で藩からの任免状況が書き上げられている。基本的には時間を追って綴られているが、場合によっては任命の箇条に後日の免職の情報が書き込まれていることもあり、いささか読みづらい部分もあるものの、山崎初右衛門尚長の履歴はこれによって一応明らかにされる。当初、奥方に関わっていた尚長は安永五年にいたって京都留守居、勘定奉行に任じられる。さらに寛政七年には船奉行となり、一代官として朝鮮へ赴くことになる。その後は田代表役や長崎役などを勤めている。また、藩政表方の要職にあった間も奥方には関わっており、なかなか有為な人物であったことがうかがえる。いずれにしろ、朝鮮方だけのエキス

山崎尚長の『両国壬辰実記』と刊本『正実 朝鮮征討始末記』

パートというより、表方・奥方を越えて対馬藩の中枢に実務をもって関わった人物と云えよう。「大陸侵攻」の前提から戦争の終結までを綴った『両国壬辰実記』とは、こうした特徴をもつ人物によってまとめられたのである。

二、『両国壬辰実記』について

刊本としての『両国壬辰実記』の存在は把握されておらず、現状では内閣文庫に二点、長崎県立対馬歴史民俗資料館に一点の計三点の写本が確認されるのみである。このうち、内閣文庫所蔵本の一点には、次のような奥書がある。

於朝鮮国慶尚道東萊郡釜山鎮

一代官 山崎尚長 撰

時

本朝寛政八年丙辰蒲月

朝鮮乾隆六十一年

これに従うと、尚長は寛政八（一七九六）年五月（蒲月）に慶尚道釜山で『両国壬辰実記』をものしたとある。さきの「奉公帳」によると、尚長は寛政六年九月七日に「朝鮮一代官」に任じられ、翌七年九月初旬に渡海している。対馬への帰還は九年十二月のことなので、この間の釜山草梁和館（倭館）駐在が確認される。「一代官」という肩書きも整合しており、奥書の信憑性は確認できよう。加えて、八年正月に館守が病死しているので、「館守方御用」を兼帯するという、非常に重要な職務を担った。いずれにしろ、館守代理を勤めている時期に、尚長は『両国壬辰実記』をまとめたことになる。内閣文庫所蔵の一点によって、『両国壬辰実記』の構成をみておくと、次のよう

になる。

尚長は巻頭に貝原益軒の「懲毖録序」と柳成龍の「懲毖録序」をかかけ、ついで凡例、朝鮮国歴代略記、朝鮮国八道、朝鮮国八道全図、総目録（目次）があり、これに巻之第一から巻之第五におよぶ本編が続く。「懲毖録」の著者柳成龍は日本の侵攻時、宣祖のもと左議政兼兵曹判書を勤めた人物であり、その後失脚するが平壤回復後には領議政として復活し、京畿・黄海・平安・咸鏡道体察使を兼ねた。「懲毖録」はそうした政府高官としての立場から、この戦役全般を論じたものであり、執筆の目的は「予、それを懲りて、後のわざわいをつつしむ」ことであつた。朝鮮王朝は国家機密の流出を恐れて、「懲毖録」の日本での出版を嫌つたといわれるが、流出は根絶される事はなかつた。結果的に、『懲毖録』は元禄八年に至つて日本で刊行されることになる。ここには、福岡藩備具貝原益軒が序文を寄せており、そこには「伝曰、用兵有五、曰義兵、曰応兵、曰貪兵、曰驕兵、曰忿兵、五之中、義兵与応兵、君子之所用也、伝又曰、国雖大、好戦則必亡天下、雖安、亡戦則必危、好与亡二者、可以不戒守哉、曩昔、豊臣氏之伐朝鮮也、可謂貪兵兼驕与忿、不可為義兵」とある。益軒は戦争を義兵、応兵、貪兵、驕兵、忿兵の五つに分けた上で、秀吉による「大陸侵攻」（朝鮮出兵・朝鮮侵略）を貪兵・驕兵・忿兵であるとす。義兵とは位置づけられておらず、益軒は明確に否定的な立場をとつている。

さて、『両国壬辰実記』を編むに至つた経緯を尚長は凡例に綴つている。内閣文庫本『両国壬辰実記』の凡例は全七箇条である。『正実 朝鮮征討始末記』とは構成を異にするものの、そこから末尾の二件をのぞいたものとはほぼ等しい。したがつて、おおまかには後掲する『正実 朝鮮征討始末記』の凡例を参照すれば事足り部分はあるが、欠落する箇所もあり、文字遣いなどにも異動もあるので、重複を慮れず次に紹介する。

凡例

一、豊臣家ノ朝鮮ヲ征伐セル事蹟ヲ記セル書編、朝鮮征伐記・朝鮮太平記ヲ始メ、諸家の記録、且事ニ遇タル

物師ノ物語、子弟等ノ聞書・覚書連、世ニ伝ル物少カラズ、何レモ実説ナルコト必セリ、但異域ニテノ鬪戦已ニ二百年ヲ経タレバ、其事蹟ノ語り伝ヘ等ニ至リ、魯魚烏焉馬ノ誤、三豕渡河文変之謬リ等無ニシモ有ヘカラサレハ、朝鮮ノ事蹟ト日本ノ記録セルモノヲ牽合セ、件々ヲ参考シテ、輯録セル者也、此ニ漏シタル虚ト云ルニハ非ス、鷄林モ頗ル騷擾ノ砌ナレハ、必定遺漏セルモノ数件アルヘケレハナリ、

一、朝鮮ノ事蹟、柳成龍カ著述ノ懲毖録ヲ、对州ノ儒員某、和解セル有リ、今次予在韓中ニ朝鮮板ノ懲毖録ヲ熟閲シ、證書ヲ以テ前儒ノ和解ヲ妄リニ、添削ヲナスモノ多シ、

一、懲毖録ノ文段ニ我ニ用ナキモノハ省略セリ、又卷ノ始端、柳成龍述言ト書載セルハ、同書成龍カ序ニ粗述ニ、其耳目所逮者、自壬辰至戊戌、総若干言ト云ヘルニ本ツケリ、

一、分註ハ別書ニ證トスヘキ件々、官職・位階ノ大概且道里ノ都合セルモノ、其外今次在韓中、判事通詞ニ聞ル処ノ直話等ヲ書載ス、卷中一件モ憑拠ナキハアラス、聊モ一已ノ杜撰ハ堅ク禁ス、

一、一書ニ加藤清正、陥踏兀良哈事、或清正於女直合戦、附攻落濟州事ナント云ルハ、更ニ拠ナキ謬説也、清正ハ朝鮮北地、咸鏡道鏡城会寧迄攻入ラレタルコトニテ女直界トハ云ヘトモ、女直迄ハ未タ遼カニ隔タリタルコト也、又同書ニ女直ト兀良哈ヲ同国トセシカトモ、是亦相違セリ、清ノ燕京ノ東遼東ナリ、遼東ノ東北ヨリ朝鮮国ノ北迄居夷、女直ナリ、遼東ノ西北ヨリ燕京ノ北、官府ノ東迄ノ間ニ居ル夷、兀良哈ナリ、女直ト兀良哈トハ別種ナリ、増テ朝鮮咸鏡道ト兀良哈トハ方角違ヘリ、又清正濟州ヲ攻落シタルト云モ謬説ナリ、濟州ハ朝鮮南海中全羅道ノ洋ニ日本里程ニテ、凡七里程出離レ、往昔耽羅国ト云タル一島ニテ日本五島ト対頭スヘトシ云ヘリ、咸鏡道ハ凡蝦夷ト遙ニ対頭スヘシト云等ハ、南北大ニ相違セリ、因テ是等ノ説ハ悉ク棄テ取ラス、

一、对州ノ儒員雨森伯陽東五郎ト云、木門ニテ江州ノ産也、又芳洲ト号門下、朝岡蘭畹初太郎八後一学ト云延享信使来聘ノ

時、真文役タリ対州ノ儒員文学ヲ以テ任ス朝鮮製造官來聘ノ文書ヲ掌ル典籍朴敬行客路ノ晩宿ニテ前日俱ニ見タル処ノ碑文ヲ問フ、蘭畹直チニ筆ヲ馳ルコト、三百余字一字亡失ナシ、一行舌ヲ卷ク博聞強記、韓人ニ贊美セラ、宝曆初年予京師ニテ蘭畹ニ此事有哉否ヤヲ尋シニ、頓テ筆ヲ執テ書シテ予ニ与フ、延享ヨリ五七年ヲ經タレトモ更ニ失念ナシ、都テ強記斯ノ如シ、蘭畹素リ壬辰役ノ事蹟ヲ諳ス、頗ル詳也、予深ク信シ、蘭畹ノ説ヲ取レルモノ梢コレアリ、

一、壬辰ノ役ニ対州ハ日本諸総軍ノ郷導ナレハ、諸大将衆ニ案内者ヲ附ケ、既ニ加藤殿ニ相附レタル服部何某ト云ヘル者、清正ノ吸拳ニテ王子ヲ擲ニセラル時ノ功太閤ヨリ陣羽織ヲ恩賜アリ、子孫今ニ其外套ノ切レヲ、伝來セル類アリ、朝鮮太平記卷ノ五、日本諸將於忠州会合、附加藤・小西口論ノ条下ニ、去ル天正十六年肥後一國ヲ加藤・小西兩人ニ下サレケルニ、行長カ領分天草郡ノ地侍一揆ヲ起シ、己カ城々ニ楯籠リ、行長己カ手勢六千五百、小勢ニテ叶マシキコトヲ知り、清正一万兵士ヲ帥テ、川尻ヨリ発船シ、忽チ志岐・本渡・天草等悉ク攻落シ、即平均ニソナリタリケル、左アレハ清正此事ヲ以テ、行長耻シメケル、斯テ清正ハ宗対馬守義智方へ使ヲ以テ、都城へノ案内者ヲ乞ケレハ、徳右衛門ト云ヘル通詞ヲ一人遣ハサレ、義智ハ行長ト縁者タル故ニ、未タ朝鮮ノ王城ニ行タルコトモナク、然モ言舌吃リテ、物ノ用ニモ立マシカリケルヲ遣サレケルトソ聞ヘシ、○右太平記宝永二年乙酉ノ開板ニテ、コノ偽説、世ニ伝ルモノ殆ト百年ニ至ル、因テ清正ニ相附セラレタル案内者、服部某ヲ吹籠アリシ実説ヲ拳ル、増テ朝鮮ニテ將士卒鬪戰ニ粉骨ヲ尽セシ件々戰死モ亦少カラスト雖モ、著述ノ煩瑣ヲ厭ヒ、一ニヲ拳テ余ヲ省ケリ、日本勢渡海十萬ニモ及ビ、都テ是對州ヲ經サルハ無シ、國ニ残リシ老幼病痾支離ノ輩モ程ニ附テ、客船ノ用度ヲ弁セシム、婦女ハ一廊ニ居シテ布帆等ノ虧損ヲ補ハシム、壬辰ヨリ戊戌迄七年間、兵士ノ軍勞ハ言ニ及ハス婦女ニ至ルマテ、疲勞セシ件々枚拳ニイトマアラス、

秀吉の「大陸侵攻」からはすでに二百年の歳月を隔てており、史実自体に混乱を生じているという意識が尚長にはあった。雨森芳洲の門下として学名の高かった博覽強記の人朝岡蘭畹について親しく「大陸侵攻」（壬辰ノ役）の

詳細を学んだ経験をもっており、尚長はこの朝岡蘭暎という人物と彼の該博な知識には篤い信頼を寄せていた如くである。蘭暎はもともと畔蒜（阿比留）伯麟という名で雨森芳洲の門下にあった。享保十四（一七二九）年芳洲は朝鮮に赴くにあたり松浦文平、畔蒜（阿比留）伯麟、大浦徳太郎らを伴った。この時の和館滞在は一年半の長きに及び、実地での勉強はかれらの大きな財産となる。松浦文平は芳洲の次男で実子のなかつた松浦霞沼の養子となり、大浦はのちに益之進（号は東臯）と名を改めて朝鮮向御用の真文役となる。畔蒜（阿比留）伯麟ものに名を朝岡一学と改め、蘭暎と号してやはり真文役を勤める。真文役とは漢文の外交文書を解読し起草する役職であり、漢文の素養と外交の見識を必要とする高度な専門職である。

朝鮮側の根本史料である柳成龍の『懲毖録』については兼ねてから和文に訳されたものを知っていたが、和館に渡った尚長はそこで朝鮮版の『懲毖録』を実見する機会を得、和訳本との校合をおこなった。蘭暎から得ていた知識の記録化という欲求を、朝鮮版『懲毖録』との出会いが後押ししたようである。しかし、より根本的には郷国たる対馬に対する強い想いがあつたことは否定できまい。加藤清正と案内者服部某に関わるエピソードなどは朝岡蘭暎の教示かとも思われる。いずれにしろ、こうしたやや些末な情報まで凡例に書き込む姿勢の背景には、『朝鮮征伐記』や『朝鮮太平記』などに載って流布している情報より、対馬の地・対馬の人に蓄積された学知の方が遙かに高い信憑性を有するという尚長の信念めいた想いがあつたように見受けられる。

本編の構成は個々の主題に沿って日本側と朝鮮側とをまとめていくというものであり、双方向的にこの戦役をみていこうとする立場は明確に具体化されている。まさに『両国壬辰実記』の書名に相応しいもので、冒頭に日・朝の『懲毖録』序を掲げるのも周到な意図に基づく。

その後の歴史過程における対馬の立ち位置についても凡例の最後の箇条において詳らかに論じられている。山崎尚長が『両国壬辰実記』を編んだ寛政期、対馬藩は朝鮮通信使をめぐって非常に大きな転機にあった。三代将軍徳

川家光の將軍就職を祝賀するため派遣された寛永元（一六二四）年の第三次回答兼刷還使が前例となり、朝鮮王朝は新たな將軍が就任するたびに使節（通信使）を日本に派遣した。天明六（一七八六）年十代將軍家治が没し、家齊が十一代將軍となると、朝鮮は前例に基づいて通信使の派遣を幕府に打診する。しかしながら、幕府は当時緊縮財政の真つ直中にあり、多額の支出が見込まれる通信使來聘の費用を大幅に節減すべく考慮していた。同じく財政上の問題から、対馬藩宗家も來聘には消極的であつたとされる。こうしたなか、検討の俎上に載つてきたのが、対馬での易地行聘である。これは通信使を江戸で応接するのではなく、対馬で來聘をおこなうことを意味する。結果的に、幕府は文化元（一八〇四）年に至つて、対馬での易地來聘に内定をくだす。主題からずれてしまうので、ここでその詳細に立ち入ることはしないが、この問題は幕藩体制の下における対馬・対馬藩宗家の有り様を規定する根本問題であり、この過程で藩内を二分する派閥抗争にまで進んでいった。⁽⁶⁾

ここでの関心に戻すと、こうした緊迫した政治環境のなかで草梁和館の館守代理という職にあつた山崎尚長が『両国壬辰実記』を著していたということである。和戦のいづれにあつても、日本（徳川幕府）と朝鮮王朝の間には対馬・対馬藩宗家が存在するという、いわば「自画像」として『両国壬辰実記』を位置づけることができるのではないか。翻つて、『両国壬辰実記』は最末巻を「和交成就、通信使渡海、両国太平之事」という項で結んでいる。ちなみに、末尾の部分は次のような記述となつている。

：慶長九甲辰年又孫文彥并釈惟政松雲大師ト称スト云ル両使來り、和議ヲ談ス、対馬守義智両使ヲ伴ヒ、甲辰十二月京師ニ達シ、翌慶長十乙巳年二月東照大君 台徳大君へ朝鮮ノ両使拜礼奉ツリ、本多佐渡守・釈承兌相国寺住職 上命ヲ奉シ、使館へ來り、和好ノ儀ヲ兩使へ申含メラレケル、其年日本ヨリ朝鮮へ 国書ヲ遣ハサル、慶長十二丁未年朝鮮国王ヨリ通政大夫呂祐吉・通政大夫慶暹・通訓大夫丁好寛ヲ三使トシテ、一行凡四百六十九人和好ノ国書ヲ持來リテ捧ケ奉ル、此時両国ノ和好全ク成就シ、東照大君ノ聖慮ヨリ朝鮮旧怨ヲステテ、新好

山崎尚長の『両国壬辰実記』と刊本『正実 朝鮮征討始末記』

ヲ結び、両国ノ士民、太平ノ徳化ヲ蒙リ奉リ、万民万歳ヲ称シ奉リケリ、

山崎尚長も言及するように、当時「大陸侵攻」に関する基本的な書目としては『朝鮮征伐記』『朝鮮太平記』『朝鮮軍記大全』などがあげられる。これらは朝鮮半島から帰還した日本の諸将が伏見に登るところまでで記述を終えており、朝鮮使節の来日などに言及することない。『両国壬辰実記』の末尾はまさに特徴的と言えよう。⁽⁷⁾もとより軍記物であり、戦闘に関わる描写が多いが、そこにこめられたメッセージは「戦争」に限定されるものではない。

三、『両国壬辰実記』の改訂

寛政八（一七九六）年五月になった『両国壬辰実記』は『正実 朝鮮征討始末記』として刊行される迄に、幾度かの改訂をうけたようである。究明の手がかりとなるのはやはり凡例である。前掲した『両国壬辰実記』の凡例と後に紹介する『正実 朝鮮征討始末記』の凡例を比較すれば明瞭になるが、両書の間には大きな異動が認められる。『両国壬辰実記』の七箇条の内容は五箇条分に再構成され、新たな内容が二箇条分増補されている。

この新たな凡例二箇条はいずれも改訂に関わる内容である。これによると、具体的な増補の内容はこの間における明国・明軍の動向をより明確に把握するため、新たに『武備志』の「朝鮮考」と『征韓記』などの記述を援用したこと、および長崎に赴任した際、該地で下役となった「本国の象官」朝野某から得た知見によって、朝鮮（鶏林）に関する記述を大幅に改めたことの二件である。いうまでもなく、「象官」とは中国周代の官名「象胥」に由来する表現で、通訳・通詞を意味する。他にも対馬藩の通詞小田幾五郎の著書に『象胥紀聞』などがあり、その用例が知られる。

さて、冒頭にあげた「奉公帳」に「享和二年戊辰九月廿日、勤役中御馬廻格ニ而長崎役被仰付、同十二月十日出

船、文化二乙丑年五月廿九日入船」とあることから、尚長の長崎駐在が享和二（一八〇二）年の年末から文化二（一八〇五）年夏におよぶことが分かる。したがって、長崎に派遣されていた対馬藩の通詞朝野某に朝鮮の事蹟を問い糺し改稿をおこなったというのはこの間のことであろう。

尚長は長崎から対馬に戻ったその年の八月には没しているので、『武備志』や『征韓記』などによる改訂はそれ以前に併行して進められたのであろう。これに関わって、顕著な痕跡が『正実 朝鮮征討始末記』巻之一に確認される。

壬辰役発端之事

宗対馬守義智到于朝鮮之事

通信使入洛到聚楽亭附帰国之事

琉球朝貢并和情報大明之事

宗対馬守義智重到朝鮮之事

日本諸將朝鮮渡海小西行长攻落釜山城之事

これは『正実 朝鮮征討始末記』巻之一の構成であるが、このうちの「琉球朝貢并和情報大明之事」については寛政八年段階の『両国壬辰実記』にあがっていない。『正実 朝鮮征討始末記』の「琉球朝貢并和情報大明之事」は、『両国壬辰実記』における「通信使入洛到聚楽亭附帰国之事」の後半を増補して、独立させたものである。すなわち、左に引用する部分が文化八年の『両国壬辰実記』には見られない。逆に言うと、この部分を増補して、新たに「琉球朝貢并和情報大明之事」なる項をもうけたのである。

日本 此時琉球國王を尚寧と云へり父尚永近ごろ逝去して尚寧その譲りを受け國內安泰にして五穀豊饒なり太閤秀吉兼々其威を大明迄も輝かさむと欲して先朝鮮を征伐の心あるに琉球もまた大明に属従すと聞えけるゆゑ

是をもさきに従がへむとて薩州の島津義弘に命ぜられ貢物を捧げ服従すべし若ししからずむバ大軍を下し攻むばさむと云ふこと義弘より天龍寺桃庵和尚を使として琉球の長吏鄭廻と云ふ者に其由を通じけるに尚寧も父逝去して程無ければ只管異なきを冀ふ所にて違背なく其命に従ひ大慈寺西院と云へる僧を以て種々の貢物を献じぬ使僧日本へ渡海し京都に上り聚樂亭に至りければ太閤秀吉對面ありて使僧以下饗應種々丁寧なり秀吉の給く遠く海路を経て聘礼を致し吾命に随ふ事神妙なり就てハ今より大明への通信を絶ち貢船を止むべし汝國に歸りて此事を尚寧に語り琉球より大明へ使を遣し日本へ聘礼を通ずべき旨宜く取繕ふべし大明此事を承引せずんは吾兵を發して征伐すべし早く此事を告ぐべしとなり使僧節を持って歸りて琉球王へ太閤の嚴命を達しければ是に於て衆議區々なりしが終に鄭礼と云ふ臣をして福建に渡海せさせ巡撫使趙參魯を以て明朝へ奏達けり福建に琉球館あり琉人在館して修学せり又福建の許儀俊と云ふ者日本に擄となりて薩州にあり同郷の朱均旺と云ふ者とともに太閤の外侵の志ある事を伝へ聞て福建の守臣に告げ又陳申と云者琉球に寓居したりしが大明に圍り此事を奏しけり朝鮮よりは未だ注進無きゆゑ若くハ日本に志を通じ二心ありてこの事を奏さざるかと人皆疑ふ程に朝鮮の使臣大明に至り和人まさに變を生し入寇近きに有べき旨を奏聞せり

韓記曰秀吉遣書于琉球其趣曰吾勃興于蓬茨順武威之運六十餘州既入穀中殊域遐方來庭者不少吾將征大明是天所授也叢尔琉球未通聘帛吾欲遣兵征之而原田孫七郎以商船之有利故屢往來于琉球此日俾近臣達告吾曰速赴琉球說本朝征國之旨則其來享不可疑焉是故余暫宥之來春出師之日速可來謁若怠而不到則其必遣大兵燒其城郭鑿其島民不可運于掌上琉球得此書大驚使官臣鄭礼齋之赴于大明依福建巡撫使趙參魯而告日本入寇之旨又江右人許儀近歲在薩摩而事医業與同郷朱均旺相議乃依福建守臣告之守臣達之大明帝未敢恐之唯命海邊兵士整調軍船而已琉球亦不及聞翰而止焉

嚮に朝鮮より通信使を渡し、時太閤の命に吾れ大明に通ぜむと欲す朝鮮王先導すべしとなりよつて朝鮮よりも

使臣をして大明に事情をうつたへけるとなり太閤先朝鮮を征伐有べしとの事ハ琉球國よりも連に注進しける程なれば西南の異邦へも大に聲聞しけるときこえて南海中の諸蕃多く大明へ服従し朝貢せる中にも暹羅國は大明へ使を遣し表を奉り貢ぎものを捧げ且量衡をも乞國中の式としてこれに従ひしなれば援兵も遣はさむと奏聞せしとなり

白石新井氏采覽異言曰萬曆二十年九月経略侍郎宋應昌奏達暹羅國王使握叭喇等願督兵蕩勦倭巢是我勝國主侵伐朝鮮時事也萬曆二十歲次壬辰當文祿元年

ここで気になるのは、「韓記曰」「白石新井氏采覽異言曰」という具合に、『征韓記』（凡例にみえる『征韓記』）や新井白石の『采覽異言』から引用は、地の文章に反映させず、直接引用のかたちをとっていることである。「韓記曰」あるいは「征韓記曰」から始まる箇所は他にも二カ所見られるが、凡例で同列に論じられる『武備志』『朝鮮考』についてはこうしたかたちでの引用は確認されない。

この間の事情は詳らかにできないが、尚長は長崎から戻って数ヶ月のうちに亡くなってしまうので、あるいは『武備志』『朝鮮考』などによる補訂には至らなかったのではなからうか。

いずれにしろ、その没後、文政十一年までに改訂版としての『両国壬辰実記』が成立する。これは『正実 朝鮮征討始末記』にも収められた「文政戊子年夏日／対州講官 川士纓撰／大竹篤造」の「原序」からあきらかになる。「原序」（いうまでもなく、改訂版では「序」という扱いであったと考えられる）の詳細は後掲史料編に譲るが、書名に「両国」と冠した所以を述べている。ここで撰者として名があがる「川士纓」とは川辺士纓のことである。川辺士纓の本名は川辺清、通称は清次郎と称した。士纓は字で、はじめ号は君纓また滄浪としたが、のちに橘亭と号す。このため、一般には川辺清次郎あるいは川辺橘亭として人口に膾炙する。主な著作には『宗氏始祖実録』『帰鶴浪観』『草梁日記』『橘亭文集』『橘亭詩集』などがある。幼年の頃、大浦東臯に朱子学を学んだ。強記博識として知

られ、寛政四（一七九二）年藩校たる小学校の読書代用指南となり、享和元（一八〇一）年、朝鮮方御用見習、翌年には小学校の学頭に任じられる。易地来聘に対応するため、文化四（一八〇七）年朝鮮に派遣され、朝鮮方横目となった。ちなみに、この前年幕吏土屋帯刀の奨めによって、平山東山が編んだ『津島紀事』を漢訳し幕府に献上している。これは信使来聘の準備に林大学頭が対馬を訪れていたためであり、これによって対馬の歴史・地理・風土の明細を幕府に伝えようとしたといわれている。⁽⁹⁾ 同八年の対馬府中での聘礼では真文役兼来聘御用掛として活躍した。小学校指南なども兼ね、永代大小姓に進む。文化十四（一八一七）年藩主の侍講となり、天保八（一八三七）年四月に没す。⁽¹⁰⁾

『両国壬辰実記』に序をよせた頃、土纓川辺清次郎は対馬藩朱子学の中心人物として藩主の侍講（講官）を勤め、同時に朝鮮方においても要職を担っていたのである。文政の改訂版『両国壬辰実記』は現存していないため、推定を重ねる記述とはなった。その分わかりにくい点多かったように危惧されるので、改訂の過程を略述してひとまづのまとめとする。

寛政八（一七九六）年五月に一旦成稿した『両国壬辰実記』はその後も補訂される。著者の山崎尚長は文化二年の八月に没するが、恐らくそれまで改訂作業は続けられたのではなからうか。それから、二十数年を経た後対馬藩の侍講川辺橋亭の序を得て改訂版がなった。ただし、文政期にこの書物が取り上げられた理由や序文の執筆が刊行を前提にしたものであるか否かなどについては判断材料を持っていない。

四、刊本『正実 朝鮮征討始末記』について

川辺橋亭の序がなされた文政十一（一八二八）年からさらに二十数年の時を隔てて、嘉永七（安政元・一八五四）

年『両国壬辰実記』の「前半」が刊行される。ただし、書名は『正実 朝鮮征討始末記』と改められている。細かな情報は後掲に譲るが、内閣文庫所蔵本によると、首巻の見返しに「浅川善庵／黒川春村／浅川同齋／三先生閣／対州山崎尚長輯／正実 朝鮮征討始末記／対州村氏蔵版／東都書物問屋／誠格堂発行」とあり、刊記には「対州／山崎尚長輯／村倉治郎蔵板／嘉永七甲寅初冬刻成／京都 三条通升屋町／出雲寺文治郎／大坂 心齋橋通博勞町／河内屋茂兵衛／心齋橋通安堂寺町／秋田屋太右衛門／江戸 本町三丁目／和泉屋善兵衛発行」とある。

対馬の一善村倉治郎なる人物が所蔵していた山崎尚長編纂の書物を、浅川善庵・黒川春村・浅川同齋の三人が校閲し、江戸本町三丁目の和泉屋善兵衛が刊行したことがわかる。ちなみに、誠格堂とは和泉屋善兵衛のことである。具体的な構成についても後掲を参照されたいが、その梗概を述べると以下のようなようになる。さきの見返しに次いで、嘉永七年の浅川同齋漢文序、嘉永六年の黒河春村アヅ仮名序、文政十一年の土纒川辺清次郎原序があり、ついで総目（目次）、凡例八箇条（および村一善の識語）、朝鮮国歴代略記、朝鮮国八道、朝鮮国八道全図となる。ここまでが首巻の内容であり、以下、巻之一から巻之四として本文が続く。総目には巻之八までがあげられるが、実際に刊行されたのは巻之四までであった。『両国壬辰実記』には無かった読み仮名が、『正実 朝鮮征討始末記』では全編にわたって施されている。ちなみに、『両国壬辰実記』の総目では巻之第四に「倭軍重渡海于朝鮮附加徳島船軍之事」とみえるが、これは刊行された『正実 朝鮮征討始末記』では巻之七の「和軍重渡海于朝鮮附加徳島船軍之事」と変更されている。「倭」から「和」への書き換えは、校閲の結果であろうか。また『両国壬辰実記』にはみえていた「珍島海辺船軍事」が『正実 朝鮮征討始末記』には落ちていいる。さらに、尚長は『両国壬辰実記』の本編にさきだつて『懲毖録』の日・朝双方の序をおいたが、刊本『正実 朝鮮征討始末記』では貝原益軒「懲毖録序」も柳成龍「懲毖録序」も外されている。

校閲をおこなった浅川善庵は漢学者で、諸国遊学ののち伊勢の藤堂家や肥前の大村家、松浦家などに招かれ、嘉

永二年には没している。漢文の序をよせた浅川同齋は善庵の弟子であり、その婿養子として迎えられた。父と同じく肥前平戸の松浦家に儒者として仕えている。また仮名序の黒川春村は江戸の国学者で狂歌作家としても知られる。

凡例八箇条のあと、字下げがあつて「甲寅正月」すなわち嘉永七（安政元）年の村一善識語がある。そこには書名変更の理由が述べられている。ここでは「壬辰」から「戊戌」まで七年間におよぶ戦役を扱っているにも関わらず、初名の『両国壬辰実記』では壬辰すなわち天正二十（文禄元）年の事のみが書かれてあるような印象を与えてしまうことを恐れたとある。さらに説明は、わざわざ好んで書名を改めたのではないし、私に加除をおこなったわけではない証として原序も残している、と続く。

しかし、これでは「朝鮮征討」という踏み込んだ表現を書名にとつた理由は判然とせず、説得力にも欠ける。浅川同齋は漢文序のなかで対馬の人、一善村倉治郎の証言を載せている。ここで村は山崎尚長が原著を編むに至った経緯を述べている。これによると、かつて長崎で「韓役」（大陸侵攻、朝鮮の役）に関する文献を蒐集し通詞浅野某（倭館）で（ま）まとした朝鮮の事蹟を調べ実記を著したとする。尚長の個々の履歴についてはその通りであるが、その継起の順には混乱がある。芳洲門の蘭畹朝岡一学は明和期に没しており、尚長が親しく教えを受けたのも宝暦期とされる。また、尚長は朝鮮から戻つて晩年に長崎に赴いており、村氏の証言とは順序が逆である。残念ながら、村一善（倉治郎）なる人物については後掲『朝鮮征討始末記』の割注に江戸在住の人間であることをにおわす件があるものの、具体的な履歴も判然としない。こうみてくると対馬の人とするのも容易には信じ難い様にも思われる。浅川同齋は序のなかで「凡そ韓役に係わる書、此より詳らかなる莫し」と強く断じているが、あるいはこうした言説に真実味を出すために、対馬人・村一善（倉治郎）なる人物を登場させたのかもしれない。

それはともかくとして、浅川同齋の漢文序は山崎尚長が柳成龍の「懲慙録」を基礎文献としながら、その誤謬を『朝鮮征伐記』『朝鮮太平記』などの邦文献、諸家の譜牒、識者の所見（聞於博洽士者參稽訂証）、対馬藩伝来の文献（其藩之傳書）などによって訂正したことを高く評価している。さらに、この実記をもって「攻伐勝敗之始末」をみると、本邦の列侯・諸軍が州府郡縣を陥れ王子を擒にするなどして策略・偉勲・威烈・英武を明らかにしたのに対し、朝鮮は軟靡・浮墮によつて守禦の道を失し、狼狽倥傯に陥つたとあげつらつてゐる。また、「懲慙録」に誤謬が多いとする理由について、当時柳成龍が国家の要職にありながら国を誤り民を害した罪を免れるため、故意に詐偽の記録を残し人々を欺いた故であると断じる。

貝原益軒や柳成龍の「懲慙録」を巻頭に据え、末尾を「和交成就、通信使渡海、両国太平之事」という項で結んだ山崎尚長の原著『両国壬辰実記』と、かかる漢文序を巻頭にいたたく刊本『正実 朝鮮征討始末記』とを、果たして稿本（写本）から刊本という単純な過程の上に位置づけることは妥当なのであろうか。

さらに、論点をふかめるため、漢文序の前年に書かれた黒川春村の仮名序をつぎに見ていきたい。後掲のようにこの序は仮名主体で意味も取りにくいという憾みがあるので、ここで錯誤を恐れず漢字交じりの文章に直して解釈していく。

大和の国は浦安の国、細矛千足の国と云うて、一の神ことにも称えまし、わが大御国は大御稜威のひかり、天の下に輝き、八洲のほかにもいたらぬ隈なく、かけまくもかしこき国なり、いはまくも床しき国なり、上りたる世、息長帯姫尊（神功皇后）の三韓を言趣給ひ、末の世には豊臣の前の太政大臣（秀吉）の再び其国を打ち靡ひけたまひし、あるひは刀伊・蒙古の国より、若干の兵を整え勢い猛く襲い如しをも、其の折り毎に、心を尽くして打ち滅ぼし給へりし事など、ことごとくに書き数えむには思いをも損ないつかへこしかし、されば永遠に動く事なく、準え無き宝の国とて、知らぬ境なる蝦夷等さへすら、伝え聞き、語り継ぎつつ、おち羨ぬは

あらすところを聞ゆれ、こゝに宝曆・明和の頃ほひ、対馬の国人山崎何かし、公の殿の仰せ言蒙りて、朝鮮の政所に罷りて、暫く彼地に留まりて、あるほど公事の暇の閑隙、彼の文祿の戦館の跡とも、広くその紙の文ともを穴ぐり、此国・彼国の翁等にも尋ねて、残りたるを拾ひ、誤り等を糺して、詳しく忠実やかに書き記したる文あり、然れども、さる文ありとも未だ世の中には知れる人稀れにて、百歳はかりの年月を経しかば、同じ国人村一善といふ人、さばかりいみじき心尽くしの徒に、埋もれてのみあらむを、年頃あたらしみ思へるあまりに、此程頓ぶるに力を極めて版木に写し、遍く頒ちて、長き世に伝えまほしとなりけり、誠八咫の国の蝦夷の備へは、世とともに上下挙りて、厳かなるへき事、言うまでもなけれど、古くは延喜のおほ年、時に善相公のさ、けたはかりに見え初め、近くはあづまを照らし給ふ 神の御言の御論しにも聞えて、公私心を一つに束の間も怠る事なく、勤むへく護るべければ、ましてかゝる古物語を見むには、さらでだにをかき習ひの御国人の心勇み勝りて、自ずからに良き国の固めの助とも、成りぬべきものをや

嘉永六年九月 黒河春村

国学者黒川春水は本居宣長の方法を学び、狩谷棹斎・伴信友らの影響を受け、厳密な考証学を確立したとされる。この仮名序では神功皇后による「三韓征伐」の故事と秀吉の大陸侵攻を論じ、外敵から侵されたことのない「日本の国体」を国学者らしく誇ったうえで、周辺の異民族もそうした「日本」を羨望すると説く。ついで山崎尚長の事蹟と本書発刊の件を述べ、かかる史書を読むことが「良き国の固めの助」にもなるのだと締めくくっている。

いうまでもなく、春村が仮名序を著した嘉永六年はペリー来航の年であり、翌嘉永七（安政元）年三月に日米和親条約が締結される。「嘉永七甲寅初冬、刻成」とあることから、『正実 朝鮮征討始末記』の刊行は七年の十月と考えられる。小論において幕末の政情にまで踏み込む余裕はないが、『正実 朝鮮征討始末記』刊行の背景にあった政治情勢は容易に推察できよう。通読し、「日本人」としての心を勇躍させることが護国のための一助となるとあつ

て、もはや「韓役」（朝鮮の役・大陸侵攻）は懐古的文脈のなかでのみ語られているのではない。この戦争は日本がおこなった最近の対外戦争として、人々の記憶のなかに再 positioning されている。幕末の対外的な緊張関係の中で、秀吉の対外戦争に新たな意味合いが付与されたと言ってもよからう。書名や序などで殊更に踏み込んだ、戦闘的あるいは日朝対立的な要素がとりいれられたのもこうした理由に拠る。

さらに、出版という商行為である以上、刊行対象物には高い購買を促すだけの充実した内容が要求される。朝鮮側の情報にも綿密な考証を加え、明の動向にも筆致がおよぶ『両国壬辰実記』はまさに格好の書目であった。¹²⁾さらに、原著者山崎尚長と原蔵者で校注をおこなったとされる一善村倉治郎なる人物をめぐる「対馬」という記号性も欠くべからざるリアリティーを醸し出しているといつてよい。ただし、宥和的な書名や構成のままではこの段階の要求に応えられないので、原題は変えられ新たな序が加えられたのであろう。¹³⁾

まとめ

同時代な「戦争」の史実復元と後世における語られ方とは別のフレームのなかで論じるべきである、との関心からはじめた作業のモノグラフである。作業の過程で少々論点がずれたようであるが、ここでの論旨を整理して、小論のまとめとしたい。

寛政八年に山崎尚長が編んだ『両国壬辰実記』と嘉永七年に刊行された『正実 朝鮮征討始末記』とは、ある意味で同じ書物であるが、ちがう意味で全く別の書物である。『正実 朝鮮征討始末記』は、『両国壬辰実記』の序文を差し替えて、その前半部を印行したものである。字句の調製などもありそれはそれで重要な意味をもつが、大要からすると同様の書物と言つて良い。しかしながら、『両国壬辰実記』を山崎尚長が編んだ時、主な関心は故国対馬

にあったといつてよい。そこには和戦いずれであつても、日本と朝鮮との媒をするのは対馬あるいは宗家において他にはないという、強い自己主張を感じる。そしてそうした自負が綿密な考証や他にはない史事の発掘につながり、『両国壬辰実記』の精度を高めていったのである。一方の『正実 朝鮮征討始末記』にとつて、「対馬」は既に後景に退けられている。「対馬」は書物に高い信憑性を与えるための概念装置である。対外関係の緊迫化という文脈のなかで刊行されたこの書物には、『両国壬辰実記』にあつたような宥和的要素はもはや不必要であり、殊更に緊張を強いるものとなつた。両書を全く別の書物であると断じる所以である。

本来なら、『両国壬辰実記』と『正実 朝鮮征討始末記』の双方について内容を細かに論じるべきであるが、筆者の非力からここには至らなかつた。また、種々の事情から『正実 朝鮮征討始末記』のみを翻刻して、紹介するにとどめる。二重の意味で不充分であるが、識者の諒解を乞いつつ擱筆する。

註

- (1) 拙稿「文禄・慶長の役研究の学説史的検討」(日韓歴史共同研究委員会編『第2期日韓歴史共同研究報告書』第2分科会篇所収、二〇一〇年)、拙稿「山鹿素行における「文禄・慶長の役」の語られ方——近世通信使外交の裏側——」(松原孝俊編『グローバル時代の朝鮮通信使研究』、花書院、二〇一〇年)、拙稿「近世後期における「唐入り」の語られ方」(『歴史学研究』八八二号、二〇一一年)など。
- (2) 同じテキストをめぐるでは金時徳氏が『異国征伐戦記の世界』(笠間書院、二〇一〇年)でとりあげ、詳細に検討を加えている(第八章 近世後期の壬辰戦争文献群——対馬藩と水戸藩の場合)。小論もこの成果に大きく依拠しているが、見解を異にする部分も少なくない。
- (3) 長崎県立対馬歴史民俗資料館所蔵・宗家文庫史料「記録類Ⅱ、与頭、B37」。

- (4) 永留久恵『対馬国志 第二卷 中世・近世編』(『対馬国志』刊行委員会、二〇〇九年)。
- (5) 服部伝右衛門が加藤清正勢に付せられたか否かについては、黒田省三「所謂服部傳右衛門朝鮮陣覺書に就いて」(『青丘學叢』17号、一九三四年)を参照されたい。
- (6) 『長崎県史 藩政編』所収、「対馬藩」・森山恒雄執筆(長崎県、一九七三年)など。
- (7) この点、金時徳氏は徳川家康に対する賛美と言う評価をおこなっているが、むしろ対馬からのあるいは対馬ならではの視点にたっていることに意味があるのではなからうか。単に徳川幕府や家康に対する賛美という問題ではないと考える。
- (8) この「小学校」について『長崎県史』(森山恒雄「対馬藩」)は「藩校設立の命をうけた平田直右衛門真賢は、貞享二年(一六八五)十一月に府中棧原の南、截裳淵に設立し、小学校と名称し、八歳から十五歳までの子弟を教育することとした。これは九州では大村の五教館・鹿児島島の弘文館につぐものであった。」と述べている。
- (9) 『長崎県史 藩政編』所収、「対馬藩」・森山恒雄執筆(長崎県、一九七三年)。
- (10) 『郷土史料 対馬人物志』(長崎県教育会对馬部会、一九一七年)、岡田武彦・上野日出刀・秋田義昭・辺土名朝那「対馬藩の儒学——基礎研究(二)——」(活水女子大学・短期大学『活水論文集』第二七集、日本文学科編、一九八七年)。
なお、「大竹篤」について不明。「川土纒」が「川辺土纒」となる伝からすると「竹篤」が号である可能性もある。後考を俟ちたい。
- (11) ちなみに本文中でも「倭」を「和」に書き改めた箇所が確認されるが、必ずしも徹底しているわけではない。
- (12) もとより、今日からみれば史実とは認め難い箇所は多々ある。
- (13) こう考えると、本来の構成から後半部を除いて印行された理由についても一定の推察が可能となる。後掲の総目からも明らかなように、刊行されなかった巻之五には平壤の戦いと小西勢の敗戦が叙述されており、逆に巻之四までだと日本勢の勝ち戦ばかりが記述される。踏み込んだ言い方になるが、もはや後半は必要なかったのではなからうか。また、浅川同齋が序の中で批判する朝鮮の柳成龍についても日本側の要路者に対する警句のようにも読めよう。

(付記) 本稿は科学研究費補助金・基盤研究(C)(平成23～25年度)課題番号23520819(研究代表者・中野等)「豊臣

山崎尚長の『両国千辰実記』と刊本『正実 朝鮮征討始末記』

秀吉・朝鮮出兵・歴史認識・韓国併合・植民地支配」の研究成果の一部である。史料調査、データ整理等で長崎県立対馬歴史民俗資料館の阿比留徳生館長、山口華代学芸員、九州大学大学院の有田ゆきなさんには大変御世話になりました。記して感謝の念を表します。

史料編『正實 朝鮮征討始末記』

凡例

- 一、本文の参考に資するため、史料編として『正實 朝鮮征討始末記』の翻刻を紹介する。
- 一、底本としたのは内閣文庫蔵本である。国立公文書館のご高配に深謝する。
- 一、翻刻にあたっては、九州大学大学院人文科学府の有田ゆきな氏のご協力を得た。
- 一、本書には朝鮮八道全図および各道図が収められているが、これらの図は省略している。
- 一、本文にはふりがなを施しているが、煩瑣になるので、今回の掲載に当たっては削除している。その他、紙幅の関係から、書誌情報は大幅に割愛せざるを得なかった。

(首巻見返し)

浅川善庵

黒川春村 三先生閣

浅川同齋

對州山崎尚長輯

朝鮮征討始末記

對州 村氏蔵版

山崎尚長の『両国壬辰実記』と刊本『正実 朝鮮征討始末記』

山崎尚長の『両国壬辰実記』と刊本『正実 朝鮮征討始末記』

東都書物問屋

誠格堂發行

(卷首外題)

正朝鮮征討始末記 卷首

朝鮮征討始末記序

余往歲面對馬村氏一善、語次及鷄林之事、乃謂余曰、吾鄉有山崎尚長者嘗為崎奧留守、公務餘暇、好集韓役始末、屬史有通詞淺野某、屢引之於坐、俱糾其詐偽、摘其訛繆、又質諸伯陽門人朝岡蘭畹、其後轉遷釜山縣令、仍就韓象胥問官爵職掌、地理制度、即便謄錄之、合輯著実記若干、凡係韓役之書、莫詳於此云、余求見之、因託邸使、寄翰鄉里致之、頃齋來誇示於余、乃審見以對儒員某和解懲毖錄為礎、仍又倣之首揭八道地圖、然如詐偽舛錯者、則依朝鮮征伐太平二記、與諸家譜牒、或聞於博洽士者、參稽訂証、第若其藩之傳書、便載之不敢損益、以分提攻伐勝敗之始末、往々引證覈實、是故自壬辰距戊戌、其間本邦列侯諸軍、陷州府郡縣、擒王子將校之策略偉勲、威烈英武、與彼邦之軟靡浮墮、守禦失道、狼狽倥傯、至使者往來、密機秘言、他人不可得知者、叱有秩然條理、可以觀矣、宜乎村氏之誇示為、先是世人謂柳成龍懲毖錄、盖其實記也、余獨恠為、乃令據尚長之所圖、以驗其八道區別、與濱海有

無、粗知成龍有詐偽、彼蓋在當時荷重任、誤国害民、既寤已之罪、懼其臭慶、故設詐偽以欺人、其圖尚且如此、況可盡信其以記哉、然則斯書一出、解世人之惑、歷々可以見也、及其告序、弁諸卷端、時

龍飛嘉永七年閏逢攝提格三月二十有五日也

江都同齊朝川慶讓并書

やまとの国ハ浦安のくにくはしほこち足の国といふて一の神ことにもた、へましわが大御国は大御稜威のひかり天の下にか、やきやしまのほかにもいたらぬ隈なくかけまくもかしこき国なりいはまくもゆかしき国なりあかりたる世には息長帯姫尊のみつのからくにをことむけ給ひ末の世には豊臣の前のおほきおと、のふた、ひ其国を打なひけたまひしあるひは刀伊蒙古のくによりそこはくのつはものをと、のへいきほひたけく襲ひことくをも其をりことに心を尽して打ほろほし給へりし事なことくにかきかそへむにはおもひをもそこなひかへこしかしされはとこしなへに動く事なくなそへなき宝のくにとてしらぬさかひなるえみし等さへすらつたへき、かたりつきつ、おちうらやまぬはあらずとこそ聞ゆれこ、に宝曆ミやうわのころほひ対馬の国人山崎何かしかうの殿のおほせことかうふりてうせんのもとにまかりてしはらくかしこにと、まりてあるほとおほやけ事のいとまのひまゝかのもんろくのいくさたちの跡ともひろくそのかみのふみともをあなくり此くにかの国のおきならにもたつねて残りたるを拾ひあやまり等をた、してくはしくまめやかにかいしうるしたるふミありしかれともさるふミありともいまた世の中にはしれる人まれにても、とせはかりの年月を経しかはおなし国人村一善といふ人さはかりいみじき心つくしのいたつらにうつもれてのみあらむを年ころあたらしみおもへるあまりに此ほとひたふるにちからをきはめてかたきにうつしあまねくわかちて長き世につたへまほしとなりけり誠やあたの国のえみしの備へは世と、もにかみしもこそりておこそかなるへき事いふまでもなければとふるくは延喜のおほ年ときに善相公のさ、けしたはかりにみえそめちか

くはあつまをてらし給ふ 神のみことのみさとしにも聞えておほやけたくし心をひとつにつかのあひたもおこたる事なくつとむへく護るへければましてかゝるふる物かたりをみむにはさらてたにをかしきならひのみくに人の心いさみまさりておのつからによき国のかためのたすけともなりぬへきものをや

嘉永六年九月 黒河春村

原序

両国壬辰実記者、対州山崎翁之著也、夫三国争戦、振古有之、或有隔千里、而皆壤地相接而然、至若壬辰之乱、則異於此、日本国與朝鮮、中阻大海、明之於朝鮮、雖路程相通、亦遼悠寫遠、雖曩嘗漢唐之師、僅扼其平壤而止耳、壬辰之役、則明軍踰拉釜山前洋、而日本兵直突入平壤、其相涉歴艱險、豈翅千百里也哉、此開關以來之所罕、不可不記載以傳世也、而三国所録、各詳乎此、而略乎彼、或精于内、而粗于外間亦或有轉相訛謬、同事而乖忤者、此翁之所以有斯拳也、然則其実記其三国之事、而題以両国者何乎、日本征討之實也、朝鮮得罪之主也、明兵則援之者也、此其所以両而不三也、嗚呼是編也、言簡事核、搜索精引據的確、乃校之他所紛紜錯雜、而多偽謬、豈可同日而語也哉、翁名尚長字某、該博典故、而綜理百藝、乃於是拳、亦足窺其一斑、冀覽者其有以識之哉、

文政戊子年夏日

對州講官川土纓撰

大竹篤造

朝鮮征討始末記総目

卷首

凡例

朝鮮国歴代畧紀

朝鮮国八道附八道図

卷之一

壬辰役発端之事

宗对馬守義智到于朝鮮之事

通信使入洛到聚楽亭附帰国之事

琉球朝貢并和情報大明之事

宗对馬守義智重到朝鮮之事

日本諸將朝鮮渡海小西行長攻落釜山城之事

卷之二

加藤清正攻落慶州城附宇喜多秀家渡海之事

小西行長陷忠州之事

日本諸將於忠州會合附加藤小西口論之事

加藤清正渡漢江并小西行長入京城之事

卷之三

小西加藤黒田臨津合戦之事

加藤清正入咸鏡道摘両王子之事

山崎尚長の『両国壬辰実記』と刊本『正実 朝鮮征討始末記』

山崎尚長の『両国壬辰実記』と刊本『正実 朝鮮征討始末記』

小西行長押臨大同江之事

重軍勢渡海朝鮮之事

玄蘇調信會李德馨之事

小西行長等大同江岸對陣之事

卷之四

小西行長等乘取平壤城之事

小西行長等與明軍戰安定館之事

加藤左馬助乘取番船之事

筑紫上野介攻熊嶺之事

小西行長於平壤與朝鮮諸將迫合合戰之事

小西行長與沈惟敬會談之事

宇喜多秀家攻落朔寧之事

忠州原州春州等在陣諸將與朝鮮軍合戰之事

福島勢在番永州慶州落城之事

卷之五

黒田如水立花宗茂討散朝鮮一揆之事

小西行長用朝鮮土民於問者之事

牡丹臺平壤合戰附小西行長引退于京城之事

小早川隆景碧蹄驛合戰之事

加藤木村長谷川攻幸州山城之事

沈惟敬再調和議之事

卷之六

日本諸將引退王城之事

明使抵名護屋同帰国附晋州城攻之事

明冊使伏見來着附和議破斷之事

卷之七

和軍重渡海于朝鮮附加德島船軍之事

加藤小西攻黄石山城之事

諸將攻南原城同落城之事

黒田毛利稷山合戰之事

卷之八

蔚山籠城諸將後詰之事

順天蔚山泗川望津新塞合戰之事

日本勢開退諸城附船軍并諸將帰朝之事

和好成就通信使渡海両国太平之事

朝鮮征討始末記総目終

凡例

山崎尚長の『両国壬辰実記』と刊本『正実 朝鮮征討始末記』

一、豊臣家の朝鮮を征伐せる事蹟を記せるは朝鮮征伐記朝鮮太平記を始め諸家の記録且事に遇たる豪傑の物語子弟の聞書覚書等の世に伝る者少なからず何れも実説なれども但異域にての鬪戦已に二百年を経たれば其事蹟の語り傳へ等に至てハ魯魚烏焉馬の誤写三家河を渡る文変の謬り無にしも有べからざれば朝鮮の事蹟と日本諸家の記録吾國の傳書とを牽合せ件々参考して輯録せる者也然れども此に漏たるを偽と云事に非ず鷄林も頗る騷冗の砌なれば必定遺漏せるもの無しと云べからず

一、朝鮮の事蹟ハ柳成龍の懲愆録を對州の儒員某の和解せる有り今次予在韓中に朝鮮板の懲愆録を熟閲し證書を以て前儒の和解を添削するもの多し又斯編に用なきものは省略せり標題に壬辰録と名るハ成龍の言ふところ耳目の逮ぶ所る壬辰より戊戌に至る迄を述ぶると云に本づけり

一、分注は各書を輔くべき件々と官職位階の大概と道理の都合せるもの其外予在韓中その判事通詞に聞く処の直話等を書載す卷中一事も憑據なきに非ず苟も一已の杜撰を用ひず

一、一書に加藤清正の兀良哈を陥る、事或ハ女直に於て合戦或ハ濟州を攻め落す事など云るハ更に據なき謬説なり清正ハ朝鮮の北地咸鏡道鏡城會寧まで攻入られたる事にて女直界とハ云へども女直迄ハ未だ遼に隔たる事なり又同書に女直と兀良哈を同國とせしかとも是又相違せり清國燕京の東ハ遼東なり遼東の東北より朝鮮の北までを女直と云遼東の西北より燕京の北宣府の東迄の間に居る夷を兀良哈と云然る時ハ女直を兀良哈とハ自ら別種なり況て朝鮮咸鏡道と兀良哈とは方角違ひなり濟州ハ朝鮮南海中全羅道の洋に日本里程にて凡七十里ほど出はなれ往昔耽羅國と云る一島にて日本五島と對頭すといへり咸鏡道ハ蝦夷と遙に對頭すと云是濟州と咸鏡道等ハ南北の背馳にて曾とも清正の攻めざる所にて取にたらざるなり

一、對州の儒員雨森伯陽東五郎と云江門下に朝岡蘭峴なる者後初め太郎八と稱し延享信使來聘の時真文役たり朝鮮の製述對州の儒員文を以て任す官書來聘の文典籍朴敬行など客路の宿にて前日俱に見たる所の碑文を問ふに蘭峴直ちに筆を馳る事三百餘字一字も遺失

なし一行大に舌を巻き博聞強記と贊美せらるる宝曆初年予京師にて蘭腕に此事ありや否やを尋しに頓て筆を執て書して予に与ふ延享より五六年を経たれども更に又遺失なし其強記すべて斯の如し蘭腕もとより壬辰役の事蹟を聞き諳する事頗る詳なり予因て深々信仰し其話を取り載する事まゝ是あり

一、壬辰の役に對州は日本諸総軍の郷導なれば諸大將衆に案内を附け置し既に加藤殿に附置し服部某と云る者清正の推舉にて王子を稱にせし時の功なり太閤より陣羽織を恩賜あり子孫今に其外套を傳ふ況て朝鮮にて將士卒鬪戰に粉骨を尽し、件々も少からずと雖も著述の煩瑣を厭ひ一二を擧て餘ハ省けり日本勢渡海幾若干人か都て皆對州を経ざるは無し國に残りし老幼病痾支離の輩も程に附て客船の用度を辨ぜしむ婦女ハ一廊に居して布帆等の虧損を補はしむ壬辰より戊戌まで七年の間兵士の軍勞ハ言に及ばず婦女に至るまで疲勞せし件々枚擧にいとまあらず

一、朝鮮の曲折ハ懲毖録に精細なれども明國の件々疎脱にして詳ならず故に武備志の朝鮮考及び征韓記等を摘録して參考に備ふ聊か本朝明國朝鮮の説々參伍符合せるを擧て証據とす但し鮮考と云者は武備志の朝鮮考なり韓記とは征韓記なるを知べし讀者誤る事なかれ

一、一年予崎陽の邸吏に任ぜり邸中に本國の象官朝野某なる者佐吏たり尚また鷄林の事蹟を問ひ糺し誤謬を改むる者頗るあり

編内記壬辰至戊戌七年間韓軍始末而原本標題係以壬辰恐人皆謂止壬辰之役因令改名朝鮮征討始末記以解世人之惑但非好而然故亦存所言命題之事與原序示不敢私增損焉

甲寅正月 村一善識

朝鮮國歴代畧記韓人直説
象啓問書

朝鮮開國檀君王儉元年唐堯二十五年
年共に一千二百三十二年平壤に都す

山崎尚長の『両国壬辰実記』と刊本『正実 朝鮮征討始末記』

朝鮮は本燕の域内にて燕の臣王儉此地を守り仁政を施て人民を懐け知勇を以て國內を治め自然と武威も盛に行れき又燕の勢ひ衰へぬるを以て終に燕の版籍を出て分國となり始て朝鮮と名づけ王号を称ふ

朝鮮箕子姓子名晉餘元年即周平壤に都す
武王元年共に九百廿九年

王儉の末年に箕子の封國となり子姓四十一代箕準に至て亡び三韓となる

三韓 馬韓 辰韓 弁韓漢惠帝元年

三韓の辰韓最も強大なりと云秦の亡人衛滿辰韓に起る共に八十七年

新羅 朴赫居世より起る共に九百九十二年今の慶尚道慶州に都す

高句麗 高朱蒙より起る共に七百五十年今の忠清道扶餘に都す

百濟 温祚より起る共に六百七十八年今の忠清道扶餘に都す

高麗 王建より起る共に四百七十五年今の京畿道開城府に都す太祖姓ハ王名ハ建秦の国の臣下にして新羅高句麗百

濟の三国を一統して王となる時日本延喜廿年後梁均王貞明六年に當る王建より三十三代恭讓王に至て亡ぶ即大明

洪武二十二年なり

自檀君元年至高麗恭讓王共に三千七百二十五年

今朝鮮国明太祖洪武二十五年に起る日本自明徳三癸酉年至建政八丙辰年明自洪武二十五年至清乾隆六十二年凡四百余年なり

太祖 康獻至仁啓運聖大神武正義光徳大王

一書曰太祖康獻王名は且初名は成桂姓は李氏高麗全州の人なり父を子春と曰ふ高麗王瑤なる者妄に殺戮して国人なつき附かず洪武二十五年共々に成桂を推て国事を署せしめむと表聞す明太祖命じて国王に封じ遂に名を且瞻と更む七月十八日王位に松京の壽昌官に於て即き給ふ奏して国号を更め朝鮮和寧の壽号を進む洪武五年高麗李成桂を以て和寧府君の監とす遂に令して朝鮮と改む三年にて都を漢陽に移し政を執る事七年位を其子に伝ふ時洪武三

十一年戊寅なり永樂六年に薨ず健元陵に葬る

定宗 太宗 世宗 文宗 端宗 世祖 德宗 睿宗 成宗 中宗 仁宗 明宗 宣宗 元宗 仁宗 孝宗 顯宗
肅宗 景宗 英宗

朝鮮八道

京畿道 忠清道 慶尚道 全羅道

黃海道 江原道 平安道 永安道

道有觀察使兵馬水軍節度節制使、府有府使、或有府尹、州有牧使郡有郡守、縣有縣令、或縣監、州凡二十、府凡五十一、郡凡八十一、縣有令者三十一、有監者四十一、

京畿道 州四 府七 郡七 縣有令者五、有監者十四

併開城府、凡三十八管

漢城府、国王之所都称京都、京都距慶尚道東萊縣十一日程、九百六十二里、

釜山浦在東萊縣南二十一里

開城府掌治舊都

州 廣州 驪州 坡州 楊州

府 水原 江華 富平 南陽 利川 仁川 長湍

郡 楊根 豐德 安山 朔寧 安城 麻田 高陽

縣 龍仁 振威 永平 陽川 金浦有令 砥平 抱川 積城 果川 衿川 喬桐 通津 交河 連川一作連

陰竹 陽城 陽智 加平 竹山有監

忠清道一作清 州四 郡十二 縣有令者一、有監者三十七、凡五十四管

州 忠州 清州 公州 洪州

山崎尚長の『両国王辰実記』と刊本『正実 朝鮮征討始末記』

郡 林郡郡郡或 丹陽 清風 泰安作泰或 韓山 舒川 沔川 天安 瑞山 楸山 沃川 温陽

縣 文義令有 鴻山 堤川 徳山 平澤 稷山古嶽 徳仁 定山 青陽 延豊 陰城 清安 恩津 懷徳 鎮岑岑或

連山 丘山 大興 扶餘 石城 庇仁 藍浦 鎮川 結城 保寧 海美 唐津 新昌 礼山 木川 全義

燕岐 永春 報恩 永同 青山 牙山監有

慶尙道 州三 府九 郡十四 縣有令者七、有監者十四、凡六十七管、

州 慶州 尙州 晋州 星州

府尹有府 安東護稱大都 昌原 金海 寧海 密陽

善 善山 青松 大丘

郡 陝川 咸陽 草溪 清道 永川 醴泉 策川策或 興海 蔚山 梁山 咸安 金山 豊基豊或 昆陽

縣 盈徳 慶山 東萊今為郡 固成或作丹城 巨濟 義城 南海令有 開寧 居昌 三嘉嘉或 宜寧 河陽 龍宮 奉化

清河 彦陽 漆原 鎮海 河東 仁同 眞寶 開慶 咸昌 知礼 安陰 高靈 玄風 山陰 安城 軍咸

比安 義興 新寧 礼安 迎日 長髻 靈山 昌寧 泗川 機張 熊川監有

全羅道 州四 府四 郡十二 縣有令者六、有監者三十三凡五十七管、

州 全州完山有府尹 羅州 濟州羅耽 光州

府 南原 長興 順天 潭陽

郡 寶城 淳昌 錦山 珍山 金提 砥山 樂安 益山 古阜 靈岩 靈光 珎島

縣 昌平 龍潭 臨波 萬頃 金渠 綾城令有 光陽 龍安 咸晩晚或 扶安 咸寧 唐津 玉泉 高山 庇仁

沃溝 南洋 興徳 井邑 高敞 茂長 移安 永礼城風 谷城 清城 珍原 雲峰 任實 長水 鎮安

茂朱 同福 富順 興陽 海南 大江 旌義監有

黃海道 州二 府四 郡七 縣有令者四、有監者七、凡十四管、

州 黃州 海州竹孤

府 延安 平山 瑞興 豐川

郡 各山 鳳山 安岳 載寧 遂安 白川 信川

縣 新溪 兌津 文化 半岑令有 長連 松本 長淵 康相 殷栗 江陰 兔山

江原道 州一 府六 郡七 縣有令者三有監者九、凡十六管、

州 原州

府 江陵護府 稱大都 淮陽 袁陽 春川 鎮原 三涉

郡 平海 通川 旌善 高城 杆城 寧越 平昌

縣 金城 蔚鎮 歙谷令有 伊川 平康 金化 根川 洪川 楊口 麟蹄 橫城 安峽

平安道 州三 府八 郡十八 縣有令者八、有監者五、凡四十二管、

州 安州 定州 義州

府 平壤尹有府 寧邊護府 稱大都 江界 昌城 成川 朔川 肅川 龜城

郡 中和 祥原 徳川 价川 慈山 嘉山 宜川 郭山 鍊山 龍川 順川 漣川 理山 碧鏡鏡一作澄 雲山

博川 渭原 寧遠

縣 龍岡 三和 咸徑徑一作徒 永柔柔一作藥 甌山 三登 順安 江西有令 陽徳 孟山 泰川 江東 殷山鏡有監

永安道鏡一作道 府十三 郡五 縣有監者四、凡二十二管、

府 永興尹有府 安邊護府 稱大都 鏡城 慶源 會寧 鐘城 穩城 慶興 昌寧 北青 徳源 定平 甲山

郡 三水 文川 高原 端川 咸興

山崎尚長の『両国壬辰実記』と刊本『正実 朝鮮征討始末記』

縣 洪原 利城 吉城作城一 明川

〔朝鮮国八道全図〕の図〕

〔京畿道〕の図〕

〔忠清道〕の図〕

〔慶尚道〕の図〕

〔全羅道〕の図〕

〔黃海道〕の図〕

〔江原道〕の図〕

〔咸鏡道〕の図〕

〔平安道〕の図〕

(卷之一外題)

正実 朝鮮征討始末記 一

朝鮮征討始末記卷之一

對州

山崎尚長 輯
村一善 校

壬辰役發端之事

日本 天正十七己丑歲一説に十四年丙戌其頃の武將関白從一位大政大臣豊臣秀吉の曰吾威風海内に振ひ日本六十余州を治さめ平らかにすと雖も朝鮮我を尊まず吾使ハ彼國に往けども彼國の使ひ今に來らざるハ我を蔑如にするなりとて宗對馬守義智に命じて家臣袖谷次右衛門康廣を朝鮮へ遣ハして通信使を渡すべき由を達へぬ然るに足利將軍滅亡の後已に十餘年の間對馬より朝鮮へ年毎に往來する者多と雖もいまだ日本の事實を泄さず此時始て秀吉の足利に代て將軍たる事を知れり康廣朝鮮國の漢城に至り漢城、國都なり秀吉の書簡を達へけるに朝鮮國王昭(マコ)より海路不案内なる断にて只報書のミを遣ハし通信使の往來を許容ず茲に因て康廣も力らなく日本に帰て此趣を具に言上すれバ秀吉ことの外に忿怒て康廣を罪に行ひ其一族までも滅ばされけり蓋し康廣ハ兄袖谷康年と俱に足利家治世の頃より遣使やくにて度々朝鮮に渡りければ彼國と交り深からむ事を察せられ兼て明國迄も志し有ければ朝鮮へ師を出さむ時我國に叛き彼の為に謀らむの疑ひ有が故に渠の一命を取り其門葉まで截れけるなるべし是壬辰役の發端なり是より先き天正十五年丁亥五月宗讚岐守義調對馬守義智とともに筑前箱崎に到り太閤秀吉に拜謁せしに秀吉朝鮮を攻べきよしの命あり義調曰誰かは殿下の命を背ものあらむ然れども伏て冀くハ兵を發する事なく徳を以てなつけ給へと申し、かば老実の諫めに従ひ止られけり義調旅第に還り義智に言て曰吾熟ら考るに太閤一旦諫に従はるゝと雖も其志念深く望み廣大なり必年をへず討伐有べしこれ時勢の然らしむる所なり左ある時は言までもなく對州は第一の先導たらむ朝鮮の土地功者を兼て擇み置べし偕又朝鮮事ある日には必定明國へ援兵を乞ふならむ異邦の戦ひなる上に又明國朝鮮兩國を相手と覚悟すべし日本總軍の先鋒ハ吾子の任なり若輩なりとて疎忽あらば日本の恥辱また吾家の瑕瑾なり武備を努め怠り慢るべからずと教訓有けり義智時に十九歳老父の教諭を深く守り老臣を師とし家中末々迄懇懃にいひきけ武備操練のみを務けりかくて義調ハ天正十六戊子に病死せりけるを果して天正二十年より征討の事發りたりけり

朝鮮

萬曆明の神宗年号丙戌の歲日本天正十四年日本國の使橘康廣其國王平秀吉の書翰を持來れり初め日本國王源氏足利家洪武明太祖年号初年の

比國を興し朝鮮と隣好を結ぶ事殆ど二百年なりき其初め朝鮮よりも使を遣はし慶吊の礼を修め申叔舟書状官にて往來せし事一度あり其後申叔舟卒するに臨て國王成宗太祖十世の孫其言を感じ副提學從二品弘文館の官人文書を掌る李亨元書状官訶に命じて和好修睦の爲め日本に渡りしけるに兩使の者對州に到着し大洋の風水に驚き恐れ疾ひ發りぬ本國へ書を上り其形狀を言ひ遣はしけるにより成宗より命ありて其書翰幣物とを對州に頼み置て歸國せり是より後は復使を遣す事なきに日本よりは絶えず信使をつかはすにより惟礼式の如く接待するのミなりき此時に當て平秀吉兵威を以て諸島を平く定め域内六十餘州を合一つに爲て遂に外國を侵すの大志ありある日秀吉曰吾國の使八年毎に朝鮮に往けども彼よりハ至る事なし是我國を鄙んずるなりとて遂に康廣を朝鮮に遣はし通信使を渡すべしと云ふ其書の詞甚だ倨れり今天下朕が一握に歸するの語あり康廣時に年五十餘容貌傀偉して鬚髮半白なり朝鮮の都まで徑處の館驛にて必ず上室の美なるに宿まれり其威光嚴重にして倨り傲る事常の日本の使ひと絶だ異なり故に人頗ふる是を怵む古へより一路の郡邑にて凡べて日本の使者往來する時ハ其境内の民夫を出し槍を取り道を夾さみ以て軍威を示す事なり康廣仁同縣を過る時かの槍を執る者を睨ミ視て云汝か輩の槍竿太だ短しとあざ笑へり尚州に到れば牧使位階宋應洞の衰へ白首なるを見て譯官通詞の者を以てこれに語らせけるやう我数年干戈の中に在て鬚髮盡く白くなりたり使君應洞ハ平生聲樂娼伎の間に耽り處て艱苦をふる事無りけむをかくの如く皓白になれるは何ぞやと云蓋しこれ應洞を諷するなり斯て都に到て礼曹禮儀を掌り他國の交は判書位階一品の出宴に酒酣はなるに及で康廣胡椒を筵上にまき散らしければ樂人妓女とも争ひ拾ひ取りて其礼席の順次を乱しけり朝鮮ハ胡椒を産せず總て長崎より交易の品康廣旅館に回り歎息譯詞に語げて云汝の國必ず亡びん國の紀綱なる礼儀を乱す上ハ亡びずして何をか待んやと偕また康廣歸國に及で朝鮮より書翰にて申來るに大洋ハ常に風波高きが上に且國人水路不案内なるを以て通信使を渡し難しとぞ返答に及びける

宗對馬守義智到于朝鮮之事

日本 関白秀吉既に袖谷康廣を殺して後宗對馬守義智に命じて筑前聖福寺の僧玄蘇仙果と号す對州縣鹽山以前庵の開基也柳川豊前守調信對州家臣と、もに朝鮮に往しめ重て通信使を渡さん事を責しむ對馬守義智ハ玄蘇調信とともに朝鮮に到り久しく

客舎に留まり通信使を渡すべしとてさまざまに談ずれども彼の評議決せず是より先き丁亥年天正十五年日本の海賊船朝鮮國に渡り民屋を押掠剩へ海邊の守將を殺害し朝鮮の土民を捕へ日本につれ帰りぬ其中には日本の海賊の手引をしたる者も有りたるとぞ是らのもの共を先送り返さるべし其上にて通信使の事をば答へんとの内評なりと旅館の者とも噂せり義智是を聞て柳川調信を日本に帰し幾程なく朝鮮の土民の日本に在る者十餘人を捕へ来りて返しけれバ朝鮮國王命を降だし土民共の好歹を糺し罰を行ひ義智を賞して厚く饗應ありけり其後通信使の議漸く定りぬ因て對馬守義智玄蘇調信を伴ひ日本にかへりけり

朝鮮 平義智渡海せり是より先き吾朝鮮國より水路迷味なりとて通信使を拒しゆゑ秀吉いきとほりて海路熟する義智を遣はし與に伴ひ帰らしめて吾國の辞ばを作り慶高道の巡察使大丘に居す金眸ハ敵の變を聞き即て方略に依て軍勢を分け諸邑に移文を廻し各手勢を引率便利よき處に屯し聚り以て京將の至るを待居たりければ聞慶以下の守令皆其軍を引率大丘に赴き川邊に野陣を張り巡邊使を待居ける既に數日を経て巡邊使未だ来らず敵軍漸く近づきければ衆軍各驚き動き折ふし大雨にて衣裳も濡れ兵糧も継かざれば夜にまぎれ皆逃散り守令も悉く単騎にて奔り還りけり巡邊使聞慶に入れるに縣中已に空うして一人も見えねバ自ら倉穀を出し率る所の軍人に糧餉を與へて行き過ぎ咸昌を歴て尚州に至りけるに牧使三金渾ハ巡邊使を出站到に招待へと云ひ託て通れて山中に入れるゆゑ獨り判官一道の上納物を支配し勘定をする五位權吉邑を守り居たり李鑑兵卒のなきを以て權吉を責めこれを庭に曳き出し斬らむと云ふ權吉悲み告て自ら出て軍兵を招き来らむと願ひ夜に入りて村中を搜り索め翌朝までに數百人を得て帰りけるが皆農民共ばかりなり李鑑尚州に留まり倉をあげ糶を出し散民共を誘き出しければ山谷の中より介々出来り又數百餘人集りしを倉卒組分て軍卒

としたれども一戦にも堪べき者ハなかりけり時に敵兵已に善山まで至れり其日の暮に開るに通信使の議いまだ決せず成龍大提學位階一品弘文館の學士の舊官にて博學の選なり國事等の重き文書の草稿等をする職掌をいふなり者なれば國書を撰むとするにいたり書付を以國王に請ふ速かに評議を定められ兩國の間だ寡を生ずる事勿れとなり朝講知事位階二品諸司に知事同知事兼知事有て政事を判斷するなり邊協等も書付を以て宜く使を遣し報告を給はり其ついでに日本の動靜をも見て來らんは計ことの過ちにてはあるまじと請へり是に於て評議始て定りたゞちに命ありて使すべき大臣を擇ぶ兼知事なり黄允吉成均官の官人儒學教諭等を知る位階三品司成成均官の官人儒學教諭等を知る位階三品金誠一を上副使とし典籍同く成均官の官人正六品許箴を書狀官とし庚寅明万曆十八年日天正十八年三月遂に義智と同く朝鮮の都を發出せり

通信使入洛到聚樂亭并帰国之事

日本 天正十八年庚寅夏四月下旬对馬守義智朝鮮の黄允吉金誠一許箴等の三使を伴ひ釜山浦を發船して對州に歸り暫く勞を慰め對州を出船して海路恙なく同年秋七月京都に到り紫野龍寶山大徳寺を旅館とす此時にあたり太閤秀吉ハ北条征伐として當三月に京都を出陣有て小田原へ發向有りしゆゑ帰洛を待居けるほどなく北条門族打亡ほされて同年九月凱陣あり新たに殿閣を造作して聚樂亭に於て朝鮮の三使に謁見あり朝鮮王より書翰進物を座上に捧げ黄允吉金誠一許箴等一同に立て三拜し盃礼の事終て三使城を下れり其後三使のもの報書を受け帰る時太閤義智に命じて曰吾れ大明に通ぜんと欲ふ朝鮮王先導して可なり此意を朝鮮王に達すべしとなり義智命を奉じて三使を伴ひ京都を發足すこの時正副使を始め一行に白銀を賜ふ翌天正十九年辛卯の春義智三使を同伴して恙なく對州へ歸り蘇長老調信護送して朝鮮に至り東平館に止宿し秀吉の嚴命を朝鮮王に諭しけれども領掌の答へなし兩人も義智より委縷と云ひ含め有りければ猶又再三事の利害を説ども朝鮮僧も許容ず然れども三使を護送せるの勞を慰め厚く謝礼をば述たりけり

朝鮮 辛卯明萬曆十九年日天正十九年春通信使黄允吉金誠一等日本より回る平調信玄蘇と俱に來る允吉等去年四月二十九日釜山海よ

り船に乗り對馬に抵り留る事一月又對馬より水路四十餘里にて壹岐島に至り博多那古屋長門州を歴て七月二十二日始て日本の都に到る蓋日本人わざと迂り廻りたる路を通行せさせそのうへ處々にて滯留せしゆゑかくのごとく月を累ねてやうやく至りぬ日本の都にてハ大判の中に旅館れり折節平秀吉ハ往て東山道を撃つ留り居る事數月にして秀吉回るといへども又殿閣の修治に事よせ國書を受けず允吉等前後五箇月をへて漸く使意を傳へぬ日本にては其天皇を尊び秀吉より以下皆臣下の礼にして秀吉も日本にては王とは称へず但關白と称へ或ハ博陸侯と称ふ關白とは漢の霍光の謂はゆる凡そ事みな先づ關白すと云ふ語を取てこれを称ふるなり其通信使のあしらひハ輜に乗て宮門に入る事を許し前列ハ道すがら音楽を奏し堂に陞つて礼を行ふ秀吉の容貌矮く陋しく面色黧黒して異たる人相にハあらず但眼の光り閃々として人を射る勢ひあり三重の席を設け南に向て平座し紗帽の冠むりを戴き黒き袍を穿て諸臣數人列座せり三使を引て席に就しめ宴具の飾りとてハ設けず前に一の卓を置上に熟たる餅一器あり瓦甌を以て酒を行ふ酒ハ濁酒なり其礼式至て簡易にして一二度盃を巡して罷ぬ拜揖し盃の酬酢するなどの礼節とてハ無りけり頃く有て秀吉ふと座を起て帳内に入る席にあり合ふ諸臣ハ皆動かすやがて一人平服にて小兒を抱き内より出て堂の中を徘徊するを視るに乃ちさきの秀吉なり座中の人々は俯伏して居たるのみなり已にして楹外を臨ミ朝鮮の樂工等に命じ盛むに衆樂を奏せしめてこれを聴き居たりけるに小兒たちまち秀吉の衣服の上に遺溺せり秀吉笑ひて近従の者を呼ぶ時に一人の侍女聲に應じて走り出づれば小兒を授けてまた他の衣服を更ふすべて意を肆にして自得したるさま傍らに人無かごとし朝鮮の使臣あいさつして出づ其後ハ再び見る事を得ず正使副使に銀四百兩つ、與へ書狀官判事やぐ以下位の高下によりて夫々に賜物あり扱朝鮮の使臣帰國せむ事を乞へども返翰をわたさず先づ使者ばかり發足すべき由なり金誠一云て吾使臣として國書を持来る若報書無くハ主命を草莽に委るに同じとて黄允吉ハ長く留められむ事を惧れ遽き發足し泉州堺の濱に至りてこれ待つほとなく答書出来けれども悖慢りたる文言なれば我王の意にそむけりとて金誠一これを受けず書き改めさする事數度に及びさて受取りて發足せり凡て其通行の路すがら日本人よ

りの贈り物あれども金誠一のみ皆返却しけり兩人すでに朝鮮に還り釜山に泊る時黄允吉より先づ人を馳て日本の情
形を陳へ必定兵禍有るべしと申しぬ程なく都に登り返詞をさぐるに國王より尋ありて黄允吉ハ前の如く答へ金誠
一は吾彼の様子を索るに允吉の言ふ如き氣味を見うけず允吉が詞ハ人心を動揺して宜からずと云ふ是に於て議する
もの或ハ允吉か詞を主とし或ハ誠一が詞を是として評議區々なり成龍ときに誠一に問て云足下の詞ハ允吉と同じか
らず萬一允吉が考のごとく兵禍有らば奈何とかする誠一云吾も亦實ハ日本の終に兵を動かさん事をしれりされど允
吉が言太だしうして内外の人の驚き騒がむ事を懼るゝにより此を静めむが為めなりと云けり

琉球朝貢并情報大明之事

日本 此時琉球國王を尚寧と云へり父尚永近ごろ逝去して尚寧その譲りを受け國內安泰にして五穀豊饒なり太閤秀
吉兼々其威を大明迄も輝かさむと欲して先朝鮮を征伐の心あるに琉球もまた大明に属従すと聞えけるゆゑ是をもさ
きに従がへむとて薩州の島津義弘に命ぜられ貢物を捧げ服従すべし若ししからずむバ大軍を下し攻亡ぼさむと云ふ
こと義弘より天龍寺桃庵和尚を使として琉球の長吏鄭廻と云ふ者に其由を通じけるに尚寧も父逝去して程無ければ
只管異なきを冀ふ所にて違背なく其命に従ひ大慈寺西院と云へる僧を以て種々の貢物を獻じぬ使僧日本へ渡海し京
都に上り聚樂亭に至りければ太閤秀吉對面ありて使僧以下饗應種々丁寧なり秀吉の給く遠く海路を経て聘礼を致し
吾命に随ふ事神妙なり就てハ今より大明への通信を絶ち貢船を止むべし汝國に歸りて此事を尚寧に語げ琉球より大
明へ使を遣し日本へ聘礼を通ずべき旨宜く取繕ふべし大明此事を承引せずんは吾兵を發して征伐すべし早く此事を
告ぐべしとなり使僧節を持って歸りて琉球王へ太閤の嚴命を達しければ是に於て衆議區々なりしが終に鄭礼と云ふ臣
をして福建に渡海せさせ巡撫使趙參魯を以て明朝へ奏達けり福建に琉球館あり琉
人在館して修學せり又福建の許儀俊と云ふ者日本に擲となり
て薩州にあり同郷の朱均旺と云ふ者とともに太閤の外侵の志ある事を傳へ聞て福建の守臣に告げ又陳申と云者琉球

に寓居したりしが大明に聞り此事を奏しけり朝鮮よりは未だ注進無きゆゑ若くハ日本に志を通じ二心ありてこの事を奏さざるかと人皆疑ふ程に朝鮮の使臣大明に至り和人まさに變を生し入寇近きに有べき旨を奏聞せり

韓記曰秀吉遣書于琉球其趣曰吾勃興于蓬茨順武威之運六十餘州既入穀中殊域遐方來庭者不少吾將征大明是天所授也叢尔琉球未通聘帛吾欲遣兵征之而原田孫七郎以商舶之有利故屢往來于琉球此日俾近臣達告吾曰速赴琉球說本朝征國之旨則其來享不可疑焉是故余暫宥之來春出師之日速可來謁若怠而不到則其必遣大兵燒其城郭鑿其島民不可運于掌上琉球得此書大驚使官臣鄭礼齋之赴于大明依福建巡撫使趙參魯而告日本入寇之旨又江右人許儀近歲在薩摩而事醫業與同鄉朱均旺相議乃依福建守臣告之守臣達之大明帝未敢恐之唯命海邊兵士整調軍船而已琉球亦不及聞輸而止焉

嚮に朝鮮より通信使を渡し、時太閤の命に吾れ大明に通ぜむと欲す朝鮮王先導すべしとなりよつて朝鮮よりも使臣をして大明に事情をうつたへけるとなり太閤先朝鮮を征伐有べしとの事ハ琉球國よりも連に注進しける程なれば西南の異邦へも大に聲聞しけるときこえて南海中の諸蕃多く大明へ服従し朝貢せる中にも暹羅國は大明へ使を遣し表を奉り貢ぎものを捧げ且量衡をも乞國中の式としてこれに従ひしなれば援兵も遣はさむと奏聞せしとなり

白石新井氏采覽異言曰萬曆二十年九月經略侍郎宋應昌奏達暹羅國王使握叭喇等願督兵蕩勦倭巢是我勝國主侵伐朝鮮時事也萬曆二十歲次壬辰當文祿元年

朝鮮 此時日本の書に有率兵超入大明之語柳成龍謂らく當に即ち事の由を明朝に奏聞あるべしと首相議政府にて第一の以大臣領議政なり以為恐くは明朝より吾國の私に日本に通ずる事を罪せられなば如何せむ先これを諱み隱さむには如じとなり成龍云く事に因て往來するハ隣邦國を有つもの、なくてはざる所なり既に成化の間には日本より亦朝鮮に因て貢を中國に入れむ事を求めし事あり明成化三年に當て日本應仁の大亂あり又皇明通紀太祖洪武四年九月日本國王良棟遣使朝貢すと云々洪武四年ハ後光嚴帝應安四年辛亥なり此時龜氏九州に拠て後醍醐帝皇子懷良親王を奉して王とし使を明へ遣はせり故に明史に日本國王と書せり其時も奏聞て明朝よりも返翰ありて諭とし給へりし例あり前事已に然り獨今日のみに非ず今諱み隱して奏聞ずんば大義に於て然る

べからず況や日本若し實に大明を犯しせむるの謀有て他所より奏聞られん時は反つて日本に同心して隠し諱むの疑ひをうけむしからは其罪は私に通信する咎めよりも甚しからんと云ければ諸臣のうち柳成龍が議を是とする者多くして遂に金應南等を遣はし急に馳て明朝に奏せしむ時に福建の人に許儀俊陳申と云者日本に擄はれ居たりしが已に内密に明朝へ日本の情を報げ及び琉球國の世子尚寧よりも連りに使を以てこの事を報げるに獨朝鮮よりの使未だ来らざりければ大明にも朝鮮國日本に貳心あるかと疑ひ議論とり／＼なりしに閣老宰相を云許國まへかと朝鮮へ使ひに來りし人にて獨言て曰朝鮮ハ至誠を以て大國に事ふまつるの國ゆゑ必ず日本に與し叛べからず姑くこれ待べきなりと其言未だ久しからずして金應南等奏書を賣ち到りしゆゑ許國大に喜び一統の疑始て釈けり朝鮮には日本の兵を憂ひ邊事に熟したる宰臣宰相を拵び巡察使を三道進豐清尚全全に下して以て之に備へけり先づ金暉を慶尚道の監司一進を統領す人命をも司ふ位二品とも云とし李洸を全羅の監司とし尹先覺を忠清の監司とし器械を備へ城地を修覆せしむ慶尚道には城を築く事尤多し先永川清道三嘉大丘星州釜山東萊晋州安東尚州など縣々州々のやく處を軍法の如く左右の兵營を築きたて或八固よりある處ハ修補を加へけりこの時に昇平既に久して中外の臣民安佚に狃て差掛りたる勞役を忌み憚り怨らみ惡むの聲路に載て囂しかりけり陝川の人前典籍やく李魯より柳成龍に書を貽て云く多く城壁を築き民の力を勞するハ計り事の過まちならむ且へ嘉城ハ前に鼎津を阻てたり如何ぞ日本の兵羽あらずして能く飛渡らむ何為浪りに城を築き民を勞すると云ひ送りけるとぞ夫萬里の蒼海を以てすら倭軍を禦ぐ事能はず況むや一衣帶の如き流水を以て倭軍の必ず渡らざる事を頼むべきにあらず李魯亦理に味き事なり一時の人論議すべて此ごとし弘文館よりも大小の文亦書付書を司るを上りてこれを論ず然るに西南の築く所皆形勢をのみこまず其上地面濶くして衆軍を容るゝを以て専務とす晋州の城の如き險阻に據て守りふせぐへき城なるを是にても小なりとして東向に移しかへ平地にきつきぬされバ其後倭軍此より城にせめ入り城遂に保つ事を得ざりき大抵城ハ堅く小なるを以て貴しとす然るに其廣からざる事を恐るゝは是亦時の議論の然らしむる処なり軍政の大將を撰むの專要と隊伍を組み合せ兵士を練り習はずとの方に至りては百

に一つも挙る事なく座して敗に至れり倭軍連りに内郡を陥れ朝鮮の軍勢等風を望むで潰み散じ敢て鋒きを交る者無
りければ邊司やくに備はれるの諸臣日々に闕下に聚り備禦の策を評議すれども計に為べき事なかりけり或人の商り
ひやう議に今倭軍善く槍刀を用ふる我國堅甲の敵を禦べきなし故に敵する事能はず當に厚き鉄を以て満身甲を作り
これを被て敵陣に突入るときハ敵も刺すべき透間なければ必ず勝べしと云ふ衆人然りと云ひて是に於て大に工匠を
聚めて昼夜かゝりて打造ける柳成龍ひとり以為不可なりと敵と闘ふ事ハ雲の如くに合ひ鳥の如くに散し最も捷疾き
を貴ぶ既に満身甲を被ては其重き事勝へからずして身の運轉しも不自由なれば何ぞ敵を殺す事をせむと云ひけれど
もこれを用ひす然れども數日にして衆人其用ひ難き事を知り遂に罷たりけり

又臺諫司諫ハ掌
謀諍論駁大臣に見えて計を言はむと請ひし中に一人氣を盛んにして大臣の謀なきを斥しそしめる者あり側より何

の策か有ると問へば對て曰ふ漢江の邊に於て多く高き柵を設け敵をして上る事を得ざらしめ我ハこれより俯して射
む然らば我ハ便利にして彼ハ不利なれハ進む事得がたからむと或人の曰敵の鐵丸亦上る事を得ざるべきかと問へば
其人答ふる詞無くして退く聞者語り伝へてこれを笑へりそれ兵を用ふるの常法ハ機に臨み變を制し進退合散して奇
を出す事窮り無らむ事只將の任に在のみ漢の鼂錯が陳る所の三策昔鼂錯兵事を上言して曰兵を用ふる機に臨み刃を合する時の急務三ヶ条有一つに
決する所なり將たる者
知ずむハ有べからず尤も切要に係りて一をも闕く時ハ不可なり其紛々たる者何の補ひかあらむ大抵國家ハ將を無夏の日に
扱み將を事あるの際に任すこれを扱む事ハ精きを貴びこれを任ざる夏ハ専らなるを貴ふにあり

爰に井邑の縣監品六李舜臣を擢て全羅道の左水軍節度使船手の大將
位階三品とす此舜臣ハ胆略有りて騎射を善す嘗て造山の萬戶
一鎮の
將六品と為る時に北邊胡の寇多かりしに舜臣計を以て胡人の干乙其と云者を誘ひ出し乃ち縛りて兵營送りて斬しめけ

れば胡虜の患ひ遂に息ミけり巡察使鄭玄信と云舜臣に鹿屯島の屯田を守護せしむ或日大に霧深かりしに軍陣盡く田
に出て禾を刈り収めければ柵中には但十餘人在りけり其時俄に胡虜の騎兵四方より寄せ集めけるが舜臣柵門を閉て
自ら柳葉箭矢根柳葉の如く乃
文字の如くなりを以て柵内より賊數十人を馬より射墮しければ胡虜の兵驚きて逃走る舜臣柵門を開き單騎に

て大に呼ばりてこれを逐ふ虜の衆大に奔りさりて遂に掠められたるものをも取り還しぬれども吹擧する人も無く及第の後十餘箇年何の沙汰も無しに始て井邑の縣監となれり是時日本勢攻来るべしとの沙汰日に急なりけれバ國王より備邊使領議政左議政右議政を始め領事都提調と云る重職迄を宰相と云ふ凡三十員程有之に命じて各才器のある將師に堪たる人を薦めしめけるに柳成龍より李舜臣を挙て遂に井邑より水使節度使水軍節度使に擢られたり時に都に在合たる武將の内唯申位李鎰ハ取も大將の聞えあり慶尚の右兵使曹大坤八年老て勇氣なし衆人大將の任に堪ざらん事を憂ふ柳成龍まうしあけて李鎰を以て曹大坤に代しめむ事を請ふ兵曹判書洪汝諄云く名將ハ當に京都に在べし李鎰ハ遣さるまじと柳成龍再び申て曰凡そ事預しめするを貴ぶ況や兵を治め敵を禦をや尤事猝かに辨すべからず變有時に武威ある李鎰を遣はさずして何れのとしか使ふべき寧つかふなれば一日にても早く往き預め備て變を待しめバ遮くハ或ハ益有む然らずして事倉卒の際になりて客將を以て馳せ下し既に本道の形勢を諳んせず又軍士の勇怯を識らざるはこれ兵家の忌む所必ず後悔い有むと云へども取あげもなし柳成龍又備邊司に出て諸人を議論して申て祖宗の鎮管の法を修めむと請ふ大略以為國初各道八の軍兵皆其鎮管に分ち属て事有る時ハ鎮管属邑を統べ率の隊伍の人数を列ね整へ置て主將の号令を待つ法なり慶尚道にて是を言は、金海大丘尚州慶州安東晋州是を六鎮管とすもし敵兵有て一鎮の軍或ハ利を失ふと云とも他の鎮には次第に兵を嚴にして堅く守り靡然として奔り潰るに至らざらしむべし往昔に乙卯年の變有て後ち金秀文全羅道に在て始て軍法を改め分ち道内全羅の諸邑を割りわりて巡察使防禦使助防將都元師及び本道全羅の兵水使兵馬節度使に属せしめ是を名づけて制勝方略と云諸道七皆これに效ふ是に於て鎮管の名ハあると雖も其實用をなさず一たび急變有時ハ必將に遠近俱に動き大將なき軍兵をして原野の中に集めて將師を千里の外に待しむ大將其時に至らずして敵の鋒さき逼まる時ハ軍中の人心驚き惧る是必ず敗潰る、の道なり大衆既に潰るれば復た合すへき事難し此時に當りて將師を至り来ると雖も誰と與にか戦事を為ん後に慶尚道の巡察使金暉諸邑に移文を廻し便宜の処に聚り京將の至るを待居たちけれハ開慶以下の守令皆大丘に赴き川辺に野を張り巡遊使の至るを待居けるに数日を經ても至らずして敵軍漸く近づきければ衆軍騒動して皆逃げ去りける後に巡察使李鎰髮を亂し赤裸になりて走りける此処の文面形勢誠に彷彿せりし更に祖宗の鎮管の制を修め常に訓練に熟し事有る時あけ用る前軍の者ハ後軍

に相應じ内軍ハ外軍と力を合せ禦がは土の崩るるが如く瓦の解る如きの敗れ至らず是事に於て便利なりとて其事を
本道高麗にふれ下しけり然れども慶尚道の監司金晬以為らく制勝方略行ひ用ゐる事已に久し今猝に改め變ふへからず
とてこの議論遂に寝みけり

壬辰日本文
祿元年の春申位李鑑を分ち遣はし邊備を巡視せしむ李鑑ハ忠清全羅道に往き申位ハ京畿黃海道に往き皆一月を過
て還る點檢たる所の者ハ弓矢槍刀のみにて郡邑何れも平常の法度を守るのみにて備へ禦の長策ハなし申位ハ素より
残暴の名ある大将にて至る處人を殺し威勢を立けれバ所の守令一邑の
代官もこれを畏れ民夫を出し道筋の修補をして馳走
極めて侈りたる事にて大臣の通行とても如さりけり何れも京に帰り巡檢を遂たる由を申出てさて申位柳成龍が宅へ
來る成龍云く晩にも變あらは公將に將師に任せらるべし今敵軍の寄來らん時ハ難易如何と問ふに申位甚だこれを軽
んじ以為憂ふるに足らずと云成龍云然らず日本人往昔ハ但短兵大刀を恃む今ハ兼るに鳥銃の長技あり敢て輕々しく
視るべからずと申位更もなげに鳥銃有りとて豈能く尽く中らむ成龍又云朝鮮昇平久しく士卒怯弱なりもし果して
急變有らハ支へ難きは必定なり吾甚これを憂ふと云ひけれども申位敢て省み悟らずして帰りぬ蓋し申位癸未年
日本正徳
十一年穩城朝鮮咸鏡道もつ
とも北虜に近し府使都護府使と
云位階三品と為りたりしに叛胡のもの鍾城同く咸鏡道の
北辺にあり囲みしを申位馳せ往てこれを救ふ十餘騎を
以て突崩し胡兵圍みを解て去りぬ朝議に申位か才大将の任に堪たりとて陞りて北兵使咸鏡には兵馬節度使
南北あり位階三品に為り未だ久し
からずして資憲正二
品に陞り以て兵曹武選軍勢之
議を司る處判書の兵部卿に類すにも為らむと欲するに至りければ意氣銳く正に趙括が秦を
輕むざるが如く略事に臨て惧るゝの意なけれバ識者ハこれを憂ひけり

対馬守義智重到朝鮮之事

日本 玄蘇柳川調信ハ朝鮮の三使を送り届て對州に帰り太閤の嚴命を朝鮮國王領掌なき趣を具に達す義智これを聞
て朝鮮の君臣未だ太閤の猛烈を悟らず等閑に心得たりと覺えたり余自身に渡りて教へ諭すべしと云ふに家臣等ハ猶

諫めて今一應使を馳せて諭したまハ、よろしかるべしと云ひければ義智云長老豊前二人のもの面談にても領事なきに誰人歎能く云ひ諭さむ然ども朝鮮理強く領事せざるに於ては立處に大切に及はむ今勇猛の日本勢攻渡るに至りて八日あらずして漢城ハ元より平壤鴨綠江まで攻入らむ左あらは朝鮮亡國とならむ夏面り也累年の隣交に對しても忍び難き事なり又日本に於ても為て叶はざる軍と云にもあらず其上平壤鴨綠迄攻入らむは容易なるべけれども其末太閤の志念去ずして大明との取合にならん時其闘ひ幾年掛らむも知りがたし然る時ハ日本の死傷も亦幾若干とも測り難からむ和平をなすハ兩國の為なり吾聊も渡海の勞をは厭ふ可からずとて同年六月再び海を越え朝鮮に到り釜山浦の守將を諭して曰く日本の關白大に兵船を發して大明を攻むと欲す左あらむ時ハ先づ朝鮮の地方并せ擾さるべき事みるが若しはやく朝鮮より大明に報けて和を請ひ好みを通ぜしめば此患ひを免るべし左なくて一旦こと起る日に至りてハ臍を嚙むとも其益有るまし吾れ累年之隣交の好みを以て再びわざく海を越て此事情を告るなりと眞実に示しさとし船に乗り居て十餘日見合せけれども朝鮮王遂に其言を信せず義智も此上は力及ばずとて國に歸り速に上京して太閤に詳かに朝鮮の事情を演とかければ秀吉これを聞き殊に朝鮮よりの返翰の内に日本の力を以て大明を攻めむと思へるハ不異以蠱測巨海如蜂螫龜背と書きたるを大に憤り怒り兵を發するの議を決せらる乃ち義智先導たるべき旨を命じ銀米及び兵器火藥を賜ふ九鬼大隅守嘉隆に命し伊勢の浦にて大船數艘を造らせらる中にも日本丸と名付しハ日本には未だ有まじき大船なり其餘中国四國九州の諸侯に命じ各戰舸を造り軍糧を蓄はへ頻りに兵を催すべしとなり諸將も異國にての合戦なれば甲冑旗纜馬印を始め一切の兵具馬鎧に至り軍粧一際花やかに用意せられけり對馬守義智ハ家臣等に示して何國迎か軍中に自在なるべきやうなけれども別して異國の軍行大將を始め諸軍勢左社意外の事多からむ末々迄も聊疎略なきやうに懇に差図すべし先第一は案内者なりとて国中にて韓土熟知の者四十餘人を撰み出し手当あり扱專要ハ船々の乗附け也如何にも海路功者を撰ミ大勢手當して置べしとなり日本勢壬辰より戊戌迄七箇年の間朝鮮へ渡海の船幾若干艘か對馬を経さるは無く且對州北邊朝鮮への渡口には海中瀬多く中にハ三

里餘の長瀬も有てまゝ、過ち有けるに船毎に乗附け迎海路の案内有ける故にや前後の渡海に一艘も過ちハ無りけり

朝鮮 是より先（訃）月（訃）なり日本平調信僧玄蘇等通信使と偕に來り東平館に宿す備邊司より申けるは黃允吉金誠一等をし

て私に酒饌を携へ行て旅情を慰め從容として彼方の衷をも問情形をさぐり聞きたらハ兼て變に應ずるの策になるべしとて金誠一を客館に至らしむ玄蘇果して密に語りけるは中國久しく日本と通路を絶しゆ秀吉此を以て心に憤りを懷き兵を起さむとするなり朝鮮先づ明朝に傳へ貢路をして通ずる事を得せしめハ必事なくして日本六十餘州の民も亦兵革の勞を免れなむと云ふ誠一等大義を以てこれを論じ論せども玄蘇き、いれず昔高麗元兵を導て日本を撃しむ日本此を以て怨ミを朝鮮に報ずるハ勢の然るべき所なりとて其言漸く悖たがふ是より金誠一等も復問ひたゞさず已に調信玄蘇ハ自分と帰國せり辛卯の夏平義智又釜山浦に到り邊將に云けるは日本大明に通ぜむと欲す朝鮮これを傳へなば幸甚ならむ然らずむバ兩國將に和好を失せむ此乃ち大衷なり故に殊さらに来て告くるなりと邊將以て都へ聞達ければ朝廷の評議に通信使をわたしたる衷を咎め且へ返翰等の悖り慢とりたるを怒り何の答へも無りしゆ義智船に泊る衷十餘日怏々として憂ひ去る（義智また自ら渡海して邊將に大事を告げ今此衷許容無くもば後の悔とも更に益有まじ我積年隣交のよしみを以てわざく來再應と海して大事を告たるり告くと云る衷を朝鮮後に深く感し日本ハ不共戴天之讐なりと云たるほどの事なれども乱後 台命に依て和好又調ひしも義智の深切を感服せし故と也）是後日本人復來る者なし釜山浦の留館（朝鮮釜山浦に和館あり對州の役人常に多）日本人常に數十人在しかだんく（に）に引き帰り一館幾ど空ぬ朝鮮人これを恠しみけり

日本諸將渡海小西行長攻釜山城之事

日本 天正二十年壬辰正月五日太閤秀吉加藤主計頭清正小西撰津守行長を召し朝鮮征伐の爲に兩人に鬪を取らしめて替る替る隔日に先陣相勤むべき旨を命ぜらる此のとき行長には朝鮮國にての制札日本に及びなき大黒と云名馬を賜ひ并に軍書一卷を授けらる清正には朝鮮にての制札并に軍書一卷と南無妙法蓮華經の大文字の旗を賜ひ自から仰せ給ふやう吾播磨の國を拝領せし時織田信長よりゆづり受けたる旗なりと云々清正大に悦び小西に向ひ我此旗を外

國に飄し猛威を異邦に振はむと欲す御邊の旗は如何に致さるゝかと問ふ小西は元來心利發男なれば某ハ紙の袋に朱の丸を付けて旗とすべしと答へければ清正完にと打笑ひて己が第まで帰りける抑加藤清正ハ御堂關白道長公の末葉なり秀吉の母公と清正の母と從弟にて初め虎之助と云十五歳にて元服あり秀吉に奉公し百七十石の領知を賜はり其後數度粉骨を盡し戦功勝けて算ふべからず秀吉其^功を感じ肥後の國に於て二十萬石を賜ひ隈本の城に居住あり行長は泉州堺の町人小西如清と云へる藥種商買せし者の子なりしが秀吉の寵を得て其身武勇を長ぜしかば清正と等しく朝鮮の先陣たるゆゑなぢりて斯のごとく詞をかけしかども行長頓しく其心をさとりて対しかば清正も打笑て止にけり爰に丹波國の住人内藤^{大田}飛驒守如安其比文字の聞え有りければ小西に添て渡海せしむ行長遠く我姓名を知せむため内藤を改めて小西飛驒守と称して渡海せしめけりかくて朝鮮追伐の人數備へ定めあり先づ先陣の備を二手に分らる加藤主計頭清正鍋島加賀守直茂相良宮内少輔賴貞一列とす小西撰津守行長宗對馬守義智松浦式部卿法印鎮信有馬修理大夫義純大村新八郎純忠五島大和守純玄一列とす三番にハ黒田甲斐守長政大友豊後侍從義統四番には島津兵庫頭義弘毛利尅岐守吉成高橋九郎直次秋月三郎種長伊藤民部少輔祐慶島津又七郎五番にハ福島左衛門大夫正則戸田民部少輔長曾我部土佐守元親六番にハ蜂須賀阿波守家政生駒雅樂頭近則七番には小早川左衛門佐隆景立花左近將監宗茂毛利久留米侍從秀包高橋主膳正正統筑紫上野介廣門八番にハ毛利安藝宰相輝元吉川侍從廣家等なり此外對州よ
り案内若者
ども煩瑣をいひて略之船手ハ九鬼大隅守嘉隆藤堂佐渡守高虎脇坂中務少輔安治加藤左馬助嘉明久留島出雲守菅平右衛門桑山藤太同小傳次堀内安房守杉若傳三郎等なり七人の横目の内垣見泉守一直福原右馬助熊谷内蔵助森伊勢守新庄新三郎らを相附られ早々朝鮮へ渡海すべき旨命ぜらる壬辰三月朔日先陣小西撰津守行長か一手の勢打立けり加藤主計頭清正を始として毎日引も切らず發向せり太閤も將に筑紫へ赴かむとす群臣心附て曰君名護屋にましまさむ時大明朝鮮より書翰を奉らむに文才有る人を召連られて可ならむ若し然らざる時はいかむぞ其意旨を知る事を得んと秀吉の給く吾大明朝鮮に其國の文字を抛たせ悉く吾國の以呂波を知しめむに何の難き事やあらん豈學生を携むやと有しか

ば群臣も又云ふ事を得ざりけるか後に思ひ翻されけむ南禪寺の僧靈三東福寺の僧永哲相国寺の僧承兌を招き連れられ斯て三月二十六日に秀吉京都を進發ありて程なく肥前の名護屋唐津に着陣有りけり総て名護屋に在陣の人々は東照大君大和中納言秀俊加賀宰相前田利家越前少將徳川秀康公織田信雄入道常真越後宰相上杉景勝会津少將蒲生氏郷津少將織田信兼佐竹右京大夫義宣出羽侍従最上義光毛利河内守秀頼森美作守忠政丹羽五郎左衛門尉長重京極若狭守高次木下若狭守勝俊伊達陸奥守政宗侍従堀秀政堀美作守村上周防守溝口伯耆守秀勝木下宮内少輔俊房水野下野守信元青木紀伊守宇都宮弥三郎秋田太郎南部大膳大夫信直津輕右京亮為信本多伊勢守那須太郎真田源五朽木河内守元信石川玄蕃允仙石越前守伊藤長門守木下右衛門大夫延俊なり前備八富田左近將監金森飛驒守戸田武藏守蜂屋大膳大夫津田長門守池田備中守小出信濃守奥山佐渡守上田左太郎山崎左馬允稻葉兵庫頭市橋下総守昌之赤松上総介義佑羽柴下総守勝雅なり弓鉄炮の衆ハ大島雲八木下與右衛門伊藤弥吉野村肥後守船越五郎右衛門宮木藤左衛門橋本伊賀守生熊源介鈴木孫三郎なり近習やく六組小姓の輩六組使番輩伽衆其外鷹匠中間等なり後る備へは織田三七信秀長東大蔵大輔古田織部正山崎右京進中江式部大輔蒔田権佐正時生駒修理亮同姓主殿溝口大炊助河尻肥前守池田弥右衛門問島彦太郎大塩與一郎有馬萬介豊氏寺沢志摩守矢部豊後守寺西筑後守同次郎福原右馬助長谷川右兵衛尉竹中丹後守松岡右京進木下左京助秀規川勝右兵衛尉氏江志摩守同内膳正寺西庄兵衛服部土佐守等名護屋在陣の軍勢合て十萬餘人なり外に遊軍六萬餘人を備へ置る大明ハ大國なれば幾若干の援兵の来らむも測り難けれバ其不虞に備ふられむ為と聞えけり去程に先陣に小西撰津守行長加藤主計頭清正を始めとして黒田甲斐守長政小早川左衛門尉隆景毛利安藝守相輝元福島左衛門大夫正則以下朝鮮渡海の軍勢各々名古屋を發船し壹岐の勝本に到りけるに風かはり海上激く爰に滯船有る亶十餘りも過ぎ風少し吹よわりける時小西行長思ひけるハ海上若し穩にならバ諸船皆發すべし未波をさまらざるさきに列船に抽て、朝鮮に押渡り敵の不意を打て高名せむと俄に夜半比に潜に纜を解て對州さして押出す明る午の刻比までハ少し順風なりしかば對州豊崎に着船す列船の諸將ハ小西が船の見えざるに驚き各々行長に出脱れた

るこそ安からねと清正を始黒田長政福島正則以下の諸船悉く押出す既に五六里も行処に俄に逆風になり通船叶はず各もとの勝本に吹戻れけり小西ハ列船に先立ち豊崎に到りしかども逆風はげしく吹しかは如何はせむと案じ居たる處に空の気色少しかはりて見えしかバ豊崎を押し出射馬守義智先導有り松浦有馬大村五島の諸將と同く蒼海の逆風をしのぎ難なく朝鮮の海口釜山浦に著きて急に釜山城を攻む此城大手ハ濠深く石壁高く構へたれども後ろハ高山の嶮岨を頼みに浅間なりけるを見て日本勢後ろの山に分け登りかさより數百挺の鉄砲を打かけ、れハ城兵崩れ立ち即時に落城に及びけり夫より勢を分け西平浦多太浦の城を攻むるに何れも手もなく落城す爰に於て行長諸卒に向ひて云く諸士の奮戦まことに比なし然れば馬の鞍をも衣帯をも緩べ人馬の勞をも休むべきなれども考るに釜山の落城を聞きて東萊の守り密ならんには攻落す事容易かるまじいざや此勢ひに乗り東萊をも踏ミ破つて勇名を外國に奮ひ太閤の御感に預からんは如何にと有りければ諸士皆一同に勇み進むで同意せり然らハ用意すべしとて同十五日早天に日本勢進むで東萊に押寄せ民屋を打破り城をひたくと取圍ミ息をつかせず攻立るに纔に半日許りにて落城す城兵散々に逃走るを日本勢急に追掛け首を斬る叟若干級なり同夜兵士等梁山城に到り鉄砲を打懸ければ城兵盡く遁れ去り梁山も輒く攻取けり又密陽の城兵どもは鵠院の險阻を要害にして防ぎけれど日本勢高山を亘ともせず攻登る勢に怖れて守兵一度に崩れ密陽に帰り城に火を懸け皆散々に落行ければ密陽も手を濡さず落城す蘇山驛に朝鮮人陣を取りしが是も堪へず蔚山の兵營に逃入り其夜右往左往に逃走る日本勢追て金海に至り急に攻て抜きとりたり一説黒田長政攻取り

へり小西等密陽より清道大丘仁同善山を経て四月二十四日尚州に到り行長前面を攻め宗義智後面を攻む松浦有馬大村五島左右を夾み撃つ朝鮮人大に敗亡す

朝鮮

四月十三日

明萬曆二十年壬申

是日日本船對馬の方より海を蔽て出来る遙にこれを見れば其船數限りなし釜山僉使僉節制度使と云位

鄭撥出て絶影島釜山浦の南面に有り俗牧の島と云島に朝鮮三部義秀の靈社有り琉球國に鎮西八郎為朝を勸請せる謂れハ普世の知れる所なり朝鮮國に朝鮮の獵しける

靈社有るは奇と云べし時々祟りある由にて土人畏敬せり伏て惟れハ女直娘兒千の源廷尉の故事等何れも我日本の武勇然らしむる所なるべし

と云位鄭撥出て絶影島

が狼狽て城に入りけるに日本勢つゞいて至り陸に上り四面より雲霞の如く攻寄せけるか時刻を移さず城陥りけり左水使左水軍節度使なり東萊郡の水官に居す位階三品朴泓ハ敵軍の大勢なるを見て敢て兵を出さず城を棄て逃げ去りぬ日本勢ハ兵を分て西平浦多太浦を陥いる多太の僉使尹輿信力戦して殺され左兵使左兵馬節度使也蔚山の兵營に居す位階三品李珪ハ此消息を聞て兵營より東萊に入しに釜山陥ると聞き大きに恠れ身の措き所を失ひ城外に出て犄角の勢ひをなさむと託て東萊の城を出退て蘇山駅に陣す東萊府使宋象賢ハ李珪を引留てともに同く此城を守らむと云へとも李珪したがはず同十五日日本勢進むで東萊に攻来る宋象賢城の南門に登りきひしく戦ひ半日にして城陥る象賢堅く座して刃を受けて死す日本人其死を以て城を守りたるを嘉し棺槨を作り戸を斂め城外に埋ミ標を立て以てこれを識す是に於て郡縣風を望むて奔り濃ゆ密陽の府使朴晋ハ東萊より奔り還り鵠院の隘路を阻て、以てこれを禦がんとす日本勢梁山を陥れ鵠院に至りしに朴晋か守りの兵有るを見て山の後ろより高きに登り蟻の附が如く山野に漫こり攻寄る隘路を守りし者どもこれを望ミ見て皆散々になりければ朴晋も馳て密陽に還り火を縦て軍器倉庫を焚拏ひ城を棄て山に入りけり李珪も奔りて兵營に還り先つ其妾を城より出ずして城中洵々として騒ぎ立ち軍卒一夜の内に四五度も動乱しけり李珪も其暁獨身にて遁れ去りければ衆軍大崩れに成て落城せり日本勢ハ道を分けて長驅して連りに諸邑を陥れけるに一人も敢て拒ぐ者なし金海の府使徐礼元ハ城門を閉て堅く守りしに日本勢城外の麥禾を刈りて壕を填みけるが頃刻の間に城と齊しくなりぬ黒田長政押寄城外野辺の麥を刈り取て積みやくと下知をしければ数千人の者とも我もくと知りける程に暫時の間に積上げて目前に山をなし密手是より攻め入りく忽し落城すと云り因て日本勢城に攻登る艸溪の郡守李某一番に通れ去る徐礼元も繼いで出ければ城遂に陥りぬ巡察使金晬ハ初め晋州にて變を聞き馳て東萊に向ひしに中路に至り已に日本勢攻近づくと聞えしかバ前む支能はず引還して右道をさして走りけるが為べき方なく但諸郡邑に檄文を廻し人民を諭し敵を避しむ是に由て道内遼高皆空ければ愈々敵を禦ぐ支ハ成らざりけり

龍宮の縣監位階六品禹伏龍邑軍を領して兵營に赴き水川の路邊にて食事をして居たる時河陽縣の軍兵數百人防禦使に属て上道に向て其前を過行けり禹伏龍河陽の軍士の馬より下らざるを怒りてこれを拘へて謀叛をはかるを以て責ける

に河陽の軍兵ども兵使の公文を出してこれを示し其言ひ分けをしける禹伏龍己が軍兵に目くばせして取圍むでこれを殺し皆ことくく其尸を積むに野に満てり巡察使これを功なりとして言上しければ禹伏龍位階を進められ通政となり鄭熙績と云る者に代りて安東の府使位階三品となりぬ後に河陽縣の人民孤兒寡妻都よりの使臣の來ることに其馬の首を遮つて冤つミうつたへ蹶きけれども禹伏龍ハ時代に名ある者なりければ誰有て其非法を申す者なかりけり朝鮮征討始末記卷之一終

(卷之二外題)

正實朝鮮征討始末記 一一

朝鮮征討始末記卷之二

對州 山崎尚長 輯
村 一善 校

加藤清正攻落慶州城并秀家朝鮮渡海之事

日本 加藤主計頭清正ハ小西行長に出し脱れ先陣をおひ越れし亶無念に思ひ釜山浦一説に熊川に著岸して此より行長が過し路を往むハ本意ならずとて釜山浦より三里奥なる慶州と云處に押寄せ民屋をやきまくり喚き叫むて攻詰ければ一と支へも支へずして悉く敗北す清正大に喜び物始めよきぞ你等王城を攻落さむ亶近きにあり皆戦功を励むべしとて諸軍を帥めて城を屠り諸邑を攻撃に敢て敵する者なかりけり頻りに郡邑を陥れ勢ひ竹を破が如く其勇氣に怖れずと云

ふ者なし爰に浮田中納言秀家ハ小西摂津守行長が深く進むで朝鮮の地に入り先陣の誉れをのみ心にかげ血氣にはやりて深入し屍を外國にさらしなば君の損失且我れまた彼れに恩を施す事數年なり旁憐むべきの至りなり我も急に朝鮮へ押渡りて行長を救はんとあれば家臣共も幸ひ今宵ハ海上も穩かなり船を出させ給ふべしと云ふ是に於て秀家船奉行を呼び出し今宵密に發船すべし你等忍びて此湊を漕出すべしとて次第を定め湊を漕出す折ふし順風吹出ければ備前の兵船共其夜の明方に釜山浦に著船す小西が家來此處の城番を勤め居たりしかバ罷出て渡海の儀を賀し行長の戦功の委細を語りければ秀家大に感じ行長此度の忠戦比類なし誰か是に及ぶべき吾著陣の旨飛札を以て知しむべしとて書翰を馳て渡海の旨を知らしめられしかバ行長秀家の書を得て斜ならず喜び寔に千騎万騎の力とハ加様のことを云ならむとて其比蔚山の郡守李孝城と云をも生捕りし程にて弥其氣色快然たれば士卒も大に力を得て一同に怡ひけり

朝鮮

十七日壬辰四月

早朝注進始て都へ至る乃ち左水使東萊郡水管也朴泓が書牘なり大臣請ひて李鎰を以て巡邊使邊に臨むの号と為て中路漢城より慶尚道の街道

として是ハ常に設け置く官に竹嶺險隘之地を守らしめ邊境を助防將として島嶺を守らしむ慶州の府尹品君仁涵は儒臣なりとて前の

江界の府使邊應星を慶尚道の府尹とす皆軍官朝鮮武士を云を自ら扱むで赴かしむかゝる處に俄に釜山陥るとの急報又至るこの時釜山圍みを受け人通ずる支能はず朴泓が注進状にも但高きに登り以て望めば赤旗釜山城中に満ちたれハ此を以て城陥りたりを知りたる由なり李鎰ハ京中の精兵三百名を率ゐ往んとて兵曹にて兵卒を選ミたる書案を視けるに皆閭閻市井の白徒その外役所々々の小吏又は儒官等半はましり居たり時に臨ミ現に其人數を召出し黙閱みるに儒生ハ冠服を具へ及第を志すと見え試卷を持ち小吏ハ平頂巾を戴て自ら翹て軍役を免れむことを願ひ求る者庭上に充滿し召具ふべき者ハ無りけり李鎰は王命を受しより三日を経ぬれども發足しがたし已支を得ずして李鎰をして先づ行しめ別將兪沃をして後より兵卒を領して行しむべしとなり又柳成龍を體察使大臣の任要に依て設けたる官として諸將を檢督せしむ成龍ハ金應南を以て副使とせむ支を請ひ又前の義州の牧使金汝喁とて武略ある人時に罪に坐して獄に繋がれたるをも救

免を請てともに随へかつ武士の裨將に堪べき者を募り八十餘人を得たり既にして急を告る支絡繹りたり日本勢已に察陽大丘を過て竹嶺の下に近づかむを聞えしかバ柳成龍大に驚き金應南申位二人に謂て敵軍深く入り支已に急なり將にこれを若何せむと問ふに申位云君ハ敵に遇ふとも戦ふべき者に非ず李鎰孤軍を以て進むと云へども後詰なし何ぞ一猛將を早く馳せ下し李鎰が策に應ぜざらしめざると云ふ申位が意自ら行て李鎰に加勢せむと欲ると見えけるゆゑ成龍金應南と俱にこの趣を申入れれば即申位を都巡邊使變に臨て設たる官なりとなし國王より寶劔を賜ひ李鎰以下命を用ゐざる者ハ此劔を用ゐよとなり申位拜辞して賓廳大臣別居の廣間也に來り諸大臣に對面し階を下むとせしに頭上の紗帽冠帽忽ち落て地上に在りたれば見る者色を失ひぬ扱出て龍仁縣に到てまた注進状の中に其名を署さりけり皆人其心乱れたるかと思へりとぞ

金誠一は慶尚道の右兵使となり尚州に到り敵軍已に境を犯すを聞き書夜馳て本營兵馬節度營所に赴く時に敵軍已に金海を陥れ兵を分けて右道の諸邑を掠む金誠一兵を進めて敵軍に行逢ふ將士皆逃走らむと欲す誠一馬より下り胡床に踞りて動かず軍官李宗仁を呼て云く汝ハ勇士なり敵を見かけて退くやと勵しける折ふし敵兵金の頬當をつけ刃を揮て突進む宗仁馳せ出て一箭に射殪けり敵軍引却きて敢て前まず誠一離散の人民を召あつめ郡縣に檄文を廻し互に勢はなれず率綴る計をず然るに國王ハ誠一か前に日本に使い歸りて敵軍容易に至るまじと云て人心を解め國吏を誤りたるを以て命ありて義禁府諸官の善惡罪科を亂明する役を遣はし拿へ來らしむ支將にいかになり行むとも測りがたし監司慶尚道の司大丘に居す金暉ハ誠一が捕へらるゝ由を聞き路上に出て別れををしむ時誠一は辭氣慷慨して一語も己が事に及ふ夏なく惟金暉にくれくゝも力を盡して敵を討む支のみを勵しけり軍吏これを見て歎して云我死をするを恤へずして唯國吏のミ憂ふ是真の忠臣なりと惜ミけり誠一稷山に至りしに國王の怒も霽れ且誠一が本道慶尚道の士民の心を得たるを知り命じて其罪を赦し右道慶尚右道の招諭使時に臨ミての官職となし道内慶尚内道の人民を諭し兵を起して敵を討たしむ時に柳崇仁戦功有る故に等を超て兵使となり僉知金功を以て慶尚左道の安集使時に臨ミての官職とす時に監司金暉ハ右道慶尚右道に在けるが敵兵中路に横たはり左道慶尚左道の便

り通せざりければ所守令皆官を弃て逃走り人民の心も解散する由都へ聞えけり金玠ハ榮州の人にて詳に本道高麗の民情を知りたるゆゑを以て安集すべしとてこれを遣す金玠既に至り左道の人民始めて都の命令を知り稍々に還り集りけり榮州豊基の二邑ハ敵兵幸に至らず義兵を起す者頗るこれ有りと聞えけり

慶尚道の巡察使大丘に居す金晬ハ敵の變を聞き即て方略に依て軍勢を分け諸邑に移文を廻し各手勢を引率便利よき處に屯し聚り以て京將の至るを待居たりければ聞慶以下の守令皆其軍を引率大丘に赴き川邊に野陣を張り巡邊使を疑待居ける既に數日を経ても巡邊使未だ来らず敵軍漸く近づきければ衆軍各驚き動き折ふし大雨にて衣裳も濡れ兵糧も繼かざれば夜にまぎれ皆逃散り守令も悉く単騎にて奔り還りけり巡邊使聞慶に入けるに縣中已に空うして一人も見えねバ自ら倉穀を出し率る所の軍人に糧餉を與へて行き過ぎ咸昌を歴て尚州に至りけるに牧使品金澗ハ巡邊使を出站到に招待へと云ひ託て遁れて山中に入けるゆゑ獨り判官一道の上納物を支配し五品勅定をする権吉邑を守り居たり李鎰兵卒のなきを以て権吉を責めこれを庭に曳き出し斬らむと云ふ権吉悲み告て自ら出て軍兵を招き来らむと願ひ夜に入りて村中を搜り索め翌朝までに數百人を得て帰りけるが皆農民共ばかりなり李鎰尚州に留まり倉をあげ糶を出し散民共を誘き出しければ山谷の中より介々出来り又數百餘人集りしを倉卒組分て軍卒としたれども一戦にも堪べき者ハなかりけり時に敵兵已に善山まで至れり其日の暮に開寧縣の者来りて敵軍已に近しと云ふ李鎰以為衆を惑ハすと將にこれを斬むとす其人呼はつて云ふ願くは姑く我を囚へ置き明朝までに敵至らずバ其時殺さるゝとも晩かるまじと云ひけるに是夜敵兵長川に屯し尚州を距る亓二十里日本なり然るに李鎰が軍ハ斥候も無く敵来れども知らず翌朝までも李鎰は猶敵ハ来らずと心得て彼の開寧の者を獄より出し斬て以諸人の見せしめとせり扱此ほど集め得たる處の民軍と京よりつれ来りたる諸士を合せ僅か八九百人を州北の川邊に陳ね山に依て陳をとり陣中に大将の旗を立李鎰ハ甲を被馬を大旗の下に立従事官尹暹朴篋及び判官権吉沙斤察訪駅馬等を預り總て駟所を支配する役位階六品金宗武等の五人皆馬より下りて李鎰が馬の後にひかへたり頃く有りて人三五人有林木の間より出徘徊し眺望して囀りけるを諸人敵の候かと疑ひけれども開寧の人の斬ら

れたるに懲りて敢て告る者なしか、りし處に城中尚州の城州に數箇所烟り起て見えけり李鎰不審に思ひ軍官を一人物見に遣しける軍官馬に跨り駢卒二人韃を執らせ緩々として行きけるか敵先だつて橋の下に待伏せして鳥銃を以て軍官を馬より打墜し首を斬て去りける故朝鮮の軍勢望み見て氣を奪はれしに俄に敵大に至りて鳥銃十餘挺を以てこれをつ中る者皆斃る李鎰急に軍人を呼て射させけれども何れも數十歩にして矢墜て敵に中らす敵已に左右に備を分け旗幟を持せ後より取廻して圍み来る李鎰更の急なるにあふて馬を回し北に向ひて走りければ軍中大に乱れ我先にと逃げるが脱れ得る者は幾ばくも無りけり従事以下未だ馬に乗る間無き者ハ悉く敵の爲に害せらる敵軍李鎰を追走急なり李鎰馬を棄衣服を脱髮を乱し赤裸になりて走りけり聞慶に到り紙筆を求め急に飛札を馳て敗軍を注進し引退ぎて鳥嶺を守らむと欲せしかども申位が忠州に在由を聞き遂に忠州に趨りけり

都には右相右議政李陽元を守城の大將とし李戡邊彥琇を京城左右の衛將とし商山君朴忠侃を京城の巡檢使とし都城の修補をし金命元を都元帥として漢江を守らしめけり時に李鎰が敗軍の注進已に至りしかバ人心洶々として驚きあへり國王も内々都を去るの意有りけれども外庭にてハ知らざりけり理馬の官國王の馬役金應壽寶廳に到り首相領議政と耳語して立去りしが復來りて申す事有り観る者これを疑ふ蓋しこの時首相ハ司僕提調司僕寺ハ總馬車を司り武官の支配をもする所なり提調ハ司僕寺第一の役人なりを兼ねし故なり都承旨六承旨とて六人有て王命を出納する役也依て喉官と云位階三品李恒福ハこれを悟り掌の中に立馬永康門内と云六字を書いて柳成龍に示す國王の宗親閣門王城第一の門也の外に聚り痛哭て城を棄る事勿と云領府事國王の親族外戚の事を司る也金貴榮尤も憤々として諸大臣と一同に固く京城を守らむと請ふ國王にも宗廟社稷此に在り予將に何くにか適かむと有りけるゆゑ諸人遂に退きける然れども京城を守る更ハ叶ふまじとぞ見えける先々京中の民及び公私の召仕の賤き小使者類醫官等迄も打こみ舉て城堞を分て守らするに城堞の數三萬餘にして守る人数ハ僅に七千なりそれすらも鳥合の寄合者なれば皆城を絶て逃げ散ぬづき心有番兵の軍士ハ兵曹の属下の者共なれば下吏と相與に奸をして賂を受け私に免し放つ者甚だ多く諸官人もいつ去りいつ来ると云吟味も無く急に臨て皆用ゐるべからず軍法解け弛ミたる更此の如くに至れり同知事李德馨を遣して

日本の軍中に使せしむ先に尚州敗軍の時日本通支景應舜と云者李鎰が軍中に在りけるか敵軍に捕へられてありしを
今日本の大將平行長より平秀吉の書契及び禮曹に送る公文一通を應舜に授け送り返し云ひ含めけるハ最前東萊に在
る時蔚山の郡守を生捕り書契を傳へ送りしに今に至り返答なし郡守ハ即ち李彦誠と云者なり日本の陣中より回回り來り罪を得む事を畏れ自ら逃げて來ると云て其書を隠して傳へず故に郡には知らざるなり朝鮮若
し和睦の意あらば李德馨を使はし忠州にて我に會せしむべしとなり蓋し李德馨往年宣慰使日本よりの使客の馳走役と為り倭使を接
待せし故を以て行長對面せんと云ひ送れり景應舜都に至りし時ハ事急にして計の出すべき所無くもし此に因て兵勢
緩む事も有らむかと思ひしに李德馨も亦行むと請ひしゆゑ礼曹にて答書を裁め德馨ハ景應舜を引きつれて出去りけ
り德馨ハ忠州已に陥りぬと聞き先德舜をして往て探らしめけるに德舜ハ敵將清正の為に殺されたり德馨遂に中路より還り平壤にて其子細を復命しけり
癸惑星南斗を犯す京畿江原黄海平安咸鏡等の兵を徵て京師を援けしむ扱吏曹文選殿對等總て文學にあつかるころの總司也判書曹曹中第一李元翼を以て
平安道の都巡察使とし知事崔興源を黄海道の都巡察使とし皆即日發足せしむるとき西狩國王都を落ち西の方にゆを諱て西狩と云し也の評議有
るゆゑに元翼ハ曾て安州の牧使と為り興源ハ黃海の監司と為りし時皆惠政有て民心の爲めに喜ばるゝを以て國王の
巡行に備へしむ

小西行長陷忠州之事

日本 斯て小西撰津守行長軍士と唇議しけるは味方の軍勢已に渡海して今明日の中に著陣あるべき由なればいざ忠
州を攻下し弥武勇を顯はし太閤の御感に預らんハいかにと異見を問ふる一統同意し急ぎ打立たれよと勸む依て軍列
を定め忠州に押寄す一統小西行長忠州に到る時加藤清正黒行長等丹月駅より路を分ち二手になつて馳せ向ふ時に四月廿八日夜の田長政鍋島直茂等忠州に到り會すと云云
丑の刻也彈琴臺の敵の陣所に打寄せて兩方より関の聲を上喚き叫むで攻入たり朝鮮勢は沼を阻て、陣し只一筋の小
道有りて射手を出して稠しく防ぎけるを義智の兵士大石荒河介進むて朝鮮勢を撃破る小西の手の忍びの者に伊賀者
百人あり半を分けて敵の後ろへ廻し山下に火を放ち焼立ける敵軍胴勢大に騒動し崩れ立つ處を日本勢関の聲を立て

一度にどつと捫立攻討ち敵兵を悉く江中に追はめければ死する者數を知らず行長忠州をも攻落し討取る處の首級を取り持せ浮田秀家の許に遣しければ數度の忠戦類ひなしとぞ感ぜられける

朝鮮 申位忠州に至りし時忠清道の郡縣の兵來り會する者八千餘人申位鳥嶺を保たむと欲せしが李鎰が敗軍を聞き膽魂を失ひ忠州へ還り且李鎰邊機等をも召集め俱に忠州に至り又險嶺嶺を棄て守らず号令煩擾なりければ見る者必ず敗れん支を知り又申位が親き軍官のもの密に日本勢已に嶺嶺を踰たりとも報け、り是乃二十七日壬辰の初昏なりければ申位忽ち城を跳え出けり軍中擾れさわぎ申位が在る所を知らず夜深で潜に客舎に還り明朝になり軍官が妄言したりとて引出してこれを斬り都へは敵ハ猶だ尚州を立ち離れざると注進しけり日本勢已に十里日本の内に在事を知らざりけるに因て申軍兵を率ゐ出で彈琴臺の前なる兩水の間に陣を取る其地左右稲田多く水草交雜り馳驅に不自由なり少頃して日本勢丹月駅より路を分けて至る勢ひ風雨の如く一路ハ山に循て東に出て一路ハ江に沿て下り來る鉄砲の響き地に震ひ馬烟塵埃天に連り接く申位為す所を知らず馬に鞭うち自敵陣を突んと欲し再度まで駈け出けれども入る事を得ず還りて江に赴きしが遂に水中に没して死けり諸軍悉く江中に赴き是非なく水中に飛び入りくせしかば屍江を蔽ひて流れけり金汝岫も乱軍の中に死にけり李鎰ハ東邊の山谷の間より脱れ走りけり初め都にては日本勢の盛んなるを聞き李鎰が獨の力にて支へ難きを憂ひ申位は当代の名將にて士卒畏れ服するを以大軍を率ゐて後詰をせさしむ兩將勢ひを合せなば敵軍を捍ぐ事も有りなむとさすがに失計にても無ししが不幸にして本道高麗水陸の將皆憶病にて其海邊に在りてハ左水使左水軍朴泓一兵も出さず右水使右水軍元均ハ水路稍遠しと雖領する所の舟艦既に多ければ衆兵を殘らす進め出し兵威を輝かして互に持合ひにせバ幸にして一度勝利をも得かつは敵も後を顧みるの慮り有りて必遽かに深入りせまじきに取沙汰に畏れて風を望むで遠く兵を避け一たびも兵を交へず扨敵軍陸に登るに及びて左右兵使左兵馬節度使李珪曹大坤或ハ遁れ或は役をかはるゝにせしかば敵軍鞍を鳴して横行し數百里人無きの地を踏み行き晝夜北をさして攻上り一處も支へず少しも其勢を緩くする者無かりしゆゑ十日ならずして已に尚州に至り

たり小西行長等四月十三日渡海釜山落城同二十四日尚州に到る其間の日數十二日なり柳成龍我國の怯弱を憤り斯云ふならむ李鎰ハ其地不熟の客將にて手下の軍卒とては無く猝なる合戦にて勢ひ固に敵すべきやうなく申位未だ忠州へ到らざる前に李鎰ハや敗軍に及び進退據を失ひ大なる誤りに及べり嗚呼痛い哉後に聞日本勢尚州にかゝりし時猶も險阻を通るに朝鮮勢の備へ有らむを憚り聞慶縣の南十里に古城あり姑母と云左道右道慶尚の左道右道交會處の處にて両方の山峽束ねたるか如くにして中に大河盤り其下に往來の路有りければ朝鮮より守りの兵有らむを恐れ人をして再三覬覦守りの兵無きを知て歌舞して過たりと云り其後に明將李如松此鳥嶺を過りし時如此くの險有りながら守るを知らず申位ハ謀なき將なりと歎息せしとなり蓋申位ハ輕銳にて時名を得たりと雖籌略ハ長ずる所に非ず古人の詞に將不知兵以其國與敵と云るは理りなり

日本諸將於忠州會合附加藤小西口論之事

日本 加藤主計頭清正ハ慶州を陥れ其より諸邑を押掠め鳥嶺を越て忠州に打入けり然る處に小西が士卒等民屋を乱妨し布木綿等夥しく牛馬に取付来りけれバ行く先毎に心の如くならず主計頭清正ハ小西行長に對面して王城へ攻入なば綾羅錦繡充滿ならむ加様の類ひ何の用にて立む爰にて放火せしめ身軽くして押行れよと有れば行長に是に同じ悉く焼捨させけり斯る處に黒田甲斐守長政鍋島加賀守直茂大友豊後侍從義統相良宮内少輔頼貞等以下朝鮮渡海の諸將皆忠州に著陣せらる忠州の巽に當りて廣き野あり此處にて會合有べしと小西が方へ云遣はし其翌日諸將彼野に於て會合あり忠州より王城への道二筋あり東大門口南大門口と云り京城に大門八つ有り中にも東西南北の大門を要路とす慶尚道より入り都へ入るハ漢江を渡り東大門又は南大門より入ると云り東大門口ハ南大門口よりも其遠き亓十里なり南大門口ハ路程近しと云へども半途に大河あり先陣ハ兩將鬪取りにして向ふべしとなり清正進み出て某に於てハ南大門へ向ふへしと亓もなげに云ひけれハ行長腹立て主計頭の一言傍らに人なきが如しと謂つべし此儀に於てハ一向叶ふまじと詞を放つて論ずれハ清正あざ笑ひて汝天草の一揆ごときを治むる亓能はず我勇を借りしを忘れしやと云ふ行長怒つて爰にて天草入用とて刀に手を掛れば清正我に向つて刃を振らむと欲

するやと既に同士討に及ばんとす鍋島加賀守直茂両人の中に割つて入りて斯のこときの口論是名将のせざる處にして外國に耻を残すと云物ならん其上爰にて兩人討果されなば太閤大義の思召立徒ら事とならん然らば不忠第一なるべしと理を碎いて制しければ兩人も理を服し尤と同意して和睦し清正南大門へ向べきにそ極りける天草一揆とは去る天正十六年肥後一國を加藤清正小西行長兩人に下されけるに行長の領分天草郡の地侍共一揆を起し己れが城々に桶籠り行長手勢六千五百小勢にして叶ふまじき事を知り清正へ加勢を請ひしかは清正兵士を帥めて發向し忽ち一揆等を悉く攻落し即ち平均しけり清正此事を以て行長を恥しめけり

朝鮮 申位出陣の後ハ都の人々日々捷軍の注進を待居たりしに甄笠を著たる者三人早馬にて崇仁門に馳入けれハ城内の人争て軍前の消息を尋しに答けるハ我ハ巡邊使^申の軍官の奴僕なるか昨日巡邊使忠州にて敗死せられ諸軍大崩れに成りぬ俺等身を脱して来り帰て家人にこれを知らせ兵禍を避させむと欲るなりと云ふ聞く者大に驚くこの者共過る所相告て語り傳へしかば時を移さず滿城に其沙汰響きわたり大に震ひ惧る初昏に宰執を呼て出て避られむ支を議る大臣よりも事勢かくのごとく車駕を暫く平壤に出し援ひの兵を明朝に請はれ収復を圖むと申す掌令^{司憲府の官人正四品なり司憲府八百官の風俗監偽等の事を礼抑する役なり大司憲ハ日本の大目付なり}權懐と云者國王の膝元に近く居よりて大聲に呼て京城を固く守るべしと云ふ柳成龍云權懐が言甚た忠なり然れども今の支勢まづ一と度立退れずして叶ふまじと云ふ斯くて評議決定しければ大臣ハ出て閤門の外に居ける時に國王の旨ありて臨海君^{國王の子}ハ威鏡道に往べし領府事金貴榮漆溪君尹卓然從ふべし順和君^{王の次子}ハ江原道に往べし長溪君黃廷彧護軍黃赫同知李木暨從べし右相^{右議政李陽元}ハ京城の留將とし領將^{領議政}宰臣數十人を扈從と定む内醫趙英璇政院李申德麟等十餘人京都を棄べからずと大に呼はりけるが俄に李鎰が注進状至れり此とき宮中の衛士も盡く散りく^くに成り更漏も鳴ず火炬を得て状を發きてこれを讀む其文に云敵今明日にハ當に都城に攻入べき由なり良久して國王の駕出るに三廳^{御宮廳總政廳守衛廳に訓練都監禁衛衛官以上を今五軍門と云今いふ千禁軍なり}の禁軍共奔り竄るといへども昏黒の中互に相抵觸す適々羽林衛^{國王護衛の武官}池貴壽その前を過る成龍これを認て扈從せしむ貴壽か云敢て力を盡さざらめやと并に其類二人を呼て至

る景福宮の前を過る時に市街の両邊に哭する聲聞えけり敦義門を出て沙峴に到るに東方白々とほのぼのと明けるが後ろを回り視れば城中南大門の内なる大倉より火起り煙焰已に空に騰る沙峴を踰え石橋に至り雨降り来りぬ京畿の監司權徵追ひ来つて扈從す碧蹄駅に至り雨甚だしく一行て皆沾とほりぬ國王も駅に入り少頃あつて即て出らる衆官此より還りて都城へ入る者多し侍從臺諫司諫朝廷及外方監使守令に至り不善の事聞くに隨て論し申出し罪を請ふ等の役もだん／＼に跡に下りて至らざる者多かりけり惠陰嶺を過る比雨注くがごとく宮人ハ足弱き馬にのり物を以て面を蒙ひ号哭し行く臨津に至りぬれど雨止まず舟にて臨津を渡るに已に昏に向として物の色をも弁へず臨津の南の山の麓にふるき丞廳後所なりあり日本勢共この木材を取て桴筏を作り以て濟らむ事を恐れこれを焚しむ火光江北迄照らしければ是にて路を求め行事を得たり初更に東坡駅に到る坡州の牧使許晋長端の府使具孝淵等かねて都よりの使者の馳走のため此處に在り略國王の膳部を設けたり扈從の面々終日飢ゑ来り厨の中に乱れ入り手々に奪ひ食しければ將に國王の膳部も闕けむとす許晋具孝淵も惧れて逃去ぬかくて五月初一日開城府に發向せんと欲すれども京城よりの吏卒雲のごとく逃散りて扈衛の人なし適々黃海の監司趙仁得本道海黃の兵を率ゐて將に入て援んとす先づ瑞輿の府使南疑到着せしが軍士數百人馬五六十匹有りければ此を以て始めて發駕となりぬ已に出立に臨むで司鑰の官鑰を司る崔彦俊出て宮中の人昨日食せず今日もまた未だ食せず少々米を得て飢を凌ぎて行くべしと云ふ南疑が軍人の持たる所の兵糧雜穀二三斗を索めぬ午時に招賢站に至りしに趙仁得来り路中に帳幕を設け以て國王を迎ふ百官始めて食を得たり此夕ハ開城府に泊る五月二日威鏡道兵使申碯もこゝに来る日本勢未だ京城に入りて敵軍の形勢を察せしむ

加藤清正渡漢江并小西行長入京城之事

日本 去程に加藤清正ハ都城を心ざし押行處に先手に打ける加藤清兵衛庄林隼人より大將清正へ使者を以て其幅三町餘りも有らむと覺ゆる大河あるに舟一艘もなく渡すべきやうなしと云ひ越しけり清正自身河邊に行向ふと云へど

も其日夕陽に及びしかば是非なく川邊に宿陣す朝鮮勢ハ漢江を守りて有りけるが清正王城を心指し諸邑を掠めて押来る其勢ひ恰も風雨の發するが如く朝鮮勢ハ清正の進發の威風に氣を奪はれ敢て一戦にも及ばず臨津さして落行ける清正ハ是をも知らず翌日河邊に出て望み見るに川向ひにハ舟ども多く繋ぎ置きて陸にハ敵大勢備へを立て並居方々の木陰にハ白き旗川風に翻へれり士卒これを見て船にて渡らむと欲れとも一艘も求め得ず馬にて越さむとすれども白浪岸を浸して冷ましく見えければ諸勢あきれて居たりけり然れども清正ハ些とも屈せず良久詠め居たりけるに川上より水鳥四五羽浮み連りて向ひの岸を如何にも悠々と静かに流下りければ清正きつと眼を付て敵軍向ひの岸に備へなば水鳥何むで悠々と流れ遊ばむや察する処あの兵士と見ゆる物ハいか様にも作り物にてぞ有るらむいて水練の達者游渡りて見るべしとありければ曾根孫六言下に川へ飛入たりこれを見て究竟の若者共我劣らじと川へざんぶくと飛入くと遊ぎ渡り向ひの岸に繋ぎ置きたる船に取乗総軍やすくと川を渡りける敵の軍勢と見えしハ皆藁菰を束ねたるに物具せさせ弓矢槍力のごとき物ども取持せて立ならべ置き旗と見えたるハ白紙を繼合せ樹間に立置たるなり清正の明察皆々感じける小西行長ハ王城の一番乗を心懸け都を指て押行き驪州の江邊に寄すると云へども向ひの岸にハ敵勢矢尻を揃へて待かけ其上此川底深く流の早き事矢を射るが如くなれば行長も案じ煩ひ居たりしに江邊の北岸を守り居たる朝鮮勢悉く引取り北岸の防禦解けたり北岸を守りたる將を江原道の監司より呼び寄せたるゆゑ北岸の防禦解けたりと云是に於て行長急に差圍して民屋を打倒し竹木を切り取り束ね筏作り諸軍勢を渡しけるに中程にて結びたる繩葛切れ離れ覆るも有りけれどもなんなく総軍濟りけるに北岸に守り防ぐの兵一人もなければ馬蹄を早め王城さして馳せ行きけり五月三日辰の刻一説五月二日早味京城の東大門に著陣して鬨を發し城内のやうすを窺ふに兵卒悉く落失て人ありとも見えざされど關門を鎖石壁高く門亦高ければ容易に入るべきやうも見えざる処に寺木七四郎と云へる者進み出て門の脇なる水門より入つて見むと云ふ是ハ尤として皆人此義に同すと云へども方五尺ほどの水門に鐵を以て子を組入れたれば更に入るべきやう無かりけり京中に流る。水東大門の脇より出て漢江に落ちる。但東大門の脇に水門五つ有り水の落口に鐵を以て人の通はざるやう仕切を入ると云是也加藤近助と云ふ力量ある男銃炮の臺を脱し筒にてこぢ起しはね

のけ夫より内に入て門の扉を押開く行長士卒に下知をして拔懸すべからず酒家に入るべからず濫りに貪る夏勿れと堅く制して衆を整へ静まりかへつて入にけり行長京城の躰を見るにはや悉く逃げ走りて更に一人もなく殿閣に入り見れども監司守禦の臣一人もなければ宮門空く開かれたり其より行長ハ宮城の外に在りて兵士を分け四門を守らせ法度嚴重に云ひ達して後陣の味方を待居たり扱又加藤清正ハ大河を越し王城へ押行けるに木村又藏と云へる者馬に秣飼はむと見廻りて山に登り見れば向ひに都城とおほしく官家民屋數万陣見え高き處ハ宮城とおほしくて炎上る煙り少しづゝ立のほれり是都城に紛れなしと思ひしかば急ぎ立帰りて清正の前に罷出てこの處京城と見え候遙かに東北の山の端に朱の丸是小西楳桐是宗對等の旗多く見え紛れもなく味方の勢はや近づきたると覚え候とくく都城一番乗然るはしと云ふ清正も味方思ひの外途中にて隙入り人に先を越されん事こそ安からねさらバ休息もそこくにして打立よとて例の駿月毛に跨り乗出し近路を案内させ悪處をも嫌はず揉みに揉て駈られる程に瞬刻の間に都城に馳せつかれけり諸將追々馳來り民屋を放火して喚めき叫むて乱入し王城一番乗ハ清正なりと獨り笑みして寄せられしにはや行長昨日一説今王城を乗取りて小西が勢宮城を守護し四門を堅めて諸手の到著を待居たり清正の先手の勢進み來て門を明けよと呼はるに内より是ハ小西撰津守昨日王城一番乗を仕り手の者ども大門を堅め罷在るなり用事あらバ五三人入るべしと云士卒ども立帰つて其旨申ければ清正案に相違してけり斯て行長清正ハ都に逗留して後陣の味方を待つ處に総大将備前中納言秀家豊後侍従大友義統黒田甲斐守長政福島左衛門大夫正則小早川左衛門督隆景長曾我部土佐守元親蜂須賀阿波守家政毛利右馬頭輝元久留米侍従秀包立花左近將監宗茂其外數員參著あり秀家の陣營に諸將參會ありける先手の軍監早川主馬首毛利豊後守垣見和泉守竹中源助熊谷内藏助等も來會せり先平安道へは小西行長宗義智黄海道へは黒田長政大友義統全羅道へは小早川隆景久留米侍従秀包立花宗茂筑紫上野守咸鏡道へは加藤清正鍋島直茂江原道へは毛利壹岐守慶尚道へは毛利輝元忠清道へは蜂須賀家政京畿道へは長曾我部元親都城の鎮護ハ宇喜田秀家と定りけり其外釜山浦より都まで其間の城々にも勢を分けて相守らせ互に味方を援けしめらる

朝鮮 初日本勢ハ東萊より三路に分れて進む一路ハ梁山密陽清道大丘仁同善山より尚州に至て李鎰か軍を敗り一路ハ左道の長髻機張より左兵營蔚山慶州永州新寧義興軍威比安を陥れ龍宮河豊津を渡り開慶に出て中路の兵と一手になり鳥嶺を踰て忠州に入り忠州より両路に分れ一手ハ驪州にかゝり江を渡り楊根より龍津を渡り京城の東に出づ一手ハ竹山龍仁にかゝり漢江の南に至る又一路ハ金海より星州茂溪縣にかゝり江を渡り知禮金山を歴て忠清道の永同に出進て清州を陥れ何れも同く京畿に向ひしかバ旌旗劍戟千里相連り砲聲響きわたり過る所或ハ十里又ハ五六十里皆險阻に據て營柵を設け番兵を置いて守り夜ハ火を挙て相應ず都元帥金元ハ濟川亭に在て日本勢の至るを望み見て敢て戦はず悉く軍器火炮器械を江中に沈め衣服を變て逃げ奔る從吏官沈友正固く止むれど從はず李陽元守城の大ハ城中に在て漢江の軍兵已に散じたりと聞き城の守るべからざるを知り是も亦城を出て楊州に走りけり江原道の助防将元豪ハ初より數百の軍兵を率て驪州の北岸を守り敵軍を支へしがハ敵も數日渡る事能はざりしが既にして江原道の巡察使柳永吉檄文を馳て元豪を本道江原へ呼返しぬ日本勢は閭里の民屋及び官舎を毀ち屋材を取り聯て長筏を組み以て渡る中流にて水に漂ひて死する者も多かりけれども元豪既に去りて江のほとりに獨りも守る者無し故日を累ねて畢く渡る是に於て三路の日本勢京城に攻め入りぬ城中の民も已に散じ去て一人も居る者なし金命元ハ漢江の守りを失ひ行在へ向はんとせしが臨津に至り吏の由を註進しけれバ命ありて更に京畿黃海道を徵して臨津を守らしめ且申碁にも命して同く守りて以て日本勢の西に赴く路を遏めしむ是日五月國王ハ開城を發し金郊駅に泊る四日義金岩平山府を過て宝山駅に泊り五日安城龍泉劍水駅を過て鳳山郡に泊り六日進て黃州に泊り七日に中和を過て平壤に入り給ふ

初全羅道の巡察使李洸ハ本道全羅の兵を率ゐて都の援兵に登りけるに國王西狩し京城已に陥ると聞えしかば空く兵を収て全州に還りしに道内全羅の人李洸か戦はずして囀りけるを咎め憤り不平なる者多かりければ李洸も安からず思ひ更に兵を調へ忠清道の巡察使尹國馨と軍を合せて進む慶尚道の巡察使金碎慶尚も亦其道慶尚より軍官數十四人を率ゐて來

會す其兵総て五萬餘人龍仁に至り北斗門の山上を望ミ見るに敵の小壘有り李洸心にこれを易どり先づ勇士白光彦李時礼等を遣して敵を嘗ミしむ光彦等先手の兵を率ゐて山に登り敵の壘を去る事十餘歩にして馬より下り矢を射かけれども敵出合はず其日の晩に敵光彦等が稍懈りたるを見て白刃を振つて大に呼り突出す光彦等あわてふためき馬を索めて走らむと欲すれとも及ばずして皆敵の為に害せらる諸軍これを聞き震ひ惧る此三巡使ハ皆文人にて兵務を閑はず多勢と雖も軍令も調ふらず且險に據て備を設けず真に古人の所謂軍行如春遊安得不敗と云る者なり翌日果して敵軍には朝鮮勢の心臆するを知り数人刃を揮ひ勇猛に打て掛りしかは三道の軍兵これを望ミ見て大に潰え乱る其聲山の崩るゝ如く軍資器械を委棄る亶數知らず路を塞ぎて行亶能はざるほどなり日本勢悉く聚めてこれを焼棄けり李洸ハ全羅に還り尹國馨ハ公州に走り金碎ハ慶尚右道に還りけり

朝鮮征討始末記卷之二終

(卷之三外題)

正實朝鮮征討始末記 三

朝鮮征討始末記卷之三

對州

山崎尚長 輯

村一善 校

小西加藤黒田臨津合戦之事

日本 小西行長加藤清正黒田長政等京城を進發して臨津の南に陣を取る朝鮮の軍勢江中に大船を數艘繋ぎ浮め北岸に陣を取り江灘を守る但江を隔て、鉄炮を放ち矢軍のミにて數日渡る事を得ざりし小西加藤黒田謀を巡らし俄に陣屋に火を掛けて引取りけり朝鮮の軍勢とも和軍の敗するを討とめむと急に進むで追懸たり加藤小西が軍勢とも崩れ立ち我先きにと逃げ奔る敵山の後の切所に入りたる時兼て設け置きたる伏兵一度に咄と突て出る朝鮮勢此處にて大崩になり敗走す寄手氣に乗して短兵急に追懸ければ敗軍の朝鮮勢江の岸に至ると云へども渡る夏を得ず岸の上より水中に飛入々々溺死せり逃げおくれたる者共ハ寄手頻りに追懸けるに一人も刃向ふ者なく立足もなく敗走するを追詰々々撫切りに討ち捨けり向ひの岸に居たる朝鮮勢是を見て逃來味方を救はむとせず一同に逃走けり和軍大に討勝て臨津を渡り黄海道の安城駅に著陣し爰にて人馬の足を休め其より黒田長政ハ黄海道に赴き小西行長ハ平安道加藤清正は咸鏡道に赴きける

朝鮮 副元帥申恪ハ初め金命元都元帥に從て副將たりしが漢江の崩れにも金命元に從はずして李陽元守城大将に從ひて楊州に居たりけり時に咸鏡道の兵使節度使李渾が兵至る申恪ハ李渾と兵を合せ日本勢の京城より出て市町をあらし散掠するを邀へ撃破りけり京城守護の日本の將浮田秀家朝鮮の勢の楊州に在る者を討罷せむと打出けるに申恪に出合ひ戰ひに及びしに浮田勢崩れ立て敗北し追首六十餘級朝鮮勢に討取られたりと云ハこの追り合ひなり日本勢の朝鮮に入りしより始めての捷軍ゆゑ人皆踊り上り悦びけり然るに金命元臨津に在りて申恪擅に他處に適て都元帥の号令に從はざる由を注進して右相右議政兪泓邊にこれを誅せむと請ひ宣傳官を差下せしが此捷軍の注進至りしかば跡より追手をかけて止められども及ばず終に軍中にて斬れけり此申恪ハ武人にして素清慎なり嘗て延安の府使たりし時城を修め壕を深くし軍器を多く備へ置ぬ後に李廷毓延安を守りて城を全く持堪へたり皆人以為これ申恪が功なりと云へり此たびの死其罪に非ざる上に九十歳に及びたる老母有りければ聞く者これを痛み哀まぬハ無かりけり

知事韓應寅平安道江邊の精兵三千人を帥る臨津に赴て日本勢を撃しむ尤も金命元が節制を受る事勿れとなり

金命元ハ副元帥申恪か

号令に従はざる注進し左相尹斗壽諸人に向ひて斯人の状貌福相あり必能く事を弁せむと云り應寅遂に命を受けて臨津に向ひて罪におとせらるかゆえ也

りき一日日本勢江の上の陣屋を焚拂ひ帷幕を撤ひ軍器を取片付け退き遁るゝの状をなして以て朝鮮勢を誘きけるを申碯等輕銳して謀なきものゆゑ以為敵實に通るゝごとて江を渡つて追討むとす京畿の監司権微も申碯と一致なれば金命元も禁ずる事能はず是の日韓應寅も陣し悉く衆軍を以て追討むとす應寅が率る所の者皆江邊の健兒武士を云ふ日本にても昔こんでいと云たるにて北虜真女と近くして備に戰陣の形勢をも諳したる者どもなれば應寅に告て云軍士遠く来り罷弊たるに尚未だ食せず器械未だ整らず後軍の兵も来り揃はず且敵の情偽も未だ知ざれば願くは少く休息ありて明日勢ひを觀て進み戦はれよと云ひけれども應寅ハかゝる場に軍吏を押留るは曲事なりとて其者を斬て戒めける金命元ハ応寅が新たに國王の命を承け来り且己が差図を受る事勿れとの事なる故に不可を知ると雖も敢て云はず別將品六劉克良ハ年老て兵になれたたてば力めて言ふ輕々しく進むべからずと申碯怒て斬らむとす克良云我髪を結朝鮮の小童ハ髪を三つより組て長く後ろに垂れ結髮と云ふて早年をてより軍陣に従ふ豈死を避るを以て心とせむや云々する所以の者は恐くは国事を誤らむ耳とて憤々として外に出て其手勢を率ゐて真先に渡る朝鮮の軍勢共進むて既に險隘の地に入る倭軍果して精兵を山の後に伏せ置き一時に俱に起立しかば朝鮮の軍勢奔り潰ゆ劉克良馬より下りて地上に座して此吾死する所也と弓を彎て敵數人を射倒しその身も終に討れけり申碯も討死す軍兵共奔つて江岸に至れども渡る事を得ず岩石の上より自ら江に入る者恰も大風に木の葉の乱れ飛ぶが如し其未だ江に投するに及ばざる者共は敵後ろより長刀を奮ひてこれを斫る皆匍匐刃を受て敢て手向者は無りけり金命元韓應寅江北よりこれを望み見て氣を喪ふ商山君朴忠侃折ふし此軍中に在しか馬に騎り真先に走りければ諸人は是を見て以為金命元なりと皆云元帥走りたまふと呼はりければ諸軍の江灘を守り居し者共聲に應じて呼はりければ我先にと散じ失せけり金命元韓應寅ハ行在をさして引還しけれども國王よりも其罪を問

れさりけり京畿の監司権徴は加平郡に入て乱を避しかば日本勢いよく勝に乗じて西を指て攻下りなかく拒ぎ止むべきやうはなかりけり

加藤清正入咸鏡道摘両王子之事

日本 去程に加藤清正は安城駅より小西黒田と立分れ咸鏡道へ志し安城の居民を摘へ此者に案内せさせて押行けり是より先きに和学通詞和字清学漢学藜古学有り咸廷虎と云者生捕是を通詞として諸軍を辨し京城を出て十三日目に咸鏡道の指口安邊に著陣す茲にて鍋島を待合せ五月十六日加藤清正鍋島直茂両勢共に安邊を打立て三日目に長橋に陣を取る是より清正ハ手勢一萬を引率れて老里峴を踰え鉄嶺の北に出で日に行事若干里勢ひ恰も海潮の湧くが如しかゝる處に北道の兵使大軍を帥る来り海汀倉と云處にて礮と行遇たり北兵もとより射騎に長じたれば矢ぶすまを作りて散々に射る儀太夫井上庄九郎一番に槍を入れ戦ひけるが日已に黄昏に及びしかは清正も戦ひ屈し兵を引て一村に屯す北将又士卒を引率し取圍むで夜討をするに此處大倉あつて米穀多く籠置たれば清正倉の中の俵米を取運ばせ積み雙べ其蔭より鉄炮を發ちければ透間も無き程に立比びたる北兵共さんぐに打なされ遂に敗れ山上へ引退く其夜清正敵陣の廻りに兵卒を伏置既に未明に及びける比四方より鉄炮を放ちて攻入りしかば北軍一さゝへもせず奔走す清正の兵士追詰て討取り北将も勢ひ盡て鏡城に逃込けるを清正追つゞきて息をもつかせず攻寄せ屏際に著くと等しく諸勢乗込切て廻りける北兵散々に討なされ北将も此處にて討れければ遂に鏡城も攻落しけり斯て清正ハ晝夜を分たず押行ける程に都城を立て六十八日目に會寧より四里朝鮮の四十里こなたとくせむと云處に著きけり扱朝鮮の王子ハ日本勢を怖れて會寧迄落来り城へ入て暫くやすらひけるに此會寧ハ朝鮮にて流罪人の居處にて方三里朝鮮の三十里の廣野あり其れに山あり石壁を高く築き城の如くに作り置て王城よりの流人を籠め置廣野に粟稗等の雜穀を作りて渡世としける朝鮮國にて流罪に絶島定配極邊遠竄

なと云件あり右の内極辺と云ハ咸鏡道鎭城等と云へるものはなり彼流人ども徒黨して王子は此城中の者共の敵なり幸ひ今こゝに來れり摘にして日本人に渡して年來の恨ミを晴さむと議しけり會寧の吏も衆にすゝめこまれ忽ち心變りして清正の陣に使を遣はし王子を摘にして渡さむと云越しければ清正大に喜び其夜の未明に陣處を打立ち常に秘藏せし駿月毛と名づけたる名馬に乗真先に駆ければ我一に後れじと逸足出して馳せけるにこそ行程四里が間を只一瞬に駆付ける城中には門を打ち静まり居たりければ清正美濃部金大夫に書翰を認めさせて王子を渡すべき旨を云遣しける會寧の吏より返簡に王子は渡すべし諸人の命を助け所領を賜るべし且城中糧盡て王子といへども二三日口中の食を斷り冀くは朝餉の支度をして玉はるべしと云送り清正再答に條々聞届けたり明卯の刻小勢を以て城中に入るべき由云越しけり清正の老臣共評議して若し敵の謀計にて大将を討取らむとの手段にてやあらむ又左なくとも案内をも知らざる異國の城中へ大将の小勢にてうかく入られん事思慮なきに似たり所詮誰にても清正なりと名乗て王子を請取べしと云ひければ清正聞て何れも此處にて王子に追付たり今一命を惜み手延にして若王子を取逃し他人の手に渡しなば無念の至りなり敵偽りて吾を欺き討むとすとも朝鮮の弱兵何程の支か有らむ何れにも狐疑する支なかれとて朝餉の支度せさせ究竟の勇士共に饌膳酒肴など色々饗應の具を持たせ六十餘人役人に仕立置清正は近習十五六人を従へ城中に入りけり至て裏の体を見るに長七八町程にして廣さ六十間も有らむとおぼしき馬場あり其傍に館舎あり王子これに居けり清正此處に至りて對面あり拜答の礼終りて膳を供へ兼て相圖の通り士卒等弁當にことよせ椀折敷其外の器物を一人に一色づゝ持せ六十餘人込ミ入りたり王子に附添ひ居たる者共これに驚き騒立ち王子を討ぞと心得半弓を彎て清正を射むとす清正こそ如何にと制しとゞむれども言ハ通ぜず士卒共聲々に喚はる程猶進み近づきて今ハ危く見えけるが清正きつと思案を巡らし異國には印章を以て約をすと云支ありと思ひ出し燧袋より印を取り出し彼の印判を紙に貼し一人づゝに與へしかば其意通じけるにや是にて静まり皆々矢を逸して礼をなしける清正危き場を遁れて其後家來の者共にも度々

語られけるは日本にて數度戦場に出ると云へども是程の危難に逢はず曾盟に印章を用ゐると云ふ衷を知らずんば大死すべかりつるぞと云はれしとなり清正是王子其外の者共を鏡城に籠め置き警固の士卒を淺し是を守らせ随分響應すべき旨申付置き猶北東さして押行路々の城邑残りなく攻落し放火して勇猛を示し朝鮮の國民清正を鬼上官と呼べけると云ふ壬辰亂のならばをずるに敵船を圍み攻戦の修練をすこれを俗に肥後との調伏朝鮮の東北極女直界迄攻入ける所謂女直ハ寒國にて比ハ七月中旬なるに霧降り風雨烈しかりけり此所にて後藤と云へる通詞を一人生捕りたり此者ハ元來日本松前の者なりしが漁船に乗り悪風に漂され思はずも此處に漂著し既に二十年を経たり蝦夷志に延尉去此而陸北海と云考るに義經も蝦夷より女直の奴兒干に至られたると云へは女直界有し左も因て女直口朝鮮口を自由につかひければ能き通詞なりとて是を郷導とし其名を後藤次郎と改めける後藤云ふべき也此處より天氣快晴なる時坤西南の方に当て日本の富士山近く見えけりとなり或説富士にてハ有べからず熊州の海門ヶ嶽なるべしと云り又一説海門ヶ嶽にてハ有まじと云り後藤のりいしり成べし是是説也と云り近く見えけると云へは定玆ハ昆布多き所にて昆布にて民屋を葺き居住せり日本人も初めハ昆布と云事を知らざりけるが後に是を知り屋根をめくり羹とし食しけり日本松前の昆布ハ蝦夷に繁茂して東北夷海を経て朝鮮海に連り生ずるならむ朝鮮海に連り生ずるならむ朝鮮海に連り生ずるならむ朝鮮海に連り生ずるならむ斯て清正ハ後藤次郎を郷導とし初め九日路にて来りしを近路を経て五日路にて元の鏡城に凱軍あり夫より鏡道を打立數日を経て安邊へ著陣し暫く軍勢を休め居られける處へ浮田秀家并石田増田大谷の三奉行連署の飛札備前の家士三騎早追にて持来り大明の援兵来り朝鮮軍勢共氣を得爰彼こに起り王城頗る迷惑に及べり清正も早々引返され力を合さるべしとなり

韓記曰、清正出兵于女直境剽掠村里屢矣、筑城于金山、使加藤與三右衛門其兵三千守之、又一城築于橋中、使九鬼四郎兵衛天野助左衛門山内甚三郎其兵三千守之、清正到咸鏡道、御人民以撫育之思屢酒肴以悅之、依是人皆懷之、時群盜蜂起、障塞清正帰釜山浦後路故王城諸將欲招清正、浮田秀家使其家臣三人裁連署之書遣于清正而速招之、清正答曰、吾亦欲之、然豈可弃金山橋中兩城之軍兵乎、并合彼兵而帰王城耳清正即發自鏡道、使齋藤立本庄林隼人龍造寺又八郎其勢五千先進迎、與三右衛門、清正亦繼發、既而齋藤立本庄林隼人等到金山時、群盜大起、重圍金山、立本隼人見之、揚鞭勵兵攻擊甚急、群盜敗走死傷者尤衆、立本入城中問與三右衛門如何、答曰、與敵

兵相逢、奮戦而既死矣、立本隼人聞憐之、火其骨而帰、其後清正率兵攻群盜悉平之、合金山橋中之城兵而帰王城、清正早速安邊を打立三日目に長橋に著陣有る此處ハ鍋島加賀守直茂相良宮内少輔頼定在陣にて半途に出迎ハれ兼て陣城を設け置り是に在陣し給うべしと直茂申さる清正大に喜れけり扱加藤鍋島の士處々の城々へ手を分け籠め置れたるゆゑ清正直茂より城々を明け長橋へ来るべき由差図ある此時北地にても朝鮮勢處々に聚り日本勢を打留んと道路を塞ぎ拒みけれども清正の士加藤清兵衛加藤傳藏片岡右馬允直茂の士鍋島平九郎成隅十左衛門龍造寺七郎左衛門以下の一騎當千の剛の者共朝鮮勢を駈破りく、皆長橋へぞ馳せ来りけりこゝに於て主計頭清正加賀守直茂宮内少輔頼定生捕の兩王子以下を率る総軍異議無く十六日目に王城へ著陣せられけり楮清正兩王子を捕へ王城に帰りたる由即ち書を馳せて名護屋に注進を遂られける太閤大に怡悦あり主計頭が勲功挙て算ふべからずと云へども今度の戦功ハ異國にて其國王の子を兩人返生捕たる事比類なき手柄賞するに猶あまり有りとして吹籠斜ならずとて感状に添て吉光の脇指并に黄金五百両褒美として賜ひけり清正の武功感賞せぬ者ハ無りけり一書に曰此軍行や朝鮮の國妃と王子と與に落去る侍女頸に一物を係て覆面せり其一物凡そ一尺計り蓋し牛の脯也と云り朝鮮人牛肉を賞賜せる事甚し尤牛を屠るに堅き制度あり象骨紀間に曰州（牧使あり）府（府使あり）營（兵使水使あり）に一日牛一頭つ、京中にて一日に牛千頭計部（部守あり）縣（縣令縣監あり）の地一月に十頭計り北土の交易に年中五百頭又各鎮（鎮戍所也）にて日三二頭つ、屠り販く牛を屠る者を日と云監官と云る肉より牛の吟味役あり忍て私に殺す者職細の謂ありと云々和館にて解守、代官三代官通詞以下迄歳末祝儀の束縛に判事共より牛の屠るに應る鶏林の牛肉万國に勝れたりと云和館中の家僕ども交易して部會にてこれを販く各丸薬となして服す脾胃の要薬補虚の良方にて乃ち普く世の知れる處なり近時江戸屋敷の村氏も施し出るもの尤其功著し清正の先驅將に此を捕へむとす清正曰顔面を視る事勿れ侵し掠る支勿れ触犯す支勿れこれと知らざる体にて飲食を與えて逃去らむべし努々不沙汰有べからずと堅く下知せられけるゆゑ士卒とも命を守り知らぬ顔にて食物を與へ己が心任せに逃去らしめけり朝鮮人ども清正の驍勇を鬼神の如く畏ち怖れけるが且又其情けあるを深く感じけると也

朝鮮 日本勢咸鏡道に乱れ入兩王子敵の軍中に陥る從臣金貴榮黃廷或黃赫及び本道鏡城の監司柳永立北兵使北兵馬節度使鏡道北兵馬節度使皆敵軍に陥没せらる倭学通事咸廷席と云者あり京城に在けるが日本の大将清正の為に生捕られ同く清正に隨て北道

迄入しが敵軍退いて後逃て京城に還り柳成龍に對面して北道の叟も語りしか頗る詳なり抑清正ハ敵將の中にも尤勇悍にして善く闘ふ平行長と同く臨津を渡り黃海道安城駅に至り二手に分れて攻入らむと謀りけるがいづれか何れに向ふべきと決定なりかたけれハ兩將圖をとりけるに行長ハ平安道を得清正ハ咸鏡道を得たり是に於て清正安城の居民二人を擄へ道の向導をなさしむ二人共に辞するに此地生長して北路を存ぜずと云清正一人を斬て捨けれハ一人懼れて先導仕らむと請ふ谷山の地より老里峴を踰えて鉄嶺の北に出て日に行事數十里勢ひ風雨の如し北道の兵士韓克誠六鎮沙湫 興延川 瑞川 蔚川 龍城の兵を率ひて海汀倉にて行遇たり北道の兵ハ騎射を善し地又平行なれば朝鮮勢左右に分れてかはるべくに出且馳せ且射たりければ日本勢支ふる叟能はず退て倉中に入る時日已に暮ける軍士とも少し休ひて敵の出るを俟て明日復戦はむと云けれども韓克誠聽入れず軍卒を指揮してこれを取圍む日本勢は倉中の穀石を取出し列置き城と爲し以て矢石を避け其内より多く鳥銃ヲ發ちける朝鮮の軍兵櫛の齒を並べたることくに立て重疊して束ねたるが如くなりしかば中れバ必貫穿れ或は一丸に三四人を打斃され一軍遂に大崩れとなりぬ克誠ハ兵を収めて退き嶺上に屯し天明を待て又戦はむとす日本勢ハ夜潜に朝鮮の軍の後ろを環り敢て草間に伏居たり翌朝は大霧にてものゝ見分けも成難かりき朝鮮の軍勢ハ猶も敵兵は山下に在ると思ひしに忽ち一聲の鉄砲響く程こそあれ四面より大に喚ひ叫んで突てかゝる皆日本勢也朝鮮勢驚き大崩れとなり將士等敵の無き方へと向ふて奔走す悉く泥沢の中に陥る處を日本勢追つめて撫で切にす其殺さるゝ者數を知らず克誠やうく遁れて鏡城に入り遂に擄にせられぬ兩王子臨海君順和君は俱に會寧府に至る蓋し順和君初め江原道に在りしが敵兵はや江原道に攻入けるゆゑ道を轉て北道に向へり是時日本勢王子を追詰来る會寧の吏鞠景仁と云者同類を率て謀叛して王子及び從臣を縛りて日本勢を迎へける敵將清正是を解き軍中に留め置き引返して咸興に屯す漆溪君尹卓然ハ路中より病ひと稱して路をかへ別害堡をさして行ぬ同知李暨ハ王子に従はず江原道に留まりしゆゑ皆執はれを免れけり柳永立ハ敵の陣中に數日拘へられて居たりしが敵も文官と思ひ防禦少して懈りける間に乘て脱れ走りて行在に來りぬ

小西行長押臨大同江之事

日本 去程に小西行長ハ安城駅より加藤清正と立別れ鳳山迄来り國王平壤におはしまし聞えしかは黒田長政宗義智と同く路程を急ぎ遂に六月十日大同江の南岸に到り前隊の兵數百騎進むで江中に馳せ入しかバ江中の小島に居住する士民共大に驚き周章て東西へ北げ走る小西が軍勢猶々進むで大同江を一息に渡らむと皆々馬を乗入れく遊せて既に岸近くなりたる處に北岸の朝鮮勢の中より精兵をえらびたると見え指詰引詰發つ間だ渡り掛りし軍兵どもの的になりて十騎計射斃されしかば小西が勢進みかね遂に本の岸に引返し南岸に陣を取れり北岸は朝鮮勢守り居けり

朝鮮 李鎰ハ既に忠州にて敗軍し江を渡り江原道の界に入りさまくと転輾して平壤の行在に至る時に朝鮮の諸將ハ京城より南方へ下り或ハ討死し或ハ逃走りて一人も駕に従ふ大将無く敵將に至らむと聞えしかは人心益懼れあひぬ李鎰は武將の中にも素より重名有れハ敗軍の將なれども人々其来るを聞て喜ばぬハ無りけり李鎰ハ既に屢敗軍し荆棘の中に竄れ忍ひて頭にハ平涼子竹笠の事なりを戴き身に白布衫を穿ち屨履朝鮮の土民履しものと云をつけて至る形容憔悴たるを觀て歎息せぬハなし柳成龍云此処人皆公をたのみて力らとす而るに枯槁の如く衰へぬる体にては何を以て諸人の心を慰めむと行囊旅中のつみの中より藍色の沙帖裏ひたとりたを出しこれを與へけり是に於て諸宰臣或ハ驥笠馬尾にて作或ハ銀頂子笠の飾り彩纓笠の飾り等を與へけるを目前にて著換ければ服の飾り一きは新しく成りぬるに獨り靴を脱て與る者なかりける故猶も草履を著けて居たりけり錦衣に草履ハ釣合はずと諸人一笑せり斯て碧潼の土兵任旭景と云者物見の註進にて敵軍已に鳳山まで来りぬと告げたりける然るに詠歸樓下の水分れて二つとなり淺くして涉りつへし萬一敵軍朝鮮の土民に案内させ暗に江中を渡り猝に押寄来らば城は危き事なりとてかの淺瀬の渡りを守らしむべしとそ李鎰を遣はす李鎰萬頂臺の下に至り城を距支纜に十四里日本の里餘江南の岸を望ミ見るに敵兵来り聚る者已に數百江中小島の居民共驚き叫て逃散す李鎰急に軍士十餘人をして島中に入りこれを射よと云軍士畏れて進まず李鎰劍を抜てこれを斬らむと欲す然後人みな進みけり敵は已に江水の中に打入り多く岸に近づくを朝鮮の軍より急に強弓を以てこれを射連りに六七

人射斃せば日本勢遂に引退く李鎰仍て留て渡口を守りけり

重軍勢渡海朝鮮之事

〔日本〕 去る二月太閤秀吉數萬騎の軍勢を朝鮮に遣し朝鮮既に敗れぬれば定て明より援兵の来らむを慮り且都城の制法諸士の押への為め三奉行を始め又數萬騎の軍勢を指向けらる一番に増田右衛門尉長盛石田治部少輔三成大谷刑部少輔吉隆前野但馬守長泰加藤遠江守光泰を一列とす二番に淺野左京大夫幸長宮部兵部少輔南條左衛門尉木下備中守監屋新五郎齋村左兵衛尉中川右衛門大夫秀政別所豊後守明石左近一柳右近將監遠藤右馬介谷出羽守竹中源介石河備後守服部采女正を一列とす三番に池田少將輝政細川越中守忠興長谷川侍從秀一木村常陸介岡本下野守小野木縫殿介野村兵部少輔糟谷内膳正片桐東市正直盛舎弟主膳正貞隆高田豊後守古田兵部少輔藤掛三河守太田小源太早川主馬正毛利兵部少輔龜井武藏守茲經を一列とせり茲に伊達陸奥守政宗ハ會津を領せられ又二本松も討てこれを取らる去る天正十八年相州小田原陣の時太閤に謁見せられ此時淺野彈正大弼長政を以て朝鮮に渡海せむ事を望まれしかば太閤許容有り長政も嫡子左京大夫幸長を召しつれ政宗と俱に朝鮮へ赴る石田三成増田長盛大谷吉隆等ハ太閤の朱印を持ちし六月諸勢名護屋を發船す其書の略に諸士不敢怠惰横行于朝鮮大明儼其武備正其製法而可也と云々斯て重て指向往る、處の諸軍勢朝鮮へ著陣有しかは先達て渡り込たる諸卒弥勇みをなし日々諸邑を侵し掠め攻取る處の城々に人數を籠めて守らしむ先つ釜山浦の壘には筑前中納言秀秋目附役太田小源太安骨浦には立花左近少監宗茂加德には高橋九郎筑紫上野介竹島には毛利久留米侍從秀包西生浦には淺野左京大夫幸長太田飛騨守其外王城迄の城々に軍勢を分て守らせ諸軍続きわたり平壤を指て押寄り

〔朝鮮〕 遼東の都司某うたがひ怪しみ鎮撫林世禄をして倭情を探らむ為に朝鮮に来らしむ柳成龍是のひ命を承て唐將の接待を致せり馳走此時遼東には日本より朝鮮を犯すと聞き未だ久しからずして又都城も陥り國王西に遷ると聞え

既に又日本勢平壤迄至ると聞えしかば甚だこれを疑ひて以爲日本勢の變いかほど急なるとも箇程猝處には有べからず或るひは朝鮮ハ日本の爲に先導を爲すならむと疑ひぬ柳成龍其疑ひを霽さしめむ爲に相伴ふて練光亭に上り形勢を望ミ見せけるに折ふし一人の日本人江東の林木の間より乍ち見え隠れけるが已にして二三人も繼ぎ出或は坐し或は立意態安閑として道路に休息する状の如し成龍指示して世祿に云けるは此日本の物見なり世祿柱に倚りかゝり望ミ見て殊に不信の色有て日本の兵は何とて斯く少きやと云ふ成龍か云日本は巧みにして詐謀多し大兵後に在りと雖先来て偵ひ探る者數輩に過ぎず若し其少を見てこれを忽にする時は必敵の術に陥らむと云世祿うなづきて亟かに回咨（尋ね）を求めて馳せ去りぬ

玄蘇調信会李德馨之事

日本 去程に小西行長ハ平壤に著陣しけるが京城の諸將へ使を馳て平壤を攻落さむ亘掌の内にあれば不日に平壤城を陥れ其より鴨緑江を濟り明へ打入るべき旨を云ひ遣はす宇喜多秀家を始め諸將評議有て全羅慶尙の各郡未だ悉く下らず後ろに大敵を置ながら鴨緑江を渡りなば敵の大軍我後へを襲はむか前後に敵を受けなば進退いかゞならむ先重兵を京城に駐め舟手の勢を以て西の方全羅に向はしめて遶つて西海道をへて大兵水陸より並び進むで戦はむ亘全計たるべし猶良策を廻らさるへしとの答へなり是に於て行長思慮を廻らし僧玄蘇柳川調信に命して朝鮮李德馨に書簡を送り直談せむ亘を云遣しけり德馨小船に乗りて出来り玄蘇調信等と面談す玄蘇云く日本道を朝鮮の道路より明に通ぜむと欲す朝鮮是を拒むによつて此の如く干戈となる今にても領掌有らは無事に成らむと云李德馨返答に先兵を引取れよ其上にて和談を成すべしと云調信等日本勢の勇猛斯のごとくなる上ハ和談に随かはすむば實に朝鮮ハ粉にならむと論せば德馨黙して遂に各別れ去る日暮しかば小西ハはや軍勢を押し大同江の東岸に陣を張て回天の氣をぞ顯はしける

朝鮮 左相政議尹斗壽に命じて都元帥金命元巡察使李元翼等を率ゐて平壤を守らしむこの時已に城を出らるべきに定りぬれども何方をさして適む所を知らず朝臣多く言ふ北道の地僻にして路も險ければ以て兵禍を避くるに宜しと蓋し是時敵陣已に咸鏡道を犯して道路通ぜざれハ其變を報る者なく故に其こと知れざる也是に於て同知李希得曾た永興の府使たりし時惠政有て民の心を得たるを以て咸鏡道の巡察使とし兵曹佐郎六曹に正郎佐郎各有り金義元従事官とし北道に往しむ而して内殿廷及ひ宮嬪以下先城を出て北に向ひぬ諸士議論區々たり知事韓準何分にも北道に向はれむ事便利なりと申すゆゑに内殿遂に咸鏡道に向はる時に敵大同江に至りて已に三日に及べり柳成龍等練光亭に居たりしに江の向ふに一人の日本人木の先きに小さき紙を付け江沙の上に立置たり火炮匠金生麗をして小船に棹さして往てこれを取りむるに日本人の兵器を帶らざる者出来り金生麗に書を附して以て送りぬ其書至りて開き視れば書面に朝鮮國礼曹判書李公閣下に上ると有り蓋し李德馨に與ふる書にして平調信柳川豊守玄蘇仙果が書した、むる處なり其書の大槪德馨に見えて和講を議せむとなり因て德馨扁舟に乗て平調信玄蘇に江中にて會し相勞問する事平日の如し玄蘇云日本路を借て中国に通ぜしめば事無けむと云德馨まづ兵を退しめて後和講を議せむと云調信等應對の語頗る不遜なり遂に双方別れて去る其夕べ日本勢數千人江東の岸上に陣を張る

小西行長等大同江岸對陣之事

日本 斯て小西行長宗義智松浦鎮信有馬義純大村純忠五島純玄等數軍を率ゐて平壤を攻むとて江岸に屯し先手の兵の内より河へ馬をのり入たれども水深ければさうなく渡るべきやうもなく擬勢ばかりにてやミけり又歩兵の中に大兵のたくましきに長さ五六尺又は七八尺計の大刀を木にて作り銀箔を押たるを各ふりかたげ往来しければ日に映じきらめきけり其程遠ければ城兵ども木刀とは知らざるか此大刀にも氣を奪はれ大に怖れたると見えたり日本勢は江を隔て、城に向ひて頻りに鉄炮を打掛け朝鮮勢は精兵の射手を勝りて船にのせ川の中流に至り寄手を射させけるさ

しもの大河なれば日本勢もさうなく渡すべくもあらずされども久しく雨降らず尋常の川々は渴水せる折なれば淺瀬たる知り無二無三に押わたり切まくる程ならば朝鮮勢の怯弱直下に撃破らむ事や有べき若し大雨降つゞき水かさ増る程ならばいよく渡り難からむ今の内の事なるべしと各氣をいらちたる評議にて何國歟淺瀬ならむと諸軍日々河邊へ出て水面を彼方此方と見廻せども未だ淺瀬と覺しき処を考へ當らず只河水の一面に滾々と流るゝを見る計にていかむとも為すべき方なく十餘ヶ所に陣を取り互に河水を阻て、日々矢炮の迫合のみにて此河いつ越すべくも見えされば諸軍勢手足を摩り頗る退屈の色見えけり

朝鮮 六月十一日國王は平壤を出て寧邊に向はる大臣には崔興源兪泓鄭徹等扈從す左相尹斗壽元帥金命元巡察使李元翼を平壤の留守とす柳成龍も亦唐將接待としてこゝに留る是の日本勢城を攻む尹斗壽金命元李元翼柳成龍練光亭に居たり本道^{平安}の監司宋言慎大同城の門樓を守り兵使李潤德浮碧樓より上の江灘を守り慈山の郡守尹裕俊等長慶門を守る城中の士卒民夫合て三四千有りしが城堞に分配せしかども部伍も正しからず城上の人或は疎或密或ハ人の上に人あり肩と背と磨り合ひ或は數の塚に一人も無きも有りけり衣服を乙密臺の近邊の松樹の間に掛け疑兵と名附たり江を隔て敵陣を望ミ見るに左程大勢とは見えざりし東大院の岸上に一字陣を排作^{一字}陣を張^{文字}に列ねて紅白旗を豎たり恰かも朝鮮國の挽章の如し^{挽章は死を送る時其人の德行を述へた其中には善て旗の如く葬式に持たす}其中より十餘騎を出し羊馬橋に向て江中に騎入りけるが水深く馬腹にひたすほどなれば皆轡を按へて列り立て將に江を渡らむとするの状をなす其餘江の上に往来する者或は一二人連れ或三四人づゝ何れも大劔を持たり日の光りに閃々恰も電の如し或人云真劔には非す木を以てこれを作りたるに白蠟を沃かけて人の眼を眩すなりとも云り然れども遠ければ見分け難し又六七人鳥銃を持って江邊に來り城に向けて放ちしが其聲甚だすさましく丸江を過て城に入る遠きものは大同館に入り瓦の上に散落つ其間幾千餘歩と云つべし或は城樓の柱に中り深く入事寸に及ぶ又敵の紅の衣装したる者練光亭の上に何れも會座せしを將帥たると知り鳥銃を挟み邪睨てしりて進ミ渚の沙の上に至り丸を放つにあやまたす亭上の二人に中る然れども遠きが故に重く傷つ

かず軍官姜士益と云者防牌の内より片箭の長さ一尺五六寸なり細き木を櫓の如くになりてその櫓に片箭をのせて腕一を以てこれを射さしむ矢遠く飛て沙の上に及ぶ紅衣の者逡巡して却ぞく元帥金命元善く射る者を下知して快船に乗せ中流にして敵を射させける此快船稍東の江岸に近くなれば敵又退き避く朝鮮軍の舡上より玄字銃玄の字を刻みたる大銃を發ちしに箭の大き椽の如くなるが江を打越しけり日本勢各仰ぎ視て皆噪きのめきける箭の地に落たるを争ひ聚まりてこれを觀る是日兵船を整へさるを以て工房の吏一人を斬る時に久く雨ふらず江水日々縮る曾ち宰臣を分ち遣はし雨を檀君名は王儉朝鮮國の元祖と云大白山檀君の時並び立と云箕子の箕子を朝鮮に封す平壤に都す是を後の朝鮮と云民に礼義田蠶織作を教ふ東明王姓ハ高名ハ朱蒙高句麗の始祖何れも始に記の楯に禱しむ柳成龍ハ唐將を中路に出迎べしと従事官洪宗緑辛慶晋と城を出夜深けて順安に至りぬ路中にて李楊元が従事金廷睦か洛陽より来るに逢ふ日本勢已に鉄嶺に至りぬる由を聞く鉄嶺ハ咸鏡道安辺府の内有り加藤清正兩王を捕へ翌日肅川を過ぎ安州に至り肅州安州共に平安道にて成龍の過る處也遼東の鎮撫林世祿又來り對面して咨文軍門より書付を請取り行在へ送るその翌日國王既に寧邊を出て博川に泊れりと聞て成龍も馳て博川に詣りそれより成龍ハ出立て大定江の邊りに至れば日已に西に傾きぬ遙に後を回望すれば廣通院の野に散卒絡繹來る有り扱ハ平壤も守りを失ひたるかと疑はしく軍官數輩をして馳往て此者共を聚めさせけるに十九人を得て來る乃義州龍川等の處の軍卒にて平壤に往て江灘を守り居たる者也此者共言昨日六月十日敵已に王城灘より江を渡り江上を守りたる軍兵大崩れになり兵使李潤德遁れ走れりと云成龍大に驚き即ち路中に書状を認め軍官崔允元を馳て行在に報ぜしむ夜嘉山郡に至りぬ是日夕内殿博川に至れると聞く蓋し是ハ路にて敵兵加藤清正に北道へ攻入りぬと聞えし故先きへ行き引回へされたりと聞えける平壤陥りたると聞えしかば國王は嘉山に止まり世子は博川より山郡に入られぬ

(卷之四外題)

實朝鮮征討始末記 四

朝鮮征討始末記卷之四

對州 山崎尚長 輯
村 一善 校

小西行長等乘取平壤城之事

日本 六月十四日夜明に朝鮮の軍勢潛に大同江を船にて渡り遂に江岸の日本の陣に仕寄せ喚き叫むて攻込けり小西が勢ハ前後も知らず伏し居たれば驚き騒く處を朝鮮勢きそひかゝりて第一の陣を突く由断したる事なれば思ひ掛なく一陣突立らる第二の黒田の陣より黒き馬に乗りたる武者衆に抽んで逸散に馳來り河邊にて朝鮮人と引組ミ討留たる左も剛強の働烈き鬪戦なり此武者ハ甲州長政なりと後に聞えて各賞譽せり諸陣の兵尋で到る小西が勢左右に開きて鉄砲を以て打すぐめ朝鮮勢四度路に見ゆる處を手々に鎗ひつ提け突て入息を繼がせず攻戦ふ宗義智ハ敵の後ろに廻つて中に取りこめ無二無三に攻立てければ朝鮮勢立つ足もなく敗走しけるに江邊に馳せ行く船に残り居たる者共是を見れとも助け乘せむともせず船を漕ぎ返し狼狽城に逃帰れば逃來る者ハ船に乗る事も叶はず後ろよりは和兵透き間なく追掛る敗卒ども足も地に附ず宙を飛むで江中に走り入り溺死し又ハ討取られけり中にも足ばやに逃げのびたる殘卒共淺瀬より我劣らじと押涉つて城中へ逃入けり日本勢是を見て淺瀬は彼所ぞと各怡び夕陽に及びしかども諸軍一處に打寄せて馬を乗入々々流を切つて押渡る向の岸を守居たる城兵ども一さゝへも支へず城へ逃入けり寄手

ハ安々と江を渡りて残らず向ふへ著き其夜ハ江邊に陣を取り翌十五日早天に城外に押寄せて関の声を擧げしかども城中静りかへつて音もせず扱は夜にまぎれ皆々落失たるか又ハ謀にや有らむと暫く猶豫しけるが猶も心もとなく思ひければ諸將軍士を傍らなる牧丹峯に登せ城中を窺せけるにはや落失たりと見え敵一人も無く寂寞たれば手を碎かずして平壤城を乗取ぬ此所へは兵糧を數萬石こめ置きたるを日本人の手にぞ入にけるいづれも城壘を攻め築き各持口を守り敵を禦ぐ備をなしけり

朝鮮 初め日本の軍兵分つて江沙の上に駐まり陣所十餘屯を作り草を結びて幕とし居たりしが既に曇日を経れども江を渡る事を得ず警備も頗る怠りぬ金命元等城上より望ミ見て以為夜に乗じて掩襲ふべしとて精兵をすぐり擇み高彦伯等をしてこれを領せしめ浮碧樓の下なる綾羅渡より潜に船にて渡りけり初めは其夜の三更に事をはからむと約したりしが兎角して時刻おくれ既に江を渡る比ハ昧爽になりぬ然れども諸軍の幕中を見るに敵猶未起ざりければ進むて第一の陣に突て入る敵も猝にかの事にて驚き擾る朝鮮勢より多くの倭兵を射殺す中にも土兵任旭景先登し力戦して遂に倭兵の為に殺さる此騒ぎに倭軍の馬三百餘匹を奪ひぬかゝる處に程なく諸陣の日本勢悉く起り立大にいたりければ朝鮮勢も退き来り還りて船に取乗らんとしけれども船中の人は敵の已に後ろに迫るを見て中流にし敢て船を寄せざれハ溺死する者甚衆し其餘の軍勢王城灘より流れを横にきりて渡りけれハ日本勢始めて水淺の渉るべき處を知り日暮に衆軍挙て王城灘より渡りけるに朝鮮の灘を守る者敢て矢一つも放たず皆散々に逃走る日本勢は江を渡りても猶城中の備あらん事を疑ひ遅回て前まざりけり是夜尹斗壽金命元は城門を開き盡く城中の人を出し軍器火砲を風月樓の池水の中に沈め斗壽等普通門より出て順安をさして落にける日本勢ハこれを知る者なく一人も追掛る者なし従事官金信元獨り大同門を出て船に乗り流れに従ひ江西さして落にける明日敵軍城外に至り牧丹峰に登り良久く觀望ミ城空く人無きを知り乃ち城にぞ入りたりける最前に國王平壤に至り評議に皆糧餉に事欠く事を憂へ盡く近邊村々の年貢を取り平壤に運送せしむ城陥るに及むで本倉の穀十餘萬石皆敵の物となりぬ此時柳成龍が註進博川に

達し又巡察使李元翼從事官李好閔も平壤より來り倭軍江を渡りたるやうすを云ふゆゑ其夜國王及び内殿も發駕ありて嘉山へ向はる世子ハ廟社神主を奉じて別に他路より發足ありけり抑國王平壤を出られしより人心崩れ潰え過る所乱民共輒ち倉庫に押入り穀物を搶掠め順安肅州安州寧邊博川の處々皆々かたの如く散々にぞなりたりける斯て國王ハ義州に至られしに明朝の參將戴某遊擊將軍史儒各々一手の兵を領れ平壤に向ひ林畔駅に至りしが平壤已に陥ると聞て引還して義州に駐まる明朝より軍を犒ひ銀二萬兩を贈る唐官これを領して義州に至る是より先き遼東より人を明國へ遣はし日本人朝鮮を攻るの變有るを註進すれども評議さまざま異同ありて或ハ朝鮮日本の為に向導するとの疑ひもありけれども兵部尚書石星意を銳して朝鮮へ救援の兵を出さるべしと云ふ時に朝鮮の使申點なる者玉河館に有りしを石星これを庭に呼出し遼東より變を報ずるの文書を出してこれを示す申點声を放て号慟き使者の一行の人と朝夕大に泣き悲しみ援兵を出されむ事を請ひければ石星これを哀ミ已に奏て二手の兵を下し國王を衛らし我為に軍用銀をも請ふに及びり申點已に囀りて通州に至る時に急難を告る使ひ鄭崐壽繼で至りし石星引て火房一と間の四方上下にて紫藥等を焚きて寒を防ぐの室なり朝鮮の俗くつると云にに入りみづから事状を問ひ或ハ流涕に至りしと云ふ此ごろに至ては連に朝鮮より使を遼東迄差向け急を告げ援ひ請且中國に内附内附ハ外國より其國を中國の版籍に入て附従むと云事なりせむ事を乞ふ蓋し日本勢已に平壤を陥れ其勢ひ高きより瓠の水を建すが如なれば皆人謂らく朝夕に當に鴨綠江にも至るべしと思ひ事の危急此の如くなれば内附せむと欲するほどに至りたる也幸に敵軍既に平壤に入り城中に足をとめ數日逗留せしゆゑ順安永柔ハ平壤と咫尺なれども來り犯さず此を以て人心やうく定り餘燼を拾ひ収めて明兵を導き迎へ終に恢復の功を致す此實に天也人力の至る處に非ざるなり

小西行長與明將闕安定館之事

日本 去程に小西撰津守行長宗對馬守義智松浦式部卿法印鎮信有馬修理大夫義統大村新八郎五島大味守以下平壤城

に楯籠りて威を平安道に振ひ常に邊境を侵し奪ひ鴨緑江を渉らむと勢ひはりこみ居たりける王城迄の繋ぎの城は大友左衛門督義統黒田甲斐守長政久留米侍従秀包小早川左衛門佐隆景次第に城壘を構へたり是急難の時に首尾相救はむが為なり然るに七月十八日日本の萬曆二十年平壤の安定館に明の援兵著陣し翌十九日平壤に押寄せける此程日々淫雨にて日本勢由断して居たる處へ明兵急に七星門より攻入る者六七十人なり城内甚た道筋狭く人馬押合たる中へ和軍より鉄炮を多く打掛ければ攻入たる者共を矢庭に悉く打倒し行長諸將と等く城を出て鬪戦するに明將一員忽ち鉄炮に中つて死しければ是を見て明軍一度に咄と大崩れになり逃走り切所に行掛りては崖より落ち或は深田泥ふかの中に追はめられ死傷夥し又一員の明將殘卒僅にて漸く命を免れ逃げ延びけり日本勢明軍と初めての手合にて鬼頭獅面などの兜を著金龍白象等の馬面を掛け軍粧甚だ異形に甲冑旗旌あたりを曜かしければ明軍の群馬見なれざるゆゑにや左右に走り後に居込みけるを見て和軍員を立関を作り諸勢一度にきそひ掛りけるゆゑ明兵手も無く敗北す諸將明軍に手並を見せ長追せず軽く軍勢を引入れけり

朝鮮 同七月遼東の副総兵承訓兵五千を率ひ来り援ふと先き觸れ至りぬ宣沙浦の僉使張佑成ハ大定江の浮橋を造り老江の僉使閔繼仲は晴川江の浮橋を造り明兵を渡さむと支度す柳成龍も前むで安州にゆくこの比倭軍は平壤に足をとめ久く出ざりければ巡察使李元翼ハ兵使李賡と共に順安に駐り都元帥金命元ハ肅州に居たり斯て祖承訓義州に至り遊撃史儒其軍を以て先鋒とす祖承訓は乃遼左の勇將にて度々北虜と戦ひて軍功ありければ謂へらく此たびの日本勢も必討取るべしとて嘉山に至りし時朝鮮の人に問ひけるは平壤の日本勢もはや走るならむか其者對て未退かずと云ふ祖承訓酒を擧げ天を仰ぎ祝して云く敵猶彼に在り必ず天帝我をして大功を成さしむる也と喜びけり是日順安より夜の三更に軍を發し進むで平壤を攻たりける折から大雨ふり城上に敵の守兵もなかりしかば明兵七星門より攻入しが城内の路狭く委巷多く馬足も展びがたかりしに日本勢ハ險阨に依て鳥銃を亂發しければ遊撃史儒丸に中りて即ち斃れける其外人馬多く死す祖承訓も遂に軍を退ける敵も急に追ざりける後軍の明兵ハ泥濘の中に陥りて自由する

事能はざる者共悉く敵の為に害せらるる祖承訓は残りし兵を引きつれ順安肅州を打通り夜中に安州の城外に至り馬を立て譯官通朴義倫を呼て云ひけるは我が軍兵今日多くの敵を殺しぬれども不幸にして遊撃史儒手を負て死たり其上天の時利あらず大雨泥濘にて敵を殲す事能はず猶軍兵を増て又進發しべし汝が宰相朝鮮のに告て動く事なかれ浮橋も亦撤く可かたずと云ひ畢て馳て両江大定江浮橋を渡り軍を控江亭に駐めぬ蓋し祖承訓戦ひ敗れ膽をひやし敵の追討せむ事を恐れて前に二江を阻て防がむと思ひし故に斯くは急ぎし也柳成龍ハ従事辛慶晋をして往て慰めしめ且糧饌を送りぬ祖承訓ハ控江亭に留る事二日なりしが連日夜大雨ふり諸軍野陣にて衣類兵具盡く濡れ皆祖承訓を怨ミけるゆゑ退て遼東へ還りける柳成龍ハ人心動揺せむ事を恐れ仍安州に留りて後軍の至るを待にけり

加藤左馬助乗取番船之事

日本 和軍ハ兼て水陸に勢を分つて敵を攻むと評議し全羅より遼て西海道に出べしと志しける船手の人々ハ九鬼大隅守嘉隆藤堂佐渡守高席脇坂中務少輔安治加藤左馬助嘉明を始として此度武勇を顕はし譽れを異國に残さむと面々心掛け居られける藤堂高席心早き勇将なれば手勢五百人を帥めて密に船を乗り出し唐島朝鮮にては巨濟島と云にに浮ミたる番船を目がけて漕つける番船共篠をつく如く矢継ばやに散々に射る藤堂家の勇士共射れとも打ども事ともせず一番に藤堂新七郎敵船に飛乗る續て藤堂作兵衛を始めもくと乗り移りて手々に薙まはり忽ち敵船数十艘乗取たり味方の兵船共これを見て我劣らじと船を乗出し逃る船に追すがふて百餘艘乗取皆唐島へ打上れば已に夜半に及びけり此勢ひに唐島を放火まくり首百餘級討取り其夜は唐島に陣を取り翌日諸將打寄り各軍評議有ける中に加藤嘉明ハ用事を調ふる体にて何となく座を立て若黨を招き向ふに見ゆる敵の番船を乗り取るべし手船用意すべしと云ひ遣し左あらぬ体にて坐に帰り居たりける手ぐすね引居たる勇士共此密意を聞と等く小船三艘に取乗りて飛が如くに漕出す目附并諸將これを見るよりあれよく加藤の手の者抜け懸するぞ制し留めよと怒り罵りける嘉明ハ知らぬ体にてあるは左馬

助が小姓共と見るは僻目か某にも知せず卒尔に乗出せり是ハ自身まゐりて押留めずむは留るましとて彼者共を呼返してまゐらむと云捨て兵船一艘に打乗押出す嘉明ハ思ふまゝに諸將を出しぬき揉ミに揉むて急ぎしかば漸く三艘船に追附きけり加藤が一手の勢最初の密意の差圖にて用意せし事なれば吾一にと追すがつて漕出す二里計向ふに朝鮮の大船四十艘餘飾り立て備へたり又一里計向ふに大船數艘幾重ともなく乗り浮めたれハ和軍小勢を以て軽々しく懸らんやうはなかりけれとも諸將加藤に出抜れたるを口惜く思ひ我もく船に取乗り押出さるかゝる處に加藤が船を目懸けて前列の四十艘計の番船押来り箕手なりに加藤が船四艘を追取り巻て指詰引詰散々に射れば嘉明これを見敵船の間五六間に過し鉄炮を揃へ心をしづめ打てやくと下知につれ鉄炮をつるべ立て打けるに敵船の士卒二十人計矢庭に打倒しけるこれに驚き騒ぐ処へ和軍水主楯取汗水になつて第一の番船に押著け手々に鍵を打掛々々引附け佃次郎兵衛土方長兵衛塙團右衛門荻作右衛門等其外の勇士共競ひかゝつて敵船に飛乗りける此勢ひに畏れけるか一人も見えざりければ何れも不審に思ひ踏板を引上げ見れば皆船底に竄れ入て半弓を引しほり矢先を揃へて待居たり土方長兵衛を始め剛勇の輩白刃を振て一度にどつと飛入り元來怯弱なる朝鮮人つがひたる弓矢を捨手を合せ平伏し涕泣するを悉く切て捨て助け来りたる番船へ押著け飛乗々々切て廻りけり最初一艘切取られたる手並に畏れ更に手向ふ者なく匍匐になりて刃を請け或ハ海へ飛込み空船になりたるを十艘計乗取りけり後くればせの諸將の船共加藤が軍士先きかけして手柄を顯はしたるを見て弥怒り會釋もなく向ふれる胴勢の船を乗り取らむと揉ミにもんで押附る勢ひに怖れ敵將と見えたる樓船一番に北け退くこれに續いて総番船一同に逃げ走る味軍これに氣を得て我一に乗り取らむと北るを追ふ事頗りなりかかる處に敵船にはかに太鼓打立総船一度に取つて囲し一文字に列りて各船より指詰引詰さむく射る矢恰も颯風に急雨の横切るが如く更にも向け難く和軍是に射立られ手負死人數を知らず中にも久留島出雲守討死有しかば是に辟易して諸船進ミ得ざりければ諸將自身手を碎き士卒を恥しめ衆を勇めて鉄炮をつるへ立喚き叫むで攻たりけるが此處の番船ハ楯にて能く圍ひたれば此方の鉄炮ハ防ぎ彼方の火炮ハ

防ぐ事能はず和船數十艘打碎かれ焚立られ諸船戦ひ屈して既に退かんとする處に脇坂安治大に怒り汝等朝鮮の地に一命を隕さむとは兼て覺悟せざるや討死して名を後代に残せよと大音聲にて士卒を勇め敵船の真中へ乗入て火出る計りに挑み戦ひけり元來加藤の軍士等に先を越され其憤りより假初に起りたる船戦にて後度の手當なく只一と揉にもみたるのみにて而も敵は大勢味方ハ小勢なれば過半討死し安治も必死の覺悟と見えければ郎従等抱き留めちつとも働かせず此たびの合戦今日に限るべからず爰にて討死は犬死たるべしと大に諫め別船に無理無体に乗せ移らせ退かしめ何れも大に血戦して悉く討死し船は敵に乗り取られけり九鬼嘉隆藤堂高席士卒に向ひ斯く難戦に成ては必死ならでは引取らわぬ物ぞ死ねよと下知せられ爰をせんと、手を碎き力戦あり中にも嘉隆ハ船戦の功者にて水主に向ひ敵船をば取むと働くべからず敵船の真中を乗割て彼所此所へ通るべし射るともひるむべからず敵の船に當らぬやうに引取れよと下知して幾度も乗廻り々々して諸船も稍々と引取けり

元來朝鮮の番船ハ材木をたゝみて造りたるゆゑ双方行當りては和船ハ損じ砕けたりと朝鮮の判事共今に語り傳へけり嘉隆の下知に敵の船にあたらぬやうに引取れと有し事左も有べし朝鮮勢も終日の戦ひに士卒つかれぬるゆゑか和軍退くを追及なし其日の軍ハ止ミにけり扱も脇坂

安治ハ今度の不覺一身の瑕瑾なりと思ひ目附衆に達し切腹すべき旨望まれける是を聞て藤堂高席九鬼嘉隆目附衆に對面有て今度の船軍中書一人の不覺に非ず典廐の手勢に先を越され我一とはやりて手船を押出すに中書の船一番に適船の中へわつて入りけるを以て敵船追取り卷て難儀に及びたる也我等か船ハ後れたるゆゑ左程に及ばざりし也然らば今度の中書の瑕瑾と云はるゝ處ハ我々も遁れざる處なり此旨宜く言上に預るべしと有しかは目附衆にも各の義氣を感じられ軍の次第委細に名護屋に注進いたしぬる上ハ其左右を待て其上にての思案然るべしと有ければ各理に服し命を待たる處に太閤より仰下されけるは安治の働き實の勇士と謂つべし我外國を征伐す加程に粉骨を碎く働き幾度も無むばいかでか勝利を得むや汝等弥忠勤を勵むべしとて其忠戦を感ぜられしかば安治上意を承り忝き事これに過べからずと大に悦び勇まれ高席嘉隆も安心有り各いよゝ忠戦を盡されけり

朝鮮 全羅道の水軍節度使李舜臣慶尚の右水使元均全羅の右水使李億祺等と大に日本勢を巨濟の洋中に討破りぬ初

め敵軍既に陸に登りけるに元均敵の大勢なるを見て敢て出撃す悉く其軍船百餘艘及び火炮軍器を海中に沈め獨手下の裨将李英男李雲龍等四艘の船に乗り昆陽海口に至り陸に上りて敵を避んと欲す是に於て手下の水軍萬餘人散々に成行けり李英男諫めて云く公ハ命を受け水軍節度となり今其軍を棄て陸に上る後日罪を按せられたる時何を以て自ら解かむや如し兵を全羅道に請ひ敵と一戦し勝利ならむば然後に逃られん事未晩かるまじと云元均これを然りとして李英男をして李舜臣か許へ往て援ひを請はしむ李舜臣辞するに各分界有れば國王の命令に非ずして豈擅に自ら境を越ゆべけんやと云ふ元均又李英男をして往て請はしむ凡往返する夏五六度に及びぬ李英男が囲る度毎に元均船頭に坐して望ミ見て痛哭す既にして李舜臣板屋船四十艘を率ゐ並に水使李億祺と約し巨濟に到り元均と兵を合せ進むで敵船と身乃梁と云處にて遇たり李舜臣云此地海狭く水淺けれハ掛引に不自由なり如し伴り退きて敵を誘ひ出し海の潤き處にて相戦はむにはと元均ハ憤りに乗じ直に前むで搏ち戦はむと云ふ李舜臣云く公は兵を知らずかくの如くむば必敗れんとて遂に旗を以て船々を揮きて退きければ敵兵大に喜び争ひてこれに乗り追ふ既に隘口を出づ李舜臣鞭を打鳴しければ諸船一同に齊く棹を囲し海中に擺き列り正に敵船と對頭し相距る夏數十歩なり是より先き李舜臣創て龜船を造る板を以て上を張る其形穹窿して龜の如く軍士水夫も皆其内に在り左右前後に火炮を多く載せ縦横出入自由なる夏梭の如く敵船に遇て連りに大砲を以て打碎き諸船一時に攻立ければ烟焰天に漲り敵船を焚く事數を知らず敵船樓船の高き處に櫓を施し紅股彩氈を以て其外を飾りたるか是も亦大砲の為に打破られ敵軍悉く水に赴き死したり其後敵軍連りに戦ひ破れければ遂に釜山巨濟に逃入りて出ざりけり此度の勝利聞えしかは大に喜び國王より李舜臣に一品の位を加べしとありけれどもあまりの恩賞なりと評議ありて正憲大夫品正二の位に陞り李億祺元均何れも嘉善大夫品從二に陞りけり是より李舜臣ハ三道慶尚忠清全羅の大船軍を引率れ閑山島に在陣し敵軍の西に下る路をさへけり

日本 筑紫上野介廣門軍勢を率ゐて全州に乱入し熊嶺に攻寄たりこの處ハ重々に柵を振りたり筑紫この砦何程の事かあらむと敵を見慢り攻支度をも用意せず只一舉に採み落さむと攻登る城兵共寄手を目の下に見おろして指詰引詰散々に射る筑紫の勢若干討れ進み得ず寄手一と先山下に引退き一と息つきける城中も追慕ふ程の勢ひなしと見えて只城壁柵内を守りたる計りなり廣門後隊の荒手勢を雜へて更に進むで攻登る城中矢種盡たる哉と見えて射出す矢最初と違ひはかゝしからず寄手氣に乘し曳々と聲を出し攻上る此城やかて攻落されぬべく見えたる處城兵も必死と思ひ極めたるにや城門を開き打て出寄手の勢と大に力戦すと云へども和軍の勇猛に比すべくも有ざれば城將も戦死し士卒も過半討れて大に潰えて城中へ逃げ入たり寄手この時追すがふて攻入なば忽ち落城すべきに筑紫勢も終日の戦ひに身疲れ氣も屈せしかば廣門も士卒を従へ引取り明日上野介廣門重て山下に押寄たりしが城のやうす前日と違ひいかさまにも後詰の荒手入來りて籠りたる体にて林木の間に旌旗等見え夜ハ篝火を焼き連ねたれば寄手も昨日の戦ひにて手勢多く討れし上なれば是等に見あぐみ氣おくれしたりければ敢て攻むも能はず物見など出して窺はしめ数日守りつめて居たりしがいづれにも城中多勢に成り而も荒手加はりたりと見えたれば所詮敵しがたらんと思案をなし終に陣を拂ひて引退く城兵も敢て追慕はざりければ廣門も安々と引取りけり

朝鮮 時に敵の軍勢慶尚右道より全州の界に入りけるを金提の郡守鄭湛海南の縣監邊應井等熊嶺にてこれを禦く木柵を結びて横さまに山路を断ち切り將士を指図し終日大に戦ひ敵軍を射殺す事數を知らず敵既に退かんとせしに日暮矢盡きしかば敵勢ひを得て更に進むて攻たりければ鄭堪邊應井俱に討死し士卒も散々に成行ぬ明日敵全州に至ければ官吏走らむとしけるに全州の人前の典籍李廷鸞と云者城に入り吏民を倡ひ呼ひて固く守りけるが此時敵の精兵も昨日の熊嶺の戦ひに多く討死し氣力も已に盡きたりしに監司李洸が計にて又疑兵を城外に設け晝は多くの旗幟を立夜ハ炬火を列ねて山に満しむ敵も城下に到りたれども數篇環り視て敢て攻ずに去りけり熊嶺にて戦死せし朝鮮勢の屍を悉く聚めて路邊に埋みあまた大なる塚を作りて木を其上に立て吊朝鮮国忠肝義膽と云文字を書附たり是蓋し

其力戦を嘉して也是に由て全羅の一道ハ全き夏を得たり

小西行長於平壤與朝鮮諸將迫合戦之事

日本 文祿元年^{明の萬曆二十年}八月朔日小西行長等か楯籠りたる平壤城に朝鮮勢四千餘騎にて押寄たり城中よりも軍勢を出して戦はしむ朝鮮勢の内より精兵の射手を撰むで和軍を射させけるに行長が先手の士卒矢庭に十餘人矢に中り殪る是に怖れて進み得ず猶預してためらふ處に城中より後軍の多勢馳せ來り一度に嚏と突懸る縦横無碍に切まくりければ朝鮮勢若干討れ立足もなく順安さして引返けり味軍も長追せず人数をまとめ城中へ入りにけり

朝鮮 八月初一日巡察使李元翼巡使李贄等兵を率ゐ進むて平壤を攻けるが勝利なくして引退く時に李元翼ハ李贄と共に數十人の兵を率ゐ順安に在陣し別將金應瑞等龍江三和甌山江西四邑の軍を率ゐて二十余屯を作り平壤の西にあり金億秋ハ水軍を率ゐ大同江の下流にあり以て犄角の勢ひをなしぬ是の日元翼等平壤の城北より兵を進め敵の先鋒に行遇二十餘人の敵を射たふせしが既にして敵大勢馳來りければ軍士共驚き散々に成り江邊勇力の士手負討死多かりければ遂に引返して順安に屯せり

小西行長與沈惟敬会谈之事

日本 九月明の遊撃將軍沈惟敬と云者順安に到りて書を小西行長に馳せて問ふ朝鮮何の虧負する夏有て日本何ぞ擅に師旅を興す哉と行長其書を見て即ち回報し面り見えて事を議せむ事を述ぶこれに因て日を約し沈惟敬出來りける故行長義智蘇長老等を伴ひ出て城北十里^{日本の一里}の外に會す惟敬に告るに太閤朝鮮を征するの故を以す惟敬乃ち行長と和好を議し因て約するに吾帰て明朝に報し取計ふ道有べし五十日を限期とすべし其間日本人平壤西北十里の外に出て搶掠する夏勿れ又朝鮮人も十里の内に入て日本人と争ふ夏勿れと乃ち地界に木を立て禁標となし立別れ去りけり

行長城に帰り兵を斂めて働かず既にして五十日過けれども惟敬到らず是において行長義智大に攻城の具を修ひ軍兵を發して直ちに進む事を欲しけり

朝鮮 九月明朝の遊擊將軍沈惟敬朝鮮に来る是によりさき祖承訓既に敗軍し敵愈驕りたかぶり書を朝鮮に送り中に群羊放一席の語あり是ハ群羊を明兵に喩へ席を以て自らにたとへ誇りたる詞なり朝夕西に攻下らむとする由を聲言ければ義州の人皆家財を荷なふて立居たる計なり沈惟敬ハ本浙江の民なるを兵部尚書石星以為日本の情を諳むじたりとて遊擊將軍の号を假して遣はしけるなり沈惟敬既に順安に至る時に日本の變災猝に發り且人を殘ひ苦しむる憂甚しければ人々惴れ恐れて敢て日本の軍營を窺ふ者なし沈惟敬黃いろの楸に書翰を裹み家丁一人に背負はせ馬に騎り直ちに順安の普通門より入り書翰を日本の將に送る行長其書を見即回報し面談して憂を議せむと云送りければ沈惟敬將に往むとす人皆これを危ぶみ止むる者多し沈惟敬笑て云彼焉ぞ我を害せむやとて三四人の家丁を従へてこれに赴く行長義智玄蘇等盛に兵威を陳ね出て城北十里の外降福山の下に會す朝鮮の軍兵共は大興山の上に登り望ミ見れば日本の軍勢夥しく劔戟雪の如く光りかゞやき立並びたるに沈惟敬馬より下り日本の陣中に入る日本人群集して四面を取り圍ミけるゆゑ拘執らわしやと疑ふに日暮に沈惟敬還り来りぬ沈惟敬日本人と約し我明に還り報しなば當によき取計ひあるべし日數五十日を以て期とせむ日本勢平壤の西十里外に出て犯し掠むる憂無るべし朝鮮人も十里内に入て日本人と闘ふまじと云ひ堅め乃ち界目に木を立て禁標として去りぬいかなる事を談じたるにや朝鮮人測る者なかりけり

征韓記曰、沈惟敬者、亡命無頼之人也、嘗潛来于日本被知於行長、帰国之後、通于吳妓陳澹如僕有鄭四者、數年以前赴日本而被執、是年逃帰、逢惟敬而詳語日本之事、惟敬為人頗有所志、聞鄭四言謂方今大明動干戈以防日本、当此兵乱、吾將樹勲功矣、即赴京師揚言曰、我能知日本之事、時司馬石星掌朝鮮之事、其妾文表茂偶遊澹如之宅、聞惟敬之言、而薦之於石星、石星召惟敬而語、大喜曰、吾得人也、祖承訓敗軍之後、石星謂不起大軍、則與日本

相戦尤難乎、因之先遣惟敬、説和好之議、而後欲聚大兵、惟敬請金錢貨于石星曰、以此賄于日本諸將、而結和議、石星聽之、於是惟敬千金、買蟒衣玉帶花幣而入朝鮮、先遣人于平壤、挑行長之意、行長亦素喜和議、與惟敬會于乾伏山麓、惟敬極陳和好之為善、行長標題七箇條曰、若悉可之、則吾從和親之謀矣、惟敬先皆同之、是故行長及諸將皆信惟敬之言、待其報至、而欲撤平壤之戍、增田長盛石田三成大谷吉隆亦皆如此、故不攻朝鮮諸城、唯黯焉消日也、行長贈書於惟敬、其趣曰、日本絶勘合船既久矣、是以秀吉數年雖求和親于朝鮮、而朝鮮不應日本之望、故秀吉勃然進節旄鷄林也、今足下來于平壤以欲結奏和交、是国家承平之基乎、足下奏明帝遣官使于日本、為交親之左券、則何事加之焉、官使若來、則以五十日為期矣、惟敬婦大明雖報之不經臣之衆議則其事未決

宇喜多秀家攻落朔寧之事

日本 宇喜多秀家ハ京城の守りなりけるが京畿道の新監司京城を取返さむと計略を廻らし或は擄となり又は倭軍に降つて城中にある者共を言ひふくめ返り忠をなさしめんと日々人を城中に入れて理を説せしかは是に一味をなす者數百人に及び或は倭軍の謀を知らずると云ひ又は城中のやうすを通ずるとて往來する者多しこの事かくれなかりしかは秀家よき謀こと出来たれ迎降卒擄の中に剛愎不頼の者に利を啗しめて味方の犬となして敵の動靜を聞すましか夜潜在監司が居所る朔寧郡に押寄て俄に関を作り鉄砲を發ち喚き叫むで攻入たり忍びの者火を掛け焚立ければ朔寧郡の軍兵ども上を下へと騒動する處を備前の兵士共各片手手に薙廻りけるゆゑ討る、者數を知らず寄手より手を分つて追討なハ一人も残らず討取らるべきに朔寧を攻落しぬる上は最早長追すべからずとて速に諸勢を打納けり然る處に亂軍の中に監司討れたる由聞えしかば秀家士卒に下知して監司が首を大路に梟し威を示しけり

朝鮮 是年の秋權微に代りて沈岱京畿道監司となり義州より住所に赴きける京畿道の難儀ハ他道よりも甚しく敵軍日々に城外に出て所々を焚掠め靜なる所とては無く前役の監司及び守令以下悉く人知れぬ片遠所に身を忍び行列を

も立てず微服して潜に往還し或は屢厥居を定めずして以て敵の患を防ぎぬ沈岱ハ敵を畏れはゞからず巡行度毎に先觸を出し平日の如く旗を建角を鳴して通行せり京畿道の軍兵を聚めよせ悉く我身に随へ聲言けるは京城を恢復さむと欲ふとて日に人を城中に入れて招き集め約束を設け内應をなさしむ城中の人事定りて後ち敵に組みせしとの罪を獲む支を恐れて連名書附を以て監司の方へ赴き内應せんと云出る者日に千百を以て數ふ皆それ／＼に名目を附て曰く約束を聴くと曰く軍器を出さむと曰く敵情を報するなんとて人々往來阻て無りけり中には亦敵の耳目となりて來り朝鮮の動靜をうかゞふ者も多く相ひ離り出入しけれども沈岱これを信じて疑はずこの比沈岱朔寧郡に在りけるが敵是を伺ひ知り潜に大灘を渡り暗夜に乘じ襲ひ攻むれば沈岱驚きあわて、衣服を肩に掛て走出ける敵追かけこれを害す時に軍官張姓なる者も同く死す敵退いて後に京畿の人權に朔寧郡中に殞す數日をへだ、りて敵復た出て其首を取り鐘樓の街の上に懸けたり京城の人其忠義を哀み相ひ與に財物を率ひ來り守り居たる日本人に賂を以て贖ふて其首を出し函に納て江華に送りぬ敵退て後ち骸と一處にして故郷に還し葬ふりしめけり

忠州原州春川等在陣諸將與朝鮮軍迫合合戰之事

日本忠清道日本の軍勢慶尚道より忠清道江原道を経て追々京畿に攻入りたる時忠州江清道原州江清道釜山より京城への要路なれば奉行の内忠州には増田右衛門尉長盛原州には石田治部少輔三成在陣し京畿の驪州へ通じて京城へ往來絶る事なかりけり然るに江原道の守將軍勢を摧し驪州の龜尾浦にて増田の勢と迫合に及びけるに朝鮮勝利を得たり石田三成原州の陣より京城に赴きけるに朝鮮勢精兵の射手をすぐり立て驪州の馬灘にて各船に取乗り矢継ばやに散々に射立ければ石田軍勢矢庭に數十人射仆され大に潰え敗軍に及びけり茲に毛利壹岐守ハ春川に陣を取り居たりけるに朝鮮勢手を合せ押寄ると聞えしゆゑ毛利の士卒に向ひ爰にては一武略を運らすべしとて我陣營より十町計り前面に能き奸場の森木有けるに勢を分け伏兵を設けたり案の如く朝鮮勢押來り彼の森を左に見て馳せ通り毛利勢と挑み戦ひ

ける斯て軍半なる比伏兵一度に起き立鬨を造り朝鮮勢の後により打て掛り前後より取圍み一人も餘さしと攻戦ふ朝鮮勢前後に敵をうけ途を失ひ一度に墮と崩れ立只をうくと叫び合ひ算を乱し四方へ逃げ走る日本勢ハ敵の立つ足もなく敗走するに乘らむで備を乱しまはら掛けに追打數百人討取りけり毛利が勢一戦に勝利を得思ひのままに郡縣に火を放乱妨し威を示しけり

朝鮮 江原道の助防将元豪ハ敵軍を亀尾浦にて撃ちこれを殲ほしけりこの時敵の大陣忠州及び原州に在り營を連ねて京都に續きたり其忠州に在る者ハ路を竹山陽智龍仁に取つて往来し其原州に在る者ハ砥平楊根楊州廣州よりして京に抵る元豪敵を驪州の亀尾浦にて殲ほし利川の府使邊應星ハ船に射手を載せ霧に乗じて敵を驪州の馬灘に邀り敵を殺す事頗る多し是に由て原州の敵ハ往來の路を遂に断ち悉く忠州の路よりのみ往來せり利川驪州楊根砥平等の邑民共敵の鋒先きに討洩されしは元豪が功なりと皆人々思ひけり巡察使柳永吉又元豪を催促して春川の敵を討しめむ元豪既に亀尾にて勝ちたるゆゑ頗る敵を輕むずるの意あり敵は元豪が將に至らむ事を知り伏兵を設け待居たるを元豪知ずして兵を進むるに伏兵發りて遂に爰にて殺されたり是に於て江の一道に敵を禦ぐ者なかりけり

福島勢在番永川慶州落城之事

日本 去る四月以來切取たる處の諸道の郡邑には軍兵を分け各番手持にて守りける慶州ハ福島左衛門大夫正則の勢番手持にて永川慶州の内も福島勢守り居たり朝鮮勢拂曉に押寄せ攻戦ふ不意を討れ日本軍鬪ひ負けて敗北に及びしゆゑ永川は朝鮮勢取復しぬ茲に又慶尚道の部将も兵を引具て慶州の城へ攻寄せたり此城には福島正則が家臣多川内記番手の勢を以て守り居たるが士卒を励まし鉄炮を厳しく發ちかけ時を見合せ討て出敵を追ひ退け、る或夜敵よりことも夥しき大砲を城中へ發ち懸け本丸の庭に落けり番手の者思ひも寄らぬ所ろに聞きたる事も無き響きまことに百千の雷一度に鳴落るが如くにして飛丸數千發し出てこれに中りて即死する者二三十人又中らざる者數十人こげ仆れ

絶入せり事しづまりて後薬を與へ水を呑しめて漸く人心地出來りけり倭軍大に驚き怖れ何れも舌を巻き翌日内記士卒を従へ城を棄て西生浦へ引取りけり

朝鮮

訓練副奉事軍士の才を試み藝を練る役權應銖鄭大任等千餘人の郷兵を以て永川の敵を圍みしに軍士敵を畏れて進まざり

けるゆゑ權應銖數人を斬りければ士卒我先にと奮ひ進み城を踰えて打入り敵と城内の路にて戦ひしが敵勝利なく奔りて倉中に入り或ハ明遠樓に上るもありしを朝鮮の軍勢火を掛けたりしかば悉く焼死して臭き事數里に及べりたま^く討洩されたる敵數十通れて慶州に帰りけり是より新寧義興義城安東等に居ける敵も皆一路に集りしゆゑ左道の郡邑保つ事を得たりしは全く永川の一戦の功しなり

左兵使朴晋ハ初め密陽より奔て山中に入りしに前兵使李珪が城を棄て逃げ奔るを以て其居る處にて誅せられ其代りとして朴晋を兵使とす時に敵兵行在近邊に充滿して南に通ぜざる事久しければ人心揺動如何ともなす所を知らざりけるに朴晋兵使になりたると聞及びて散民ども稍集まり守令も段々山谷の中より出て其處の事に莅み始めて人々朝廷有る事を知りぬ權應銖が永川の城を復すに至りて朴晋も左道の兵一萬餘を率ゐ進むて慶州の城下に攻寄せければ敵は潜に北門より出て後ろの陣に廻り不意を襲ひけるゆゑ朴晋奔りて安康に還り其夜又人を遣はして慶州の城下に潜ミ伏せ置き震天雷を發しさせれば城中に入り客舎の庭中に墮つ日本勢其製法を曉らず争ひ聚りてこれを觀相與に推轉して諦に視たりしに仕込み置たる丸の中より發しおこり其聲天地に震ひ鉄片星の如くに碎け出て中りて即座に斃る、者三十餘人未だ中らざる者も亦顛れ仆し良久して起上り驚き懼れざる者莫かりき其製法を測り得ざるゆゑ皆^く以為神也と云これに因て明日遂に残らず城を棄て西生浦に通れ帰りぬ朴晋遂に慶州に入り残りたる米穀萬餘石を得たり此事國王に聞え朴晋ハ嘉善從二品に陞り応銖は通政正三品に陞り大任ハ醴泉の郡守なり抑此の震天雷と云ハ古へ其製無ししに軍器寺の火炮匠李長孫と云者創めて作り出せり震天雷を取てこれを放せは飛ぶ事五六百歩に至りて地に墮ちて良久して火鉄丸の中より發する仕掛にて敵軍最も此物を畏れしとなり

朝鮮征討始末記卷之四終

對州 山崎尚長輯 村倉治郎藏板

嘉永七甲寅初冬刻成

京都 三条通升屋町

出雲寺文治郎

心齋橋通博勞町

大坂 河内屋茂兵衛

心齋橋通安堂寺町

秋田屋太右衛門

江戸 本町三丁目

和泉屋善兵衛
發行